

music
UP's

TAKE FREE!!
2020.9.20

Vol.191



Buck-Tick

Interview ... 浅井健一 & THE INTERCHANGE KILLS、INORAN、GLIM SPANKY、CHICO with HoneyWorks、三澤紗千香

Editor's Talk Session ... 『コロナ禍を背景にしたライブハウスの発展』 / music UP's Q! ... 『最近買って良かったもの』



写真上段時計回りに、ヤガミ・トール(Dr)、今井 寿(Gu)、櫻井敦司(Vo)、樋口 豊(Ba)、星野英彦(Gu)

この環境下で生まれるべくして生まれた不幸を振り払うお守りのような作品

壮大なスケールで巡り巡る愛と死を表現した『No.0』から約2年。33度目のデビュー日にBUCK-TICKがニューアルバム『ABRACADABRA』(アブラカダブラ)をリリースする。新型コロナウイルスの蔓延による影響で、レコーディングが中断されるというアクシデントもあった今作には、こんな世界だからこそ伝えたいBUCK-TICKからのメッセージが込められている。

最新作『ABRACADABRA』とThe Beatlesの『Revolver』の接点

BUCK-TICKがデビュー日の9月21日にリリースする22枚目のオリジナルアルバム『ABRACADABRA』を初めて

実際にシンプルだった。それは「FUNNY」でも「INTERESTING」でもなく、「AMAZING」がとてに近い。同時に「ああ、好きでいて本当に良かった」と湧き上がる喜びを噛み締めたのだった。

先駆けて今作を聴いた人たちと話をすると、「BUCK-TICKの初期を感じた

とが90年代初頭のBUCK-TICKを思わせる」など、その印象や感想はさまざままで同じものがない。かくいう筆者が思い浮かべたのは、バンドの転機と言われる『Revolver』(1966年発表)をリリースした辺りの中期The Beatlesだった。それはM4『SOPHIA DREAM』の歌詞に、『Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band』(1967年発表)収録の「Lucy in the Sky with Diamonds」を呼び起こすようなフレーズがあるからではないかと言われたら、きっとそうなんだと思う。『Revolver』や『Sgt. Pepper's ~』はサイケデリックなアルバムとして知られているが、『ABRACADABRA』はそういうわけでもない。シンプルな音作りを軸に、オルタナティブ、サイケデリック、エレクトロなどさまざまな要素を散りばめた多彩な作品である。

しかしながら、実験的かつ革新的な今作の佇まいが、この頃のThe Beatles作品を思わせるのだ。『Revolver』のアルバムタイトルが、もともとは「Abracadabra」だったという偶然も興味深いではないか。さらに余談になるが、The Beatlesは『Revolver』をリリースした年に、コンサート活動を終了した。さまざまな要因から自らそれを選んだThe Beatlesと、このコロナ禍でコンサートの自粛を余儀なくされた現代のバンドの状況を重ね合わせるのはいささか乱暴だが、「コンサートのない日常」という状況もまたひとつの共通項として感慨深く思った。

さて、BUCK-TICKの話に戻そう。『ABRACADABRA』は近年の作品の延長線上にありながら、描かれている世界観はそれらとは一線を画す作品になっている。『或いはアナーキー』(2014年発表)、『アトム 未来派 No.9』(2016年発表)、『No.0』(2018年発表)の3作品は、稲垣足穂的SF観という共通したビジュアルワークを持ち、シュールリアリズムやスチームパンクといった世界観を、大きなスクリーンで映像を観ているかのような壮大さと鮮やかさで描いていたが、『ABRACADABRA』はどちらかと言えば広さではなく深さで、より人間の深部へと誘う。同じように映像を観ているという感覚はあるが、こちらはまるでテレビを観ているような感じがするのだ。今まさに画面の向こう側で起きているようなニュース性があり、飽くなき矛盾を繰り返す人間の営みや感情が物語として描かれている。そこには生と死、善と悪、太陽と月など、

相反するものが表裏一体となって存在する。面白いのはイメージされるそのテレビが薄型の液晶ではなく、思いっきり分厚いブラウン管であることだ。最新の4K画質のようなクリアさではなく、ブラウン管特有のザラザラとしたレトロ感も、今作のエッセンスになっているのではないだろうか。

実験的遊び心とシンプルさの対比が色濃く出た作品

今作を時系列で追うと、一番古い楽曲はM10「黙たちの夜 YOW-ROW ver.」、次にM11「墮天使 YOW-ROW ver.」となる。シングルとしてリリースされたバージョンは、どちらも横山和俊のマニピュレートによるバンドサウンドを前面に押し出したずっしりとしたボトムのシンプルなおロックチューンだったが、アルバムに収録されたのはタイトルにも表記されている通りYOW-ROWのマニピュレートによるもの。彼の持ち味が色濃く出たヘヴィなデジロックバージョンは、全体的にキャッチーさが印象に残るこのアルバムの重厚感の部分を担う。続いて先行シングルとしてリリースされたM12「MOONLIGHT ESCAPE」は、開放感のあるキャッチーなメロディーと櫻井敦司(Vo)の伸びやかなテナーヴォイスが印象的だが、そこに乗せた歌詞のテーマは重い。児童虐待やイジメといった理不尽な環境から「逃げていいんだよ」という逃避、解放の歌である。この曲を筆頭に、今作で櫻井が綴った歌詞からは曲によって濃淡はあれど、そこはかとない厭世観が感じ取れる。さらに、「墮天使」の時に語っていた刃先も、引き続き自分自身に向かったままだ。それが分かるのは「MOONLIGHT ESCAPE」のカップリング曲のバージョン違いであるM7「凍えるCrystal CUBE ver.」。《死んでいる生きてもいるか》から始まるこのメディアムナンバーは、CUBE JUICEのマニピュレートによって、より凍りつくような冷たい表情に仕上がった。《凍える月が滑るこの手首にそと》—— そっとするほど美しい、櫻井の文学的表現力には感服した。星野英彦(Gu)作曲の楽曲は「凍える」とM5「月の砂漠」、M9「ダンス天国」の3曲。「月の砂漠」は冒頭のコーラス部分が思い浮かんだことから「遠いところ」をイメージして作曲していったという。その

イメージを汲み取った櫻井は、童謡の「月の砂漠」をオマージュしたような世界観を描いた。ヤガミ・トール(Dr)が打ち鳴らすトライバルなリズムが遠い異国を思わせる。「ダンス天国」もまた1960年代にヒットした同名曲を思い浮かべると、そのタイトル通りちょっとレトロでアッパーなダンスチューンだ。性別を超えて快楽に身を委ねるこの曲も、言うなれば開放的であり解放の歌である。

今作での星野は作曲の面でもギタープレイの面でも「シンプル」であることに徹したそう、それによって今井 寿(Gu)との対比がより鮮やかに変わったと言う。「墮天使」の頃に今井が打ち出していた「逸脱」というテーマは、やはりこのアルバムの根底にもなっていると思う。今作で今井は新たに仕入れたエフェクターを使ったサウンド遊びをさまざまな楽曲に散りばめていて、その音が各曲のフックになっているりする。それが星野の言うところの「シンプル」との対比だ。今井作詞作曲のM2「ケセラセラ エレジー」はキラキラと回転するサウンドや、未来を向きつつもどこか憂いを帯びた歌詞の世界観を持ったテクノナンバー。M3「URAHARA-JUKU」はヘヴィな4つ打ちと、日常のすぐ隣にある闇の入口に警鐘を鳴らす強い言葉で、ガンガンと心を追い詰めてくる。M4の「SOPHIA DREAM」も今井作詞曲で、独特の浮遊感を秘めるサイケデリックなナンバー。イントロから流れる樋口 豊(Ba)の印象的なベースリフが耳に残る。そして、M6「Villain」は櫻井と今井によるツインヴォーカル曲。デモの段階からついたこのタイトルをもとに、自分が歌うパートの歌詞をそれぞれが書いているのだが、ふたりの言葉が共鳴合っていて面白い。M8「舞夢マイム」は歌謡曲調のメロディーに男女のかけ合いを乗せた歌詞が秀逸。男性パートにつけた低音のコーラスと、女性パートにつけた高音のコーラスは聴きどころだ。

“アブラカダブラ”は疫病退散の呪文の言葉

アルバムタイトルについて曲が出揃った頃の今井からは「まったく何も思っていない」と聞いていたが、「クリイカ」で櫻井が綴った歌詞の中から、今井自身が「ABRACADABRA」に決めたという。その真意はまだ今井本人に訊けてはいないが、この「クリイカ」はコロナ禍による自

粛期間中、モヤモヤとしてきた気持ちをぶっ飛ばしたくなった今井が急遽最後に作った曲。この曲も櫻井と今井とのかけ合いが高揚感を煽るツインヴォーカル曲で、詞もふたりによる共作だ。その中で、櫻井は「疫病退散」の呪文であるとなった上で、この「アブラカダブラ」という言葉を歌詞に用いた。レコーディング自体はコロナが蔓延する以前に7割方完成していたし、櫻井自身も創作において「コロナの影響を受けなかった」と語っていたが、このタイトルが掲げられたことで、やはり今作はこの環境下で生まれるべくして生まれた作品だと言える。

文：大窪由香



このインタビューの全文を公開中!!

『ABRACADABRA』

Album 9/21 Release
Lingua Sounda /
Getting Better Records
【完全生産限定盤 A】
(SHM-CD+Blu-ray)
VICL-1787
¥5,500(税抜)

【完全生産限定盤 B】
(SHM-CD+DVD)
VICL-1788
¥5,000(税抜)

【通常盤】(SHM-CD)
VICL-70244
¥3,000(税抜)

【完全生産限定アナログ盤】
VICL-60228 ~ 9
¥4,500(税抜)
※2LP

【完全生産限定カセットテープ】
VITL-70244
¥2,800(税抜)



RAZOR

ONEMAN LIVE 2020
「新・掟破り」



DAY1 Re:掟破り ~紙猫~ 9/28 (月) DAY2 Re:掟破り ~狂犬~ 9/29 (火)
DAY3 Re:NEW WORLD ~紙猫~ 10/1 (木) DAY4 Re:NEW WORLD ~狂犬~ 10/2 (金)
各日 開場 18:00 開演 19:00
横浜1000 CLUB

ローソンチケットにてチケット好評発売中!

チケットの詳細は



ザアザア 愛「」の布教



大阪 10.01 (木)
開場 18:00 / 開演 19:00
大阪BIG CAT

愛知 10.02 (金)
開場 18:00 / 開演 19:00
名古屋Electric Lady Land

東京 10.16 (金)
開場 18:00 / 開演 19:00
新宿BLAZE

△注意 ザアザアの世界には中毒性がございます。用紙・用量を守り、正しくお付き合いください。

9/26 (土) 10:00よりチケット一般発売開始!

チケットの詳細は



公演・チケットの詳細は
ローチケ(webサイト)にて!

<https://l-tike.com/>



※公演が中止・延期になる可能性がございますので詳細は各公演の公式HPをご確認ください。

CONTENTS

music UP's Vol.191 2020.9.20

■ Interview music UP's Q! ...『最近買って良かったもの』



BUCK-TICK



浅井健一&THE INTERCHANGE KILLS

- | | |
|---------------|---------------------------------|
| 0 BUCK-TICK | 22 SIZUKU |
| 4 INORAN | 36 CHIICO with HoneyWorks |
| 6 cali ≠ gari | 38 nano.RIPE |
| 8 SLOTHREAT | 40 西片梨帆 |
| 10 ラブリーサマーちゃん | 42 ほのかりん |
| 12 ヒゲドライバー | 44 森久保祥太郎 |
| 14 鈴木このみ | 46 THE PINBALLS |
| 16 三澤紗千香 | 48 GLIM SPANKY |
| 18 yozuca* | 50 T.MORIYAMMER |
| 20 CooRie | 52 浅井健一 & THE INTERCHANGE KILLS |

- 26 Pop'n'Roll Special Photo 西葉瑞希
- 28 『MUSIC SUPPORTERS』 レトロな少女、SHIFT_CONTROL、Bye-Bye-Hand の方程式
- 30 Editor's Note & Listener's Voice & 読者プレゼント
- 32 Editor's Talk Session 『コロナ禍を背景にしたライブハウスの発展』
- 34 全日本歌謡情報センター編集長 仲村 瞳の『スターの証明』 矢沢永吉

※ music UP's は毎月 20 日発行です(地域により多少遅れる場合があります)。全国 300 カ所以上のライブハウス・新星堂・TOWER RECORDS・HMV・disk union・音楽スタジオなどで配布しています。配布店舗はmusic UP's の WEB をご覧ください。

© ジャパンミュージックネットワーク株式会社
本誌に掲載している記事、写真等の無断複写、複製、転載を禁じます。



■発行
ジャパンミュージックネットワーク株式会社
〒107-0062
東京都港区南青山 6-10-12 フェイス南青山
TEL: 03-6712-6490
※広告に関するお問い合わせ
TEL: 03-6712-6579 (music UP's)

【発行人】
今井孝克
【JMN 統括編集長】
丸丸哲也

【編集】
■ music UP's / OKMusic
・編集長 石田博嗣
・スタッフ 千々和香苗 岩田知大
■ BARKS
・編集長 梶原靖夫
・スタッフ 森本 智 星出智敬
宮川直子 堺 涼子 服部容子
高橋ひとみ 井上 舞 安藤沙耶佳
■ Pop'n'Roll
・編集長 鈴木健也
・スタッフ 鶴岡 舞
■ 全日本歌謡情報センター
・編集長 仲村 瞳
・スタッフ 西角郁哉 本多 秀

【営業】
小田 新
【WEB】
田中功雄 瀬田拓己 上月悠平

【ライター】
大塚由香 大前多恵 キャベトンコ
榎林史章 清水素子 竹内美保
帆列智之 宮本英夫 村上孝之
山口智男 山本弘子 土内 昇

【印刷】
昭栄印刷株式会社

music UP's サイト
<http://www.music-ups.jp>



INORAN

ステイホームの期間中に“何が大事か？”というのを探してた

外出自粛を余儀なくされた2020年春、INORANは制作に没頭していた。打ち込みでの作曲とアレンジ、演奏を全てひとりで成し遂げたアルバム『Libertine Dreams』は、内向きに閉じた“個室”ではなく、オムニバス映画のサウンドトラックのように多彩で開放的。脳内を自由に旅して見た数々の夢、そこで味わった感情を落とし込んだ、INORAN流の“ブルース”が鳴っている。

——作曲・アレンジ・演奏の全てをおひとりで担われた今作。1stアルバム『想』（1997年発表）も手法としては打ち込みでしたが、作業と気持ちの両面においてどんな違いがありましたか？

「同じ打ち込みでも全然違いますね。『想』の頃は僕も打ち込みの知識や経験が今より少なかったし、音楽制作ソフトも進化してきているし。『想』のあとは“音楽はみんなと作るのが楽しい”というモードがずっと続いていけど、こんな世の中になっただけで…それができなくなったというのもあるし。そういう状況やいつもライヴで叩いてくれているドラマーのRyo (Yamagata)くんが休養中だったこととか、いろいろなことが重なって。『想』は好きなジャンルとして打ち込みで作った

んですけど、今回はそういった何かに特化したものというよりは、自然に導かれたかと思っています」

——昨年発表された前アルバム『2019』同様全て英詞で、サウンド的にもそのまま海外のチャートに入っているのもまったく違和感のない世界基準の作品だと感じました。日本のマーケットに聴き手を限定しないという意味でも自由な作品だと思います。

「どこでも聴けるムードの音楽を作りたい」というのは毎回考えていますね。音楽が自らその場所を選ばない許容量というか。例えばボブ・マーレーは地下鉄でも聴けるし、もちろん海でも聴けるし、街中でも…それがニューヨークでも日本のダウンタウンであっても聴ける。U2も

METALLICAもThe Rolling Stonesも。ビッグアーティストはそうだから、自分もそういうものを作りたくて。何年前か、自分の作った曲がアメリカでは“あつ、聴けるな”と思ったんだけど、メキシコで聴くにはパワーが足りないと感じたことがあったんですけど。だから、その違いが何なのかを常に考えているし、探してる。それはジャンル感の話ではないんだよね。情熱だったり、一個一個の音の粒の輝きであつたり…そういうところは大切にしたいと思っています」

——そういった音の輝きや込める想いなど、根源的な部分をINORANさんは大事にされているといつも感じるのですが、今作はそこを特に突き詰めたんでしょうか？

「無我夢中で作っていて、何も考えていなかったということが、自然とそうさせたのかも。3日に一曲ぐらいのペースで没頭して曲を作ってたんだけど、それは全て純粋な気持ちで紡いでいったものだったので、そこは今までとはちょっと違うところかもね。これまでも別に計算していたわけではないけど、考えてはいたというか。良く言うとコンセプト、悪く言うと自分の中で制限を設けていたの。あまり自由すぎると收拾がつかなくなっちゃうから。今回は自由すぎて收拾がついてるのかついてないのか、自分にはまだ分からない感じですよ」

——そういう幅広さをも許容するということ、楽しむことができたんですかね？

「うん。そうですね。やっぱり僕もステイホームの期間中に“何が大事か？”というのを探してたんでしょね。音楽制作の中でも」

——人間が生きていく上で決して手放してはいけないものだと、一番大事なものが何なのかという本質的な問いが、歌詞からも伝わってくる気がしました。例えば『Kingdom Come』は時事的にコロナ禍で営業自粛を要請された人々を代弁しているように読み取れたり、『Purpose』や『Shaking Trees』には死生観が濃厚に表れているように感じたり。作詞はどのようにオーダーされたのでしょうか？

「今年起こったこと、世界の人々に訪れたこの時間を紐解くのではなく、“何に希望を持って生きているか？”とか、生きていることそのものとか、本当に尊いもの、そこに感じる光であつたり…そういうものを僕は音楽に落とし込みたいんですよ。だから、歌詞についてはそういうテーマやコンセプトをなんとなくは説明しました。曲だけではなく歌詞も含め、今しか感じられない、今しかできない音楽のかたちを生み出したかったから、そう伝えて書いていただいたという感じかな？」

——今作の音楽性としてはエレクトロポップやファンク、ヒップホップ、ソウル、ジャズ、ダンスミュージック、あらゆる要素が混在していて、ギターが前面に出てい

る感じでもないですね。

「そうなんです。曲が浮かんだ時の編成にギターが入っていない曲もあつて。2曲目『Soul Ain't For Sale』、5曲目『Missing Piece』は入っていないままですよ」

——打ち込みだからというのもあるんですけど、シンセ音がフィーチャーされていますよね。これも自然に？

「うん。ここ数年の自分がよく聴いているトレンドだったりするので。考えてみると、今回のアルバムは映画やドラマのサウンドトラックを作ったような感じかもしれないですね。そこは『想』の時と似ているかも。“こういう場面ではこういう曲、こういう歌詞が合う”とか、そういうイメージは漠然とあつたというか。とはいえ、どういう映画やドラマという具体的なものはないんですけど」

——INORANさんの人生のサウンドトラックですか？

「そこまで大袈裟ではないです(笑)。今、観たいもの…というか、NetflixやHuluで観る海外ドラマとかで、“こういう作品だったらこういうサウンドトラックが鳴ってるな”とか惹かれる音楽ってあるじゃないですか。中には、たった一曲で作品を決定づけてしまうものもあるし。そういう曲が積み重なったアルバムかもしれない」

——ちなみに、50歳のお誕生日を迎えることに関しての想いはいかがでしょうか？

「50歳だからどうというのは特にないですけど、“50だせ!”っていうのはあるよね(笑)」

——びっくりしますよね(笑)。少年時代は50代の自分に対してどんなイメージを抱いていました？

「想像もしてなかったし、音楽をずっとやっているとは20代でも思ってたかった…30代でも思ってたかったかな？40代は10年後のことだから、フワッとイメージできたけど。今は70代ことは想像できないね。60代だったらできるけど(笑)」

——60代や70代の現役ミュージシャンで理想となる存在はいますか？

「完璧な理想となるひとりの人、ひとつの

バンドはないですね。”このバンドのここは好き”このミュージシャンのこの考え方がいい”ん〜、これはな…”というのがあつて、それをかけ合わせて自分の理想を作っていくという感じかな？キース・リチャーズの発言やギターはすごいと思うけど、僕はあいつのブルースが土台にある生き方じゃないし…あつ、分かった！今回のアルバム、僕の脳内のブルースですよ。ニューオリンズのブルースでもないし、アフリカでもニューヨークでもない、俺の中にしかないブルースだと思う。本当の叫びだったり、喜びであつたり、生きたい気持ちであつたり。そういう作品なんじゃないかな？…って、今、思いました。ジャンル感の話ではないですよ。今の俺なりのブルースってこと」

取材：大前多恵

okmusic



このインタビューの全文を公開中！▶

『Libertine Dreams』



Album 9/30 Release
KING RECORDS

【完全生産限定盤】
(CD+Blu-ray+写真集)
NKCD-6929
¥12,000(税抜)

※KING e-SHOP 限定販売
※LP SIZE BOX 仕様

【初回限定盤】
(CD+Blu-ray)
KICS-93940
¥4,800(税抜)
※三方背 BOX 仕様



【通常盤】(CD)
KICS-3940
¥3,000(税抜)

music UP's a!

今月のお題：『最近買って良かったもの』

■置き時計

「良かったかどうかは分からないけど、最近買ったのは置き時計。わりと体内時計で生活しているタイプだったので時計が家になくて、たぶん10年振りくらいに買ったかな？ と言っても、携帯を見たら時間も分かるからね。じゃあ、何で買ったんだろう？ デザインもシンプルなもの、特に気に入ったってわけでもないし。きつとなんとなくだね(笑)」

[cali # gari]

20年前のアルバムを録音し直すチャンスなんて普通はない

2000年に石井秀仁(Vo&Gu)が加入してちょうど20年。現体制初のアルバム『ブルーフィルム』を新たにレコーディングした『ブルーフィルム -Revival-』がリリースされる。新録のみならずカバー曲や新曲も収録された通称“エロアルバム”について、過去の逸話を含めながら話を聞いた。



L→R 村井研次郎(Ba)、石井秀仁(Vo&Gu)、桜井 青(Gu)

—まずは20年前に発表したインディーズ時代の『ブルーフィルム』を新録した『ブルーフィルム -Revival-』をリリースすることになった経緯から教えてください。
桜井: 本当はニューアルバムを出したかったんですけど、コロナ禍の中、全国ツアーを回すこともできないので、当初は『ブルーフィルム』をリマスタリングして出そうという案に変更を考えていたんです。でも、せっかくビクターさんからリリースのお話をいただいていたから、石井さんが加入して最初のアルバムだし、20年目の節目なので、“改めて録り直させてもらうのはどうですか？”って提案させてもらったら、“それ、やりましょう！”となったと

いう流れです。
—今回、新たにレコーディングしてみてもどんなことを感じました？
村井: “あのバンド状況でよくこんなアルバムが作れたな”と思ったのと同時に、今もバンドをやれていること自体が単純に幸せだと感じました。20年前のアルバムを録音し直すチャンスなんて普通はないじゃないですか。この環境に感謝しなきゃいけないなと。嬉しいですね。
桜井: 僕も研次郎くんと同じで“ああ、20年経ったんだな”と思ったし、“昔のアルバムを録り直させてもらえる機会なんてそうそうないよな”って。
—入手困難なアルバムだからファンも

嬉しいと思います。
村井: そうですね。昔を懐かしんで聴くのもよし、最近、cali # gari を好きになった人にも聴いてほしいですね。
—では、内容についてもおうかがいしたいんですが、オリジナル盤の1曲目は『エロトピア』なのに、今作の1曲目はSPANKERSの大ヒット曲『Sex On The Beach』のカバーという。
桜井: たいした理由はないんですけど、せっかくだから少しお話し替えをしようかなってくらいノリで。“Sex On The Beach”は当時のクラブでよくかかっていた曲なんです。MVも含めてバカっぽいノリが良くて、こーゆーのをカバーしたら

面白いってのが頭のどこかにあったんですね。
—“飲もう！ 騒ごう！”みたいな開放感マックスのダンスナンバーですよね。
桜井: ええ。ヒップホップとかレゲエの人がカバーするならいざ知らず、“えっ、ビジュアル系がやるの!?”ってところですよ。

—でも、cali # gariバージョンは真夜中の秘めごとみたいでロックですよ。
桜井: 特筆すべき点があるなら石井さんの声と村井さんのベースですね。“あの曲をこういうふうに歌うのか！ こういうベースが乗るのか！”っていう。

石井: 何も考えずに歌いましたけどね(笑)。
—そのカバーを1曲目に持ってくのが驚きでした。
桜井: 『エロトピア』はライブでも1曲目っていうポジションが長くて、復活してからもそうだったので、そろそろ1曲目のお役目御免っていうところですかね。

—そもそも『エロトピア』はどんな想いで書いた曲だったんですか？
桜井: 研次郎くんに“リフから曲を作ってみたら？”って言われたのがきっかけなんです。

—フックのある骨太でストレートなギターリフから始まりますものね。
桜井: その頃、やたらにBLANKEY JET CITYを聴いていたので、“よし！ ここは一発、プランキーみたいな曲を作るぜ！”と意気込んだんだけど、全然そうならなかったっていう(笑)。前のヴォーカルがなかなか衝撃的で面白い詩を書いていたので、それに代わるパンチの強い曲…すぐに“エロなね”と分かる曲が必要だと思ったんですよ。だから、タイトルもずばり

“エロトピア”なんです。アルバム全てを支配してしまうような、「ブルーフィルム」と対を成す曲が欲しいと。
—そういう意味では、キレがあってパンクな「ミルクセーキ」のほうはプランキーの匂いを感じます。
桜井: 「ミルクセーキ」はSHEENA & THE ROKKETSなんですよ。「LEMON TEA」のオマージュですね。柴山俊之さんの書く歌詞が好きなので、“自分がゲイだという前提で書くならこういう歌詞だね”って。ノリ一発で書いた感じですよ。

—新しいバージョン、めちゃくちゃカッコ良いです。
桜井: 同期が入っていないんですよ。ソリッドな感じで。(石井に)なんで入れなかったの？

石井: そもそも必要ないと思って。新録すると音を足すことはあっても引くことはあまりないじゃないですか。この曲はシンプルなほうがカッコ良いと思ったんですよ。
桜井: まあ、アレンジとか、お互いにやり取りしないですかね。“お好きにどうぞ”って感じで。だから、完成したものを聴いて“同期が入ってないんだ!?”って(笑)。

—でも、そこは長年の信頼感があるからこそですね。
桜井: そうですね。あとは、聴く人が自由に解釈してくれればいいっていう。復活してからは特にそういうスタンスですね。昔は“こうじゃないと嫌だ”とか、自分もかなり神経質だったと思うけど、今は“どうぞ、どうぞ”って感じですよ。

—全体的には音価もメロディーも優さがありますね。「真空中廊」「原色エレガント」「さかしま」「ブルーフィルム」という後半の流れは絵画みたいな世界観で。
桜井: そうですね。あとは、聴く人が自由に解釈してくれればいいっていう。復活してからは特にそういうスタンスですね。昔は“こうじゃないと嫌だ”とか、自分もかなり神経質だったと思うけど、今は“どうぞ、どうぞ”って感じですよ。

桜井: そもそも「さかしま」(デカダンスの聖書と評される小説)を訳したのが滝澤(龍彦)だったりしますからね。この言葉をエロに結びつけるっていうのはかなりいろいろ読んでいないと書けないなって。
—自粛ムードの世の中にこういうアルバムを出すのがcali # gariらしいと思いました。
桜井: コロナ禍で音楽業界は元気がないですけど、性産業はやっぱり活気があると思うんですよ。下世話なぐらいにこういう曲たちを出していったほうが分かりやすいし、元気が出ると思ったんです。

取材: 山本弘子



このインタビューの全文を公開中!!!



『ブルーフィルム -Revival-』

Album 9/30 Release
ビクターエンタテインメント
【ポルノ盤】(CD+DVD)
VICL-1799
¥5,000(税抜)
※初回限定

【ピンク盤】(CD)
VICL-65428
¥3,000(税抜)



music UP's a!

今月のお題: 「最近買って良かったもの」

■石井秀仁…スタイリング剤除去用ゲル

「Amazonの購入履歴を見たら一番最近買ったのが「スーパーとったゲル」でした。僕らってライブとかで結構すごい髪型にしたりするんで、スタイリングで使うスプレーの量が尋常じゃないんですけど、あのスプレーって1カ月くらい取れないんですよ。髪が傷んでから、中にまで入り込んで、ドライヤーするたびにガチガチになるし、汗をかいて乾くとガチガチになっちゃうんです。でも、「スーパーとったゲル」というのを使うと取れるんです！前は“とったゲル”って名前だったのに、いつの間にか“スーパーとったゲル”になってました(笑)」

■桜井 青…ゆで卵メーカー

「自分、ゆで卵が好きなんです。毎日2個とか3個とか食べて、そういうことを3年くらい続けてるんです。ゆで卵ってコンビニで買うと1個60円くらいなんです。結構な出費じゃないですか。自分で作ればいいだけの話なんですけど、お湯を沸かしたりするの面倒だし、そもそも料理ができなくて、ゆで卵すら作れないんです。爆発させちゃう。そしたら、この間、Amazonのタイムセールで「ゆで玉子 かんたん蒸し器」というのを見つけて、1,800円だったんで騙されたつもりで買ったんですよ。これがすごくて！卵って1パックが240円くらいだから、1個24円で食べられるんです！しかも、固茹でや半熟の調整もできるし、すぐに冷やせるから殻も剥きやすい。コンビニのは簡単に剥けないんですよ！こんな素敵なものを今まで知らなかったなんて…一番重宝している調理器ですね。完全に1,800円のものを取ってます」

■村井研次郎…充電ケーブル

「USB Type-C、ライトニング、ミニUSBが3in1になってる充電器ですね。アップル製品も使うし、Type-Cも使うし、ミニUSBも使うんで、これがすごくて役立ってます。USBの規格が統一されていないって不便ですよね。なんで統一しないのかな？ きっとわざとそうしてるんじゃないかな」

SLOTHREAT



← R 孝哉 (Gu)、瀬希 (Ba)、KAZ (Vo)、SHINYA (Dr)、克哉 (Gu)

本物のヘヴィミュージックをもっと幅広い層に届けたい

独自の音楽性を備えたバンドとして注目を集めている SLOTHREAT が 1st フルアルバム『THEMIS』を完成させた。同作はヘヴィネスとポピュラリティを巧みに融合させた彼らならではの魅力をたっぷり味わえる一作。完成度の高さは圧倒的で、幅広い層のリスナーを魅了することを予感せずにはられない。

— 今作を作るにあたってテーマやコンセプトなどはありましたか？

克哉：アルバムの作り方にはいろんなパターンがあると思いますが、最初に大まかな全体像を見据えて曲作りに入ったわけではなくて。まとまった曲数を収録した作品を作る時は、リードトラックを最初に作る人と途中で作る人がいると思うけど、僕は完全に後者なんです。大きな母体に対する導入期間として数曲作り始めて、「こういうものができてきたからリードはこういうものだな」というイメージが固まったところでリードトラックを作ります。今回もそういうやり方で、自由な感覚で一曲作って、次はこういう曲が欲しい、次はこういう感じ…ということを繰り返していきまして。一曲作ると「この曲ではできなかったな」ということが必ず出てくるので、曲を揃えていくのは本質的な意味では苦にならなかったです。

— やりますね。『THEMIS』はテクニカル&マニアックなオケとキャッチーなメロディーを融合させた独自の楽曲が、核になっていることが印象的でした。

克哉：僕らの中には「矛盾を超越したい」という想いがあるんです。例えば、コアな要素を突き詰めるとキャッチーネスが失われてしまうし、キャッチーネスに振り切るとコアな要素は薄れてしまう。かといって、それを中途半端に混ぜてしまうと一番ダサい音楽になってしまう。だから、僕はどっちの側面も 200 点を狙って作るというか、それを強く念頭に置いて、ひたすら突き詰めた感じではありました。

— その結果、激しさと美しさを併せ持った音楽になっていますね。それに、太い幹がある上でも幅広い層を見ていることも注目です。その中から好きな曲を選ぶとすれば、各自どの曲になりますか？ SHINYA：『THEMIS』を聴いてもらえ

ば、幅広い音楽嗜好を持つメンバーが集まっていることを感じてもらえると思います。それに、いわゆる「捨て曲」みたいな曲が一切ない。ないどころか、このアルバムはシングルの A 面で全曲出せるものが揃っている自信があります。一曲どれか好きな曲を選ぶのは不可能ですが、あえて印象が強い曲を挙げるとしたら 1 曲目の「現人」ですね。冒頭から非常に強いイメージが湧いてくるので、かつ演奏面ではマニアックなアプローチが多いという。最初にデモを聴いた時、「これ、何拍子なんだ？」「みたいな感じだったんですけど(笑)。実は KAZ の歌詞を読んで、唯一僕が「ウツセミ」と読むこの曲名を考えたという点もありますし、ドラマー的に大変だったことも含めて、「現人」は思い入れが強いんです。瀬希：今回のアルバムで僕が特に好きなのは 3 曲目の「Deceive & Leave」で

す。シンプルだけど、カッコ良い曲なんです。ドラマチックな雰囲気があって、ただ単に激しかったり、明るかったりするだけの曲ではないというのいいと思う。すごく気に入っています。

克哉：みんなもきっとそうだからする言い方になってしまうかもしれませんが、僕は一曲だけ選ぶのは無理かもしれない。「強いて言えば」ということでも悩むくらいですけど…大きな流れを見た時に一番グッとくるのは「LIVE FREELY」。でも、純粋に楽曲として今の SLOTHREAT の全てが凝縮されて、象徴たるものになったと思うのは 2 曲目の「ILLUMINATE」なんです。ちょっとネイティブな雰囲気の合唱から始めて、自分のヘヴィリフが概念の集大成的イントロやその他のフレージングの緻密な要素、でも一貫してメロディーはキャッチーで、さらにスピーディーに場面が変わって…というふうにして、今の自分たちを集約した一曲なんです。『現人』に続いて 2 曲目に「ILLUMINATE」が始まった時に真打ち登場感みたいなものがあって、そこも気に入っている。うちのオールマイティな存在としてある曲なので、僕は「ILLUMINATE」を推させていただきます。孝哉：僕は強い一曲を挙げるとしたら、最後の「LIVE FREELY」になります。この曲は他の曲とテイストが違っていて、最後の「LIVE FREELY」になります。この曲は他の曲とテイストが違っていて、最後の「LIVE FREELY」になります。この曲は他の曲とテイストが違っていて、最後の「LIVE FREELY」になります。

も分かってもらえると思います。アルバムを通して聴いた時に、最後にこの曲があることで、いいアルバムだと改めて身に染みて思えるんですよ。そんなふうに、すごく重要な一曲だと思っています。

克哉：「LIVE FREELY」は、実は今回の制作で一番最初に作った曲なんです。最初にこういう曲ができたことで、自分たちのコアな部分に層が入りやすくなったというのありましたね。

KAZ：僕の中で特に印象が強いのは「氷面鏡」です。この曲が一番心にガツンとくるメロディーとリリックだったので、「現人」も僕の中では気に入っているけど、ダイレクトに響くというところでは「氷面鏡」のほうが心に刺さる曲なんじゃないかと思っています。ヴォーカル的に繊細なところも、激しいところも併せ持った表現をしているし。今回のアルバムのバラード的な役割を果たしているのは「氷面鏡」なんじゃないかと思っています。サウンドも重く一般的なバラードとは程遠いかもしれないけど、メロディーの良さとか歌詞の内容とかが人の心に直接突き刺さるようなものになっているから、聴いた人はバラードに感じるんじゃないかな？ あまり他にないタイプの曲なので、ぜひ聴いてほしいです。— 今作のリリースを機にバンドが大きくスケールアップすることを感じていて、SLOTHREAT の今後の活躍が本当に楽しみです。

克哉：ヘヴィミュージックというのは本国において未だに固定された層の間でしか広がらないものだと思うんですよ。中にはそういう括りの中で有名なバンドも少数はいるけど、いわゆるアングラ要素だ

たりコアでディープな要素のあるバンドがアンダーグラウンドシーンで終わってしまうのを本当にたくさん見てきました。そういう世間の中で、自分たちは自分たちの本物のヘヴィミュージックをもっと幅広い層に届けたいという想いがあるんです。冒頭で話した「矛盾の共存」みたいなところで、僕らの音楽はコアなファンを納得させられる要素もあるし、ライトリスナーに良さを感じてもらえるキャッチーさもあると思う。そこを存分に発揮して突き詰めて、より多くの人に響く音楽を作りたいと思っています。

取材：村上孝之

okmusic

このインタビューの全文を公開中！▶



『THEMIS』



Album 9/25 Release
Wolves anchor DC
[2CD]
DCCD-2 ~ 3
¥3,500(税込)
[2CD+THEMIS T-Shirt]
DCCD-2 ~ 3
¥7,000(税込)

※ CD は SLOTHREAT OFFICIAL STORE にて通販限定発売。各種音楽配信サービスにて同日リリース開始 (THEMIS (Instrumental Edition) の配信はございません)。

■ SLOTHREAT OFFICIAL STORE
<https://slothreat.stores.jp/>

music UP's Q!

今月のお題：「最近買って良かったもの」

■ KAZ…オーディオインターフェイスと掃除機

「音楽面では『Babyface Pro』ですね。前に使っていたものがそろそろ寿命だったんで、克哉に勧められて新調したんですけど、すごく音が良くて、かなり満足してます。使い勝手もいいし。あと、コードレスの掃除機を買いました。作業する前に掃除をして、頭を一回クリーンにしないと取りかかれない質なんです(笑)。コードレスだから便利だし、捗るし、買って良かったですね」

■ 克哉…ヘッドホン

「アダムオーディオとウルトラゾーンが共同開発した『STUDIO PRO SP-5』なんですけど、自分が所持しているモニターヘッドホンの中でもはずば抜けて高価なものを買った結果、もうレンジから定位感など全てが違いすぎて、新しい世界が広がりましたね。今までスピーカーがアダムオーディオで、ヘッドホンはウルトラゾーンのものを使っていて、その 2 社が共同開発したのだから絶対すごいと思うたら、想像以上にすごかったです。まず最初に、Gideon が 2019 年に出した『BITE DOWN』を聴いたんですけど…ヘヴィすぎましたね(笑)」

■ 瀬希…オーディオインターフェイス

「ユニバーサルオーディオの『Apollo Twin MKII』なんですけど、作業効率が上がり、専用のプラグインのクオリティも凄まじいので買って良かったですね。音も良くなったし、素晴らしいです！前に使っていたものがガタがきてたんで、「早く買い替えないとな」ってずっと思ってたんですよ。今回のアルバムでも…まあ、大体の音が克哉のオーディオインターフェイスを経由して録音されているんですけど、僕も自分の部屋で録ったりする時があったから、大活躍してます」

■ SHINYA…AirPods Pro と鉄スリット

「AirPods は音楽を聴くのはもちろん、通話にも使ってるんで、日常的にとても役立ってますね。あと、鉄スリットも買ったんですよ。もともとキャンプが好きなんですけど、今ってなかなかできないから気分だけでも味わいたくて(笑)。なので、家で鉄スリットを使って肉を焼いています」

ラブリーサマーちゃん

曲を作ることは私にとって自浄作用

ラブリーサマーちゃんが4年振りにフルアルバム『THE THIRD SUMMER OF LOVE』を発表した。自身のルーツミュージックとも言えるUKロックを前面に打ち出すことで、彼女の本質がくっきりと浮き出た印象の一枚だ。“可愛くてカッコいいピチピチロックギャル”のキャッチフレーズは伊達じゃない!

—今作にはセルフライナーノーツが同梱されていますが、「サンタクローズにお願い」の解説で“どうせ私は恋も家族愛も無いクリスマスを通すのだからと思うと無性に反発したくなり、「恋愛が家族が主題のありきたりなクリスマスソングなんて絶対に書いてやるものか」という謎の闘志めいた感情が湧き上がった”とあって。これはとても面白いと思ったんですけど、曲作りにおいてはこういうモチーフもあるわけですか?

「サンタクローズにお願い」は少し特殊で(笑)。そのライナーノーツの前後にも書かせてもらったんですけど、今まで一回もクリスマスソングを作ったことがなかったので、どんな曲にしようかと考えていたんです。それで、“クリスマスソングってどんなことが歌われてますかね?”とサポー

トドラマーの吉澤 響さんに相談をしたら、“家族モノとか恋愛モノじゃないの?”って話になって。私、その時は家族とクリスマスと一緒に楽しもうという気持ちもなかったし、恋愛からも離れていたから“私は独りだ”と思っていた(苦笑)。そうやってクリスマスを過ごしている人たちが羨ましくて、なぜか反骨精神が出てきちゃいました(笑)。ただ、クリスマスソングをシングル配信することが決まっていたのでそういう闘志が湧いてきただけで、普段は曲を書く時に“誰かに歯向かおう!”とか、“こんな曲は書かない!”とか、そういうことは決めてないです

—まずモチーフとしてクリスマスがあって、今自分が置かれている状況でクリスマスソングを作るとなると、こういう闘志剥き出しの内容もありだと思ったわけ

です(笑)。

「あははは。まあ、今回入っている曲の中で「サンタクローズにお願い」はたまたまそう思ったということです」

—でも、そこがロックでカッコ良いと思いませんか? 「えーっ!(笑) 他の曲は全然そんなことはなく素直に書いているので、そう言ってもらるのは申し訳ないんですけど」

—“他の曲は全然そんなことはなくて”とおっしゃれましたが、1曲目「AH!」や2曲目「More Light」もわりと世間に対して物申しているタイプだと思いませんか? 「確かに構造に対して“嫌だな”とっている面はありますし、それは今までロックがやってきたエッセンスのひとつであるとは思いますが」

—その世間に対する物言いとガツンとしたバンドサウンドがマッチして、オープニングの1~2曲目はとてもカッコ良いと思います。しかも、「More Light」はダンスブルじゃないですか。こういう歌詞の内容で踊らしてしまうのもすごいです。

「何かチクリと言いたくなる時は普通に言っても誰も聞いてくれないし、“こういうの嫌なんだよね”って言う時って、なるべくやさしい言い方をしたりとか、ユーモアを挟んだりとか、そういう工夫をするほうが好きなので、しみり歌うというよりもカラッと面白く、楽しい感じに歌いたかったです」

—世間に対して正論を述べるにしても、そこにユーモアがないようなことはしたくないといった感じでしょうか?

「私はユーモアを挟んじったり、ふざけちゃったり、言いたいことの他に何らかの要素を加えて言うことがデフォルトになってますね。そうじゃなく、ただ気持ちを言うだけで、他に何も思感がない人もすごくカッコ良いと思いますが」

—でも、私はそこがいいと思うんです。で、もう少し突っ込んで収録曲を見てい

ますね(笑)。

「あははは。まあ、今回入っている曲の中で「サンタクローズにお願い」はたまたまそう思ったということです」

—でも、そこがロックでカッコ良いと思いませんか? 「えーっ!(笑) 他の曲は全然そんなことはなく素直に書いているので、そう言ってもらるのは申し訳ないんですけど」

—“他の曲は全然そんなことはなくて”とおっしゃれましたが、1曲目「AH!」や2曲目「More Light」もわりと世間に対して物申しているタイプだと思いませんか? 「確かに構造に対して“嫌だな”とっている面はありますし、それは今までロックがやってきたエッセンスのひとつであるとは思いますが」

—その世間に対する物言いとガツンとしたバンドサウンドがマッチして、オープニングの1~2曲目はとてもカッコ良いと思います。しかも、「More Light」はダンスブルじゃないですか。こういう歌詞の内容で踊らしてしまうのもすごいです。

「何かチクリと言いたくなる時は普通に言っても誰も聞いてくれないし、“こういうの嫌なんだよね”って言う時って、なるべくやさしい言い方をしたりとか、ユーモアを挟んだりとか、そういう工夫をするほうが好きなので、しみり歌うというよりもカラッと面白く、楽しい感じに歌いたかったです」

—世間に対して正論を述べるにしても、そこにユーモアがないようなことはしたくないといった感じでしょうか?

「私はユーモアを挟んじったり、ふざけちゃったり、言いたいことの他に何らかの要素を加えて言うことがデフォルトになってますね。そうじゃなく、ただ気持ちを言うだけで、他に何も思感がない人もすごくカッコ良いと思いますが」

—でも、私はそこがいいと思うんです。で、もう少し突っ込んで収録曲を見てい

くと、3曲目「心ない人」と8曲目「アトレユ」はそれぞれタイプは異なるものの、“どっちつかず”と言うと語弊があるでしょうけど、“そういうふうに進んでいくのも止むなし”といった内容であると思いますし、その辺は「AH!」「More Light」にも通底していると感じます。物事ははっきりと言うことが決して全てではないと言いますが、“白黒つけることが全てじゃない”という考え方をもちますよね?

「すごくありますね。「More Light」もそういう曲だし。“正しい/正しくない”のグラデーションの中で生きていいんじゃないかと思えます」

—今言われた“グラデーションの中”であることを認めつつも、しっかりと前向きであるところが、このアルバムのいいところではないかと思えます。5曲目「豆台風」や6曲目「LSC2000」、もしくは7曲目「ミレニアム」もそうかもしれませんが、この辺の楽曲には“それでも進んでいかなきゃいけない”といったところがありますよね?

「確かに構造に対して“嫌だな”とっている面はありますし、それは今までロックがやってきたエッセンスのひとつであるとは思いますが」

—その世間に対する物言いとガツンとしたバンドサウンドがマッチして、オープニングの1~2曲目はとてもカッコ良いと思います。しかも、「More Light」はダンスブルじゃないですか。こういう歌詞の内容で踊らしてしまうのもすごいです。

じゃなくてもいいと思うんです。でも、私は何となく自分に言い聞かせる…自分自身をなだめるために、光の方向を向いているような歌詞にしちゃいがちですね。それが…落ち込んでいる時って曲がまったく作れないので、落ち込んでいるところからちょっと糸口を見つけて回復してきた時とか、自分の中のモヤモヤした感情にちょっと決着が着き始めてきたタイミングで歌詞を書いたりすることが多いんです。そういう精神状態なので、モヤモヤしていても自然と前向きになるのかなと思いますね

—「ミレニアム」に「大して明るくはない未来だって/そんなに悪くないだろう」という歌詞がありますが、これはいい言葉ですね。

「ありがとうございます。大して明るくない未来を明るくしようと頑張っている人を尊敬しますし、憧れるけど、どういふスタンスでいるかは個人の自由なので、私は“そのうちにいいこともあるだろう”みたいな感じで生きていこうかと思えます(笑)」

—でも、ロックに限らず、サブカル全般はそういうものじゃないですか。それ自体が社会を動かすものではないけど、“それでもやるんだよ”というのがサブカルだと思いますし、そこに感動するんじゃないでしょうか。

「うんうん。でも、私は“何か何でも絶対やってやる!”みたいなアツい気持ちを持っている人間じゃなくて。何だかんだ言っても音楽のことが好きなので、嫌なことがあっても往生際悪く続けたらいいんですが、“絶対にやらなきゃいけないんだ!”っていう使命感はまったくくないです。今は楽しいのでやります」

—そこで言うと、「LSC2000」のライナーノーツにも書いていたと思うんですけど、曲を聴いてくれたり、ライブに足を運んでくれたりする人がいるというのは、活動する上でのモチベーションになってはいるんじゃないですか?

「私が音楽活動をして一番幸せだと思うタイミングは、自分で作ったデモが完成し

て、それを聴いて“あ、いいじゃん! 私、これ好きだな”って思った時なんですけど、その喜びみたいなものは曲が出来上がった時点からどんどん減っていくんです。でも、誰かが私の曲を聴いたり、私のことを観たりして、何か思っているんだということを知った時って嬉しいんですよね。それがあから音楽活動をやっているとは言わないし、“自分が気に入る曲を聴きたいから”というのがダントツでモチベーションとしては大きい理由ですけど、聴いてくれる人の言動とかに毎回励まされてます」

—直接の動機づけにはなっていないものの、少しはリスナーの声や背中を押してくれている?

「“少し”というか、毎回かなり勇気づけられたり、“音楽をやって良かったなあ”って思ってますよ。すごく力になってますね」

取材: 帆刈智之



このインタビューの全文を公開中!▶



『THE THIRD SUMMER OF LOVE』

Album 9/16 Release
日本コロムビア
【初回限定盤】(CD)
COCOP-41239
¥3,300(税抜)
※三方背ケース&
初回盤限定ブックレット付

【通常盤】(CD)
COCOP-41240
¥2,500(税抜)

music UP & Q!

今月のお題: 『最近買って良かったもの』

■ギター制作キット

「ギターを自分で組み立てるキットを買ったので、休日がとても充実してます。もともとギター作りには興味があって、今回が初めてのギター制作なんですけど、すごく楽しいです。ギターのボディの下地をヤスリで削って、塗料でペイントして、ニス塗って、木のぬじれとかも直して、電気回路を埋め込んで…まだ作ってる途中ですけど、すでに愛着が湧いてます。めちゃくちゃ楽しい、素人が作ってってそんなにいい音は出ないと思うから、これは鑑賞用ですね。でも、出来上がった誰かに見せたいから、今はライブがないからSNSで見せつけようかな? (笑)」

ヒゲドライバー

アニソンには特有な要素があると思う

アニメやゲームのテーマソングを数多く作ってきたヒットメイカー、ヒゲドライバーがKADOKAWAアニメで手がけたアニソンを一枚にまとめたコンピレーションアルバム『ひげこれ！ HIGE DRIVER BEST in KADOKAWA ANISON』をリリースする。その収録曲から垣間見える彼のコンポーザーとしての本質、アニソンならではの制作背景を訊いてみた。



—『ひげこれ！』はヒゲドライバーさんがKADOKAWAアニメで手がけられたアニソンをまとめた作品であり、ご自身のベスト盤とはまた違ったコンピレーションアルバムだと思うのですが、ご本人の受け止め方はいかがですか？

「自分が音楽をやっている中で一時期からアニソンというものをやらせてもらう機会が多くなって、「いろいろ作ってきたなあ」と思って…特にKADOKAWAさんはアニソンを作るようになったきっかけでもあったので、「結構な曲数になっているからこういうアルバムができるんじゃない？」みたいなところから始まりましたね。最近だと神前 暁さんがアルバム(2020年3月発表の『神前 暁 20th Anniversary Selected Works "DAWN"』)を作られてましたけど、クリエイター視線でベスト

アルバムを作るってアニソン界ではなかなかなかったから、そういう意味でも面白いんじゃないかなと」

—全16曲収録と大ボリュームで、なおかつともバラエティー豊かな作品集ですね。

「アニメ自体が幅広いですしね。ワチャワチャ明るく楽しい系もあれば、戦争モノもあるから自ずと曲も幅広くなりました」

—この中からヒゲさん自身にとって特に印象に残っている楽曲を挙げてもらおうとすると、どの辺りになりますか？

「1曲目の『回レ！雪月花』はきっかけでもあるし、すごく思い入れがある曲ですね」

—「回レ！雪月花」ですか。これ、変な…いや、面白い楽曲で。オキナワンから日本民謡、さらにはヒップホップの要素もあって、リズムもコロコロ変わります。相当い

ろんなものが入ってますね。

「『電波ソング』と言われるようなジャンルで、いろんな要素を詰め込んで早口でワットとまくしたてるタイプの曲ではあるんですけど、わりとアニソン界ではちよこちよこあるんですよ。僕自身はそれまでこういう曲を作ったことがなくて、これが初めてだったんで、結構難しかったんです。なかなか踏み入れなかった世界だし。でも、これを作ったことによって、「ああ、こういうやり方があるんだな」という自分のスタイルを見つけれられたというのもあると思うんですよ」

—基本的なことですけど、アニソンの作り方で他とは何が違うんですか？

「アニメありきなで、そこに沿わせなくちゃいけないというのがあります。やはり主題歌だと89.5秒という決まった尺がある…しかも、ともしれば飛ばされてしまうんですよ。DVDとかだとすぐにパッと飛ばされてしまうから、「曲の頭でどう人の心を掴んで、最後まで聴かせて満足させられるか？」ということもあるんですよ。そういう意味でもアニソンには特有な要素があると思いますね」

—アニメ作品の世界観に沿わなければならないのは大前提として、89.5秒に収めなくてはいけないし、なおかつインパクトもないといけません。

「でも、曲を聴かせるためにはいい流れだと思ってるんですよ。まず頭で掴んで、ちゃんと1コーラス聴かせるって、アニソンに限らず他の曲でやっても絶対にいいことだし。その意味でもすごく勉強になるので、自分の修行にもなっていますね」

—例えば、『STEP by STEP UP ↑↑↑↑』。サビ頭でポップだし、見事に1コーラスが1分半。最初に聴いた時には「実に心得た楽曲だな」と失礼ながら感心して聴かせてもらいましたよ。

「あははは。でも、この曲に関して言えば、僕はそこまでしっかり作ってなくて(苦笑)。というのも、共作の篠崎あやとさんが何となく1コーラスのデモを作ってき

て、「こうしたらもうちょっと良くなるよ」のアドバイスはありますか？」と言ってきたものに対して、僕は「こうしたほうがいいんじゃない？」みたいなことでサビを作った感じです。他の全体の構成はわりと篠崎さんがやってくれてる」

—そうでしたか。共作というところでは、例えば、『ひげこれ！』収録曲はアレンジもさまですよね？

「そうですね。いろんなパターンがあると思いますが、編曲を他の人に依頼することが多いのは、僕自身がもともと作詞作曲…メロディーと歌詞を作るのが得意だったこともあって、アレンジは他の人に手伝わってもらうパターンが多いですね」

—最初にヒゲさんが歌の旋律とそこに乗る歌詞を作り、それをアレンジさんに渡すことが多いですか？

「そのパターンもあります。逆にオケが作られて、それに対して「歌をつけてください」というパターンもあります」

—えっ!? それは相当難しくないですか？

「そっちのほうが僕は早くて。この中だと『Stay Alive』がそうですね。作詞・作曲のHeart's Cryは複数人のクリエイターユニットで、この曲はゆよゆっぺとヒゲドライバーが担当してるんですが、ゆよゆっぺが作ってきたオケがカッコ良くて！それに誘われるようにメロディーが浮かんできたという(笑)」

—『Stay Alive』はオルタナ系といいますが、厚味のギターサウンドは本格的なHR/HMっぽいですけど。

「そう。ゆよゆっぺはBABYMETALの曲を作ってるようなガチな人なので(笑)、オケは確かなんです。オケがカッコ良いから、何を乗せてもカッコ良くなる…わけじゃないですけど(苦笑)、オケに誘われるようにメロディーが出てくるんで、やりやすかったです」

—サウンドが決まっていると全体の雰囲気も掴みやすいというか、「このオケならこういうメロディーだろう」と歌が浮かびやすいんでしょうね。あと、歌い手によって出てくるメロディーって変わるものですか？

「それはありますね。キャラクターソング

となると、そのキャラの声で歌わなきゃいけないから音域が狭くなっちゃうとか、上げすぎでも低すぎでもキャラから外れたりするので、音域がなかなか広く取れなかったりするんですよ。この中だと原田ひとみさんと鈴木このみさんはアーティストとして歌われている方なので、しっかり歌えることを前提で考えているから、わりと攻めたメロディーになってます。特に『Overdrive』はそうで、かなり攻めたメロディーになっていると思うんですけど、それでもしっかりと歌い上げてもらってカッコ良くなってるので、原田ひとみさんはさすがだなと」

—一方で、CVの方が歌っている場合はそのキャラに合った抑揚が必要になってくるわけですよね。近藤真彦さんの「ハイティーン・ブギ」を作る時、作曲者である山下達郎さんはマッチさんの歌唱のレンジを把握した上で、メロディーを練ったという話を聞いたことがあります。ヒゲさんがキャラソンを作る時も似たような作業なんですか。

「そうですね。その人の美味しいところを引き出したいし、そもそも出ない音域もあったりするし、その範囲で作る作業はなかなか難しいものですけどね」

—今、お話しいただいたことと関係しているのかもしれませんが、個人的にはメロディー展開が面白く感じたナンバーがいくつかありまして。特に『夢見サンライズ』。AからB、Bからサビはまだ分かるんですが、Aメロからサビメロが想像できないと言いますが、メロディー展開の予想がつかなかったんです。その辺はご自身ではどう感じられていますか？

「確かに。今になってみると「ああ、そうだな」と思いますね(笑)。自分としては特に違和感なく作ってるつもりなんですけど…何だろうな?不思議ですね(笑)」

—作家さんの中にはストックしているメロディーがあって、時にそれを組み合わせることもあるなんて話を聞いたことがあります。そういう感じではないですか？「組み合わせてはいないんですけど、この曲を作った時はA→B→サビという考え方が変わっていったと思います。まった

りと入りつつ、最後はワチャワチャ盛り上がるみたいな感じでつなげていったんだと思います」

—でも、ちゃんと流れはあるんですよね。ただ、Aとサビを聴き比べると「こう展開するのか!?!」という面白さがある。つまり、それだけ自然体で作曲されているということで、やはりヒゲさんはメロディーの人なんですか。

「そうですね。メロディーが自分でも音楽をやっている一番好きな部分でもあるし、こだわりが強い部分でもあると思います」

—では、最後に今後のことを語っていただきたいんですが、メロディメーカーとしての側面が色濃く出た楽曲を作りたいということはあるのでしょうか？

「そうですね。あとは、アニソンには引き続き関わりたいなと思いつつ、自分の他の活動もいろいろやっていきたいと思っています。ソロ作品もそうですけど、ゲームを作りたい気持ちがあったり。過去に一回、フリーゲームを自分で作ったことがあるんですけど、またゲームを作りたいと思っています。アニソンだけじゃないヒゲドライバーをしっかりと出していきたいなと思っています」

取材：帆刈智之



このインタビューの全文を公開中!!▶



『ひげこれ！ HIGE DRIVER BEST in KADOKAWA ANISON』



Album 9/30 Release
株式会社 KADOKAWA
ZMCZ-14221
¥3,000 (税別)

music UP's!

今月のお題: 『最近買って良かったもの』

■除毛クリーム

「何を買ったかな? ちょっとAmazonの購入履歴を見ます(笑)。ああ、これかな? 除毛クリームを買いました。最近、ネットの広告でも男性の脱毛を宣伝してるじゃないですか。自粛期間中、「一回やってみよう」という欲望が湧いてきて、どうせ人に合わないから、ツルツルという未知の体験をやってみよう。で、やっぱり本当にツルツルになって感動しましたね。すごいですよ! 定期的にやってもいいかもしれないです、あの気持ち良さ味わうと(笑)」

鈴木このみ

「Realize」は今の自分が歌うに ぴったりな曲だと思う

TVアニメ「Re:ゼロから始める異世界生活」2nd seasonのオープニング曲「Realize」。鈴木このみにとっては2016年の「Redo」以来、2度目の同アニメ主題歌ということもあって、歌唱にもサウンドにもいつも以上に気迫が感じられるナンバーに仕上がっている。そんな楽曲と、その発表から1週間後にリリースされたニューシングル「舞い降りてきた雪(恋とプロデューサー featuring Konomi Suzuki)」について語ってもらった。

— まずは「Realize」ですが、鈴木さんご自身はこの曲をどんなふうにとらえていらっしゃいますか？

「初めて聴いた時に“鈴木このみ全開で来たな”というふうにも思いましたし、歌う前から手応えを感じた曲でした。もちろんハードな曲という印象もあるんですが、それよりも私はライブで歌っている自分がすぐに想像できたというか、そういう印象

でしたね」

— “鈴木このみ全開”ですか。私は今回初めて鈴木さんに取材をさせてもらうのですが、最初に「Realize」を聴いて“これはほとんどハードロックじゃないか！”と驚いたんですね。特に2番で、サウンドが相当に密集していくので、“これ、ほんとにヴォーカリストの音源なのか？”と思ったほどで。

「確かに骨太ですよ(笑)」

— ただ、昨年リリースされたアルバム「Shake Up!」も聴かせていただいたんですけど、アルバム収録曲もやっぱりハードなものが多いですね(笑)。

「そうですね(笑)。そこは鈴木このみらしいさにつながっていると思います」

— このくらいサウンドがグイグイ来る感じが鈴木このみのデフォルトなんですね。「基本的に“やさしく包み込む”というよりは、力強くパシッと叩いてくれるような、“行けー！”と言ってくれるような曲が多いし、やっぱりそういうものが私らしいと思いますね」

— なるほど。私は鈴木このみビギナーなので、今回初めて鈴木さんの楽曲を拝聴して“すげえな”と思ったんですけど、ファンにしてみれば「Realize」くらいの厚めのバンドサウンドは当たり前だと。

「特に今回は音に気合いがめちゃくちゃ入ったと思います。アニメ「Re:ゼロから始める異世界生活」はピンクタイトルですし、自分自身も1期に引き続き2期のオープニングテーマ曲を担当させていただくということで、“今、23歳の自分が1期当時の19歳の自分に負けてはいけません！”という気合いもあったりして、それがヴォーカルにも、楽器にも、全部に入っていると思います。いつもより“増し増し”ではあるかと」

—鈴木さんにとっては2度目の「Re:ゼロから始める異世界生活」のオープニング曲でもあって、前回を超える意味でもスタッフを含めて気合いが入ったということですね。

「そうですね。あと、これは個人的なことになるんですけど、今年は事務所を移籍して、ファンの方々にも“10周年には武道館でやりたいです！”って公言しちゃったりもして、“これからさらにやってやるぞ！”ってかなり気合いが入っていたので、意図せず自然とこういう歌になったのかなという感覚ですね」

— 歌詞はもちろんアニメの世界観に沿ったものではありますが、「立ち向かって／恐れなくて／絶望に怯えずに今」と退路を断っていると聞きますか、もはや前向きを通り越して前のめりな内容ですよ。

「腹を抱えている人の歌になって、これから最終決戦に行く人の歌のような印象があります」

—鈴木さんのこれからの活動は最終決

戦ではないでしょうか、どこか重ね合わせるようなところもあるのでしょうか？

「歌詞に関しては今今の自分の気持ちに当てはまるものだと思います。もちろん「Re:ゼロから始める異世界生活」の作品にもぴったりではあるんですけど、私自身、8年間歌い続けてきて、もう1ステージ進むために環境を変えてみようと思ったりして年だったので…うん、歌詞も重たく自分自身に響きましたね。メッセージ性の強い曲ではあると思います」

— サウンドだけでなく、歌詞も鈴木さん自身にぴったりなんですね。

「何かを背負いながら、さらに進んでいく人の曲というか…それは過去の自分だったり、自分に想いを馳せてくれた人たちの信念だったり背負って歌っている人の曲というイメージが湧いて、そういう意味では今の自分が歌うにぴったりな曲だと思います」

— “何かを背負っている”とおっしゃいましたが、「Realize」のようなハードなアプローチの楽曲は、ここまでの積み重ねがあるからこそ歌えるナンバーなんじゃないかな。新人がこれを目の前にいきなりバンと置かれても、なかなか受け止めづらと思います。

「ああ、そうですね。すごいストーリーを感じる曲だと私は思いました。デビュー時に歌える曲ではないというか、1期ではこの曲は歌えなかったと思います」

— 私、先ほど特に2番はサウンドが密集していきいって、ヴォーカリストの音源っぽくないと言いましたが、そこに拮抗できるだけのヴォーカライゼーションを持ったシンガーであるという信頼感がないと、コンポーザー、アレンジャーもここまでやらないですよ。

「そう思ってもらえたら嬉しいです。私も最初に聴いた時は“これは楽器陣に負けれない！”と思いましたしね(笑)。今までもパワフルな曲が多かったんですけど、言っていたように、作家のみなさんが鈴木このみを信頼して書いてくださったと思うので、それを裏切らないように精いっぱい頑張ろうと思ってレコーディ

ングに挑みました」

— 「Realize」の歌唱は貫禄の成せる業と言えるのかもですね。

「ありがとうございます。この曲は歴史あつての歌という感じがします」

— そして、「Realize」に引き続き、ニューシングル「舞い降りてきた雪(恋とプロデューサー featuring Konomi Suzuki)」も発売となりました。こちらはハードなアプローチとはまた違ったサウンドになりましたね。

「続けて聴くと戸惑いますね。“あれ？”みたいな(笑)。「舞い降りてきた雪」は思いのほかシンプルな楽曲で、メロディーもきれいだし、“これはめちゃめちゃ歌力にかかっているぞ”と思いました。これこそソロヴォーカリストの曲だと個人的には思うし、楽器陣もぶつかり合うのでなく、そと支えてくれている感じだから、ヴォーカルがしっかりしていないと全部倒れてしまうというプレッシャーを最初は感じましたね。だから、練習用のデモレコーディングをさせてもらったもして」

— そうでしたか。派手さはないものの、しっかりとロックを感じさせるナンバーだと思います。作詞作曲の中島卓偉さんとはいくつもお話をされましたか？

「ディレクションもしていただいたんですけど、最初に“ヴォーカリストの思うようにするのが一番だから、思うようにやってくれていいから”って言うので、こちらに任せてくださったのが嬉しかったですね。個人的にはすごく楽しいレコーディングでした」

— サウンドも徐々に盛り上がっていきませんが、ドラマチックに展開していくメロディーラインが楽曲の中心でしょうから、歌が重要であることには間違いありません。

「耳に残って、つつい口ずさんじゃいますよね(笑)。シンプルなメロディーですけど、シンプルだからこそ胸の中にストレートに入るんじゃないかと思います」

— 歌詞も注目です。「Realize」から地続きと言いますが、「舞い降りてきた雪」で歌われているのもまた前向きですね。

「こっこのほうがより日常的に馴染む前向きさというイメージはありますね。この曲は“featuring Konomi Suzuki”になっていて、“TVアニメ「恋とプロデューサー～EVOL×LOVE～」にどっぷり浸かった鈴木このみ”ということでも、私は自分から何も伝えてなくて、ただただ「恋プロ」の世界観を落とし込んでもらって、そこに自分を重ねていくという作業でした」

— でも、この歌詞は先ほどおっしゃられた、“事務所を移転して新たなチャレンジ”ともシンクロしていますよね。

「あっ、そういうところは卓偉さんにお伝えした気がします。あと、アニメ自体も主人公が社会で頑張っている女性で、しかもわりと若めの女性なのでリンクしやすいとか、聴いてくれる人の中にもリンクする人はいっぱいいるんじゃないかと思っています」

取材：帆刈智之



このインタビューの全文を公開中▶



「Realize」



Single 8/26 Release
株式会社 KADOKAWA
ZMCZ-14011
¥1,200 (税抜)

「舞い降りてきた雪(恋とプロデューサー featuring Konomi Suzuki)」



Single 9/2 Release
Digital Double
DDCD-0001
¥1,500 (税抜)

music UP's Q!

今月のお題:「最近買って良かったもの」

■スニーカー

「昨日、スニーカーを買いました！もっと高級なもののほうがいいですか？(笑) 今、毎週配信をやっていて、そこには私服で出てるんですけど、そうするとどんどん楽しくなってきた、普段は着ていないような服を着てみようと思っ…って、もはや私服じゃないですけど(笑)。まあ、そこは自分で選んで着てくるということで、で、この間、スポーティーな服を選んで着ていたら、意外と反応が良かったんですよ。“じゃあ、こつめなスニーカーを買ってみよう！”と思って、普段は履かないような感じのものを買ったんです。いつもとは違う系統のものを身につけるのは楽しいんで、スニーカーに限らず、いろいろ開拓してます」

三澤紗千香

熟成された気持ちが曲になって降ってきた

今年4月にシングル「この手は」でユニバーサル ミュージックよりCDデビューした三澤紗千香が2ndシングル「I'm here / With You」をリリースする。しかも、「I'm here」は三澤自身が初めて作詞作曲を手がけ、彼女のルーツである声をモチーフに等身大の気持ちが歌われている。作詞作曲という長年の夢を叶えた本作について、制作の過程やそこに込めた想いを訊いた。

—「I'm here」はご自身では初の作詞作曲ですが、以前から曲作りはやっていましたか？

「作詞作曲はいつか声優としてデビューしてCDを出す時は自分で曲を作りたい」と思っていた中学生の時から。当時はYUIさん、大塚愛さん、aikoさんなどシンガーソングライターの方の曲を聴いて、自分の言葉とメロディーで、時には自分で演奏もして表現する…音楽というのはそういうものだと思っていました。でも、1番しかできなかつたり、歌詞が書けなかつたり、歌詞が浮かんでもメロディーが出てこなかつたり、全然かたちにならなくてずっとモヤモヤしたままここまで来てしまっ。今回の2ndシングルの会議があった時、「実は今日持って来た音源があって…」とスタッフのみなさんに歌詞を

書いたA4の紙を配って、iPhoneからデモ音源を流して聴いてもらったんです」

—今まで完成に至らなかったのに、会議に合わせて作ったんですか？

「会議の数日前にメロディーと歌詞と一緒にフックと降りて来たんです。まさか今回収録してもらえとは思っていなかったんですけど、どこかで披露するチャンスがあればと思って、勇気を出して持って行きました。で、聴いていただいたら「これを2ndシングルにしよう」と言われて、「え!？」って感じで驚きました(笑)」

—会議で聴いてもらったデモ音源はどうやって作ったんですか？

「以前のレコード会社の時に作詞作曲やサウンドプロデューサーでお世話になっていた、千葉「naotyuu-」直樹さんに作っていただきました。naotyuu-さんは私の声の

いいところやキーも知っているし、どうい曲がファンの心にどう刺さるかも分かっているから、いい感じのデモ音源にしてくださいんじゃないかと思って。なので、「まだ何になるか分からないんですけど、会議に提出したいので曲っぽくしてもらえませんか？」と(笑)」

—何をしていた時に曲が降って来たんですか？

「家のソファでリラックスしている時に「あ!!」って。曲を作りたいという気持ちは常にあったから、普段から仕事以外の時間は音楽のことを考えることが癖になっていた。何年もひたすら準備だけをしていたので、その気持ちが熟成されて、やっとその時に出て来たんだと思います。全てはこの時のためだったんだって。でも、降って来た時は「私、こんな歌を歌

うんだ!？」って思いました(笑)」

—三澤さんの意思の強さを感じさせながら、自分の弱さを吐露しているようなところもあって、ただ前向きなだけではないところに親近感を感じましたよ。

「私は自分に自信がないタイプなので、三澤を主人公として書いていると思って聴いてもらってもいいです。ファンになってくださる方も私と似たタイプの人が多いから、ご自身に当てはめて聴いてもらえば「分かるな」って思ってもらえると思いますね。「このままじゃいけない」とか「何か行動しなくちゃ」、「三澤さんも頑張っているんだから自分も頑張らなきゃ!」みたいな気持ちになってもらえたら嬉しいです」

—決して独りよがりではなく、聴く人によってさまざまに受け取れるものになってますよね。

「はい。自分のことしか書いてないのは嫌だし、かと言ってみんなのことばかりで自分のことが入っていないのも嫌なので、誰が歌ったという曲にはしたくなくて。私の歌を聴いて「心に残る曲だな」と思ってほしいし、人の背中を押せる曲が作りたと思っていました。「I'm here」というタイトルは「ここに私はいます!」と自我が強く感じられると思いますけど、意外と応援歌っぽさもあるんです。今まで応援してくださった方ならより深く理解してくださるだろうし、あまり知らなかった方に対して「私はこういう人です」と紹介できるような曲になりました」

—エレクトリックなサウンド感ですが、音についてはどういうイメージを持っていました？

「『この手は』がロックだったので、似た感じにならないようにしたいと思ったくらいしかなかったんですけど、naotyuu-さんは洋楽っぽさを意識したそうです。1番にはない音を2番に使っていたり、実は1番より2番のほうが厚めにコーラスが入っていたり、シンプルだけど飽きないような展開になっています」

—ヴォーカルもAメロは囁くような感じで、無理に張り上げていないところが

心地良いです。

「レコーディングでもヴォイスメモで録った時と同じくらいの声で歌ったんです。naotyuu-さんはヴォイスメモがすごく良かったから活かしたいと言ってくださって。それこそソファの上で歌っているみたい。声優という仕事上、声を出す時は大きな声というのが染みついているので最初は戸惑いましたけど、実際に歌ってみるとすごくしっくりきたんです。私の伝えたいことが、より伝えやすくなって。ワ〜って大声で言われるよりも、とつとつと語られるほうが心に入ってくるし、いろいろ歌っていないような声を出してきたけど、まだまだ知らないことがあるなって」

—もう1曲の「With You」も歌詞に「昔の夢」や「声」や「手」が出てきて、「I'm here」と通じるものを感じさせますね。

「意外と「With You」も応援歌っぽいと思っています。作詞の柿沼雅美さんは片想いしている女の子がウジウジ考えているところをイメージして書いたんですけど、そのイメージを大切にしつつも、私の中ではタイトル「You」はファンのみなさんのことや聴いてくれる方だと思って歌いました。Bメロで「心が不安になることもあったりするよね。でも、諦めちゃいけないよね」と歌っているところは、「I'm here」とも共通しているし、違うアプローチだけど似たような距離感というか、押しつけがましくなく、でもしっかり背中を押したり、手を引っ張っている。なぜかそういう2曲になったなって」

—「なぜか」ですか？

「こういうコンセプトでシングルを作るぞ!」と思っていたわけじゃなかった。でも、共通したキーワードがあったり、伝わるイメージが似ていて、すごく運命的な2曲だと思いました」

—また、ジャケットやビジュアルは緑の中で撮影されていて新鮮でした。

「前作は夕暮れ時の海で撮ったので、それとは感じを変えたいと思って。私は山梨県の出身で、自然の中で野山を駆け回り、動物と触れ合いながら育ったから、海よりも落ち着いて撮影ができましたね。MVは

河口湖で撮影したんですけど、ストーリー性のあるものになっています。前作とも違うし、若作りも背伸びもしていない、等身大の三澤紗千香が出せたんじゃないかと思えます」

—そういうビジュアル面やMVのアイデアも三澤さんから？

「いえ、ビジュアルやMVのことまでは考えが回ってなくて。こっこの勉強はまだあまりできていなかったんで、「三澤はどこで撮ったらカッコ良いと思います?」って訊く感じで、マネージャーさんやスタッフさんに協力してもらいました。同世代の他のアーティストとも被りたくない…誰とも被りたくないし、明るすぎず暗すぎず、弾けすぎてない、でもそんなにさわやかさも損なわれない、ちょうどいい三澤っぽさが出ているんじゃないかと思えます」

取材：榊林史章

Okmusic

このインタビューの全文を公開中!!



「I'm here / With You」

Single 9/30 Release
USM ジャパン
【初回限定盤 A】
(CD+DVD)
UICZ-9159
¥2,000(税抜)

【初回限定盤 B】
(CD+DVD)
UICZ-9160
¥2,000(税抜)

【通常盤】(CD)
UICZ-5137
¥1,200(税抜)

music UP's Q!

今月のお題:「最近買って良かったもの」

■ロボット掃除機

「猫アレルギーだから猫は飼えないんですけど、動物が好きなので何か飼いたいとずっと思ってたんですよ。でも、犬だと散歩が大変だったり、なかなかハードルが高くて、で、ネットとかでランバが動いているのを見て「可愛い!」と思って購入したら、掃除している姿が本当に可愛くて♡ ソファの上とかからずっと見てますね。「あら〜、ぶつかったの?」とか言いながら(笑)。癒しと掃除機能を併せ持つてるので、いい買い物しました。家の中を散歩し終わったら、部屋がきれいになってますからね(笑)」

yozuca*

全てはインパクトと個性を全力で出したいという想いから

数多くのゲームソング／アニメソングを歌って知られるシンガーソングライターの yozuca* が、前作『15年目の女』から約3年6カ月振りのアルバム『8M自由形』をリリース。『てんぷれっ!!』や『D.C. III DreamDays ～ダ・カーポ III～ ドリームデイズ』といった人気ゲームのテーマソングを中心に、YouTubeでも話題の「半濁音」など新曲も4曲収録した、彼女の個性と胸キュンソングが満載の一枚となっている。

— 前回のアルバム『15年目の女』はいちごを被ったビジュアルが印象的でしたが、今作はくるみ割り人形？

「そうおっしゃる方も結構いるのですが、自分的にはイギリスの兵隊さんのイメージです。帽子はジャケットからはみ出すく

らい、長ければ長いほどいいという発注をして作っていただきました(笑)」

— ジャケットにはいちごの yozuca* さんもいて、さらに聖火もあったり。

「今回のアルバムは8枚目で、自由に楽曲を作るという意味を込めて『8M自由形』

とタイトルをつけたんですね。ジャケットはオリンピックイヤーになるはずだったので、そういったデザインになっていて、競技場のスタートラインに立っているのは1枚目から7枚目までのアルバムの私をイメージしたキャラクターです」

— もしもその7人が競争したら、どの yozuca* さんが1着になると思えますか？

「作品ごとにコンセプトが違うので、恋愛レースなら1枚目か2枚目の私で、強い楽曲レースだったら3枚目の私かな？」

— そうすると今作は何レースになるんでしょうか？ いろいろな曲があるので障害物競走？

「お楽しみレースかな？(笑) オリンピックの多彩な競技さながら、バラエティーに富んだ楽曲を収録しているので」

— そんなお楽しみが満載の今作ですが、新曲はタイトルの通りどれも自由でインパクト抜群の曲ばかりですね。

「4曲のオリジナル曲を新規に制作したんですけど、どういう曲を作るかはすごく考えました。自由にやるにしても、どういう方向に振り切れればいいのかと。『留学したい』は同じ事務所の黒須克彦さんに作っていただいたんですけど、“遊び心を盛り込んだ曲にしてほしいです”とお願いしたら、これまで書いていただいた曲のどれにも当てはまらない、初めて聴くタイプの曲が上がってきてすごく驚きました」

— ラウドな展開もあるバンドサウンドで、歌が入ると急にポサノヴァになるトリッキーさが意表を突きます。

「ポサノヴァのところは日本語じゃないほうが曲にハマると思って。それに私がいきなりフランス語で歌い出したら面白いじゃないですか(笑)。オリンピックがテーマのひとつでもあったから、国際色を取り入れたいというのもあって、曲の最後に英語、中国語、韓国語、スペイン語なども出てきます」

— 新曲はフランス語を取り入れた「留学したい」の他、熊本弁で歌った「ネイ

ティブスピーカー」、ほぼパピペボで作った「半濁音」と言葉に関する曲が多いですね。

「それはまたたます(笑)。でも、「ネイティブスピーカー」は熊本弁をどうしても入れたくて、『プロ集団製作所』という配信番組の中で熊本弁を話すコーナーをやっていたことがあったんですけど、毎回視聴者さんからの反応が良くて、これを曲にしてみたいと思ってたんです」

— 間奏には「おてもやんサンバ」が出てくるという。

「アレンジャーの lotta さんが熊本色を出してくださいました。熊本では毎年『火の国まつり』というお祭りが開催され、期間中は「おてもやんサンバ」がずっと街に流れているので、熊本県民にとってソウルミュージックとして根づいているんです。だから、間奏で「おてもやんサンバ」が流れた時、私のテンションもプチ上がりました！」

— これを聴いて熊本に行ってみたくありませんでしたよ。

「お水も空気も食べ物も美味しいのでぜひ！」

— 「半濁音」は YouTube で MV が公開されていて、何とも言えないシュールな踊りがツボでした。

「アルバムのコンセプトのひとつにシュールさもあって。なので、「半濁音」を先行して公開するにあたってシュールなダンスを踊ったら面白いんじゃないかと」

— あえての無表情なんですね。

「あえてです！ 歌が歌なので普通に歌う感じではないし、ああいうシュールなダンスがついていたほうが独特の世界観が伝わりやすいと思って。18年も音楽をやってきて初めての挑戦でした」

— でも、どうしてパピペボで曲を作ろうと？

「全てはインパクトと個性を全力で出したいという想いからです！(笑) 前作『15年目の女』の時も同様のコンセプトがあったのですが、前回とは違うアプローチで yozuca* を応援してくださっているみなさんが楽しんでくれて、なおかつ驚いてもらえるような曲が作りたいと思って。

それこそネタ出しのようにテーマを考えていった過程で、こういう曲のアイデアが浮かびました」

— 「ソフトクリーム」は流麗なバラードなのに、『アイスが食べたい』と歌い出すギャップが衝撃的でした。

「こんなに良いメロディーに乗せて、何を高らかに歌っているんだ！? って(笑)。アレンジャーの安瀬 聖さんに“ごめんなさい！”と言いたいです(笑)。もともとはバンドサウンドだったんですけど、ディレクターの土井潤一さんから“すごくきれいなアレンジでギャップのあるくだらないことを熟唱したら面白いんじゃない?”とアイデアをいただいたんですよ」

— 歌いながら自分で笑ってしまわなかったですか？

「ああ…「ソフトクリーム」ではないのですが、配信イベントで「半濁音」を生で歌った時、笑って歌えなくなるひと幕がありました。私とは真逆のしっとりとお洒落な音楽性を持った CooRie さんが先に歌ったんですが、その CooRie さんの素敵で世界観をぶち壊すかのように「半濁音」のイントロが流れ、いざ『ピンポンパン』って歌い始めた瞬間、“私はいったい何をやっているんだ?”って我に返ってしまい、笑いを堪えきれず、頭から笑い直しました(笑)」

— ゲーム『D.C. III DreamDays ～ダ・カーポ III～ ドリームデイズ』OPテーマ「キミと僕のキセキ」なども収録されているのですが、yozuca* さんのデビューは『D.C. ～ダ・カーポ～』のオープニングテーマ「ダ・カーポ～第2ボタンの誓い～」(2002年8月発表)でした。

「もう19年目ですけど、『ダ・カーポ』のシリーズがずっと愛されていることが嬉しいですし、そこにずっと起用していただけのことには感謝の気持ちばかりありません。自分的にも『ダ・カーポ』はともに歩んできた存在なので、『ダ・カーポ』関連の曲だけを聴いても、デビュー当時の歌声とか楽曲とか自分の歩みが分かりますね」

— 「ダ・カーポ」シリーズの楽曲は青春感や儚さ、切なさを、あらゆる角度で切り

取ってますが、その切り口や視点はどのように考えているんですか？

「以前は自分が作品の中に入り込んで、登場人物たちの感情を歌うことが多かったんですけど、今作に収録の「キミと僕のキセキ」は一步引いた視点で歌詞を書くことができました。“もしも恋愛の神様がいたらどう感じるのかな?”と」

— ついに神様の域ですか！

「神視点です(笑)。例えば“この人が好きだ”と思って告白するとして、それは自分で道を選んで人生を歩んでいるつもりだったとしても、本当は神様が決めていて、まんまと出会って、まんまと恋に落ちているのかもしれない。そうだとしたら神様は出会ったふたりをどういう気持ちで見ているんだろうと。それを“運命”と云うのかも知れないですね。そんな想像をしていたら歌詞を書く手が止まらなくなって、気づいたら書き上げていました」

— では、そんな今作をファンの人にどう楽しんでもらいたいですか？

「「ソフトクリーム」を除いてテンポの良い曲が揃っているので、元気がない時に聴いてほしいし、元気な時にも聴いてほしいですね。そっと側にいるというか、いろいろな局面で yozuca* の曲が、みなさんの人生のスパイスになってくれたら嬉しいですよ」

取材：梶林史章



このインタビューの全文を公開中!!▶



『8M自由形』



Album 9/23 Release
Lantis
LACA-15828
¥3,000(税抜)

music UP's Q!

今月のお題：『最近買って良かったもの』

■照明器具

「何だろう？ 失敗したものならいっぱいあるんですけど(笑)。あっ、コロナの影響もあって自宅で撮影する機会が増えたので、照明器具を買いました。失敗した経験があるから、ちゃんと評価のいいものを選んで(笑)。箱型で幕を張るタイプのものが左右にあって、光量もあって明るく、いい買い物しましたね。ただ、それが届いた頃に外出自粛が解除されたから、まだ一回しか使ってないんですよ。今後も使う機会はあるのかな？」



CooRie

コロナ禍で迎り着いた ナチュラルな気持ちへの回帰

多くのゲームやアニメのテーマソングを手がける rino のセルフプロデュースプロジェクト・CooRie が完成させた、2年9カ月振りのオリジナルアルバム『NATURAL7』。そこには激動の半年を送る中で揺れ動いた感情が詰まっており、改めて人とのつながりの大切さを実感したと彼女は語る。

—“NATURAL7”というタイトルはどのような気持ちでつけたのでしょうか？
「自然とか原点という意味ですか？」とよく尋ねられるのですが、それとはちょっと違っている。装飾ばかりの表現がここ数年続いて、面白いアプローチとか奇をてらったこととか、そういうものが楽しいと思っていたんですけど、でも、今作は削ぎ落

としていく作業がしたかったです。“なぜ CooRie を始めたのか？”という原点に戻って、もともといたプロデューサーの方が好きだと言ってくれた私の声を軸にして、シンプルにアルバムを作りたいと思ったんですよ。18年もやっている、いろんな技術や思考が生まれる中、どんどんシンプルになれなくなってしまってい

て。そこでもう一度ナチュラルな気持ちで作ろうということと、7枚目のアルバムという意味で“NATURAL7”と
—なるほど。そういう自然な気持ちで作ったアルバムである。
「シンプルに作る気持ちを、もう一度取り戻したかったです。私は作家もやっているんですけど、作家をやっているといろんなコンテンツに助けられることがあるんですよ。作品のキャラクターだったり、歌手さんの声や技術だったり。でも、自分が真ん中になって音楽を作っていく作業は、それとはまったく違うものなんです」
—タイアップとか何かお題があるところが作りやすいとも言いますよね。
「向かうべき答えがありますからね。でも、いざ自分の曲となると、どこに向かえばいいのか…デビュー当時は“自分のことを分かってほしい”という気持ちに向かえば良かったんですけど、18年も経つとそういう段階ではない。それにアルバムを作ろうと考え始めた時と今では、世界が変わってしまったのもあって」
—もともとは6月にリリースされる予定だったのが、コロナの影響で発売日が3カ月伸びましたからね。それによって新しく作った曲もありましたか？
「『NATURAL』以外の新曲の歌詞は、ほとんどをそのあとに書きました。曲はその前からあって、ワンコーラス分だけ歌詞があったものもあったんですけど、それも書き直したし。『ROCK じゃない』と『まどろみ』は曲もコロナ禍で作ったものだし、『まどろみ』を作ったのはつい最近で…いつ作ったのか聞いたら引くと思います(笑)。とはいえ、コロナ禍のことを直接的に歌っているわけではないんですけど、連日いろんな人の意見が耳に入ってくるので息苦しさを感じていたし、今までのアルバムとは確実に考え方が変わりましたね。新曲の6曲は、1曲目と6曲目ではマイクの前に立つ気持ちが大がら違ったというのがあります」
—コロナ禍の前、緊急事態宣言中、そして今では、物の見方や価値観がすごく変わりましたからね。
「それによってやっと迎り着いたのが“ナチュラル”という気持ちですね。世界が変わり始めた頃は、みんなどうにかしてライブをやろうとしていたけど、それが容易ではないことが分かり、みんな工夫をし始め、今はできることで音楽を表現しているというスタンスになった。私もコロナ

禍で学生時代の友達と以前よりも深くつながるようになったという変化がありました。カナダに住んでいる友達から向こうの医療現場の話が聞けたり、子供がいる友達からも状況を知ることができて。音楽業界ではないところでリアルな声をいっぱい聞けたことは、制作においてすごく影響がありましたね」
—刺激になった？
「刺激もそうだし、立場によって感じ方がすごく違っている。地域によっても違ったり、働きに出ている人や家にいる人でも違いがあることが分かったので、あまり浸り込まないほうがいいんだと。とにかくやさしい気持ちを手放さないようにしたいと思いました」
—実際、やさしくて穏やかな雰囲気のあるアルバムですね。シティポップ調の表題曲『NATURAL』の歌詞には猫が出てきますが、CooRieさんは猫好きとのこと。
「以前に飼っていた猫が亡くなって、その子が亡くなって初めての曲だと思って作ったのが『NATURAL』なんです。当たり前のようであった存在が突然いなくなった時の気持ちを書きました。亡くなった子はCooRieの活動が始まった頃に我が家に来て…その子は16年ずっと一緒にいたんです。アルバム制作の途中に新しい子を迎え入れたので、『まどろみ』では新しく迎えた子のことを歌詞に入れてみました。もちろんファンみんなに早く会いたいという気持ちを込めて作ったんですけど、2番に出てくる『ふわふわと』というところがそう。猫で始めて猫に戻ることで、やさしい気持ちでレコーディングを終えることができて良かったです」
—コロナ禍という部分では、声だけで構成された『Music Kitchen』のMVをご自宅で撮影されたんですよね。
「所属メーカーの『MixUp!』という企画の一貫だったんですけど、ステイホームがテーマで。とにかく映像素材を集めなくちゃいけないと思って、女優ライトみたいなものを買って…その時はまだ新しい子を迎えていなかったの、何を撮りたいい

んだらう？”ってなりました。あんなに自宅をカメラで撮ったのは初めてでした(笑)」
—音楽と料理は、やっぱり似ているものですか？
「似ていると思います。素材が大事なので、料理もいいトウモロコンが手に入ったら、シンプルに料理するほうが絶対に美味しいじゃないですか。音楽も好きな楽器、好きな空間、好きな人があればいいし。『まどろみ』はそれがうまく出せたんじゃないかと思います。シンプルな曲、シンプルな言葉、大好きな演奏、リラックスして歌える空間…それらが揃っていることが、自分にとっての理想の音楽で、最後の最後にそこへ迎り着いた感じです。今後の夢として、長年一緒にやっているサポートバンドのメンバーと一緒に、今までの曲をアコースティックアレンジにしてアルバムを作ることってのがあるんですね。人が見える音楽が好きなので、“この人の演奏だからこうなるんだ”っていう、心の揺れみたいなものが音楽にもあっていいんじゃないかって」
—最近ではスーパーで野菜を買うと“この人が育てました”という生産者さんの写真が貼ってあったりしますね。
「顔が見えるのは大事ですよ。たぶん人が好きなんですよ。料理を食べべてくれる人、音楽を聴いてくれる人、そういう人たちがくれる気持ちを活かす存在でありたいと思って。そんな人とのつながりみたいなものに心が揺れます。決して自己完結ではないというか」
—その日に入った素材で気ままに作る、お任せの料理屋さんみたいな感じですね。
「ああ、そうかもしれない。構築された音楽が好きだった時期もあったけど、どんどん手放したくなっている気がします。もう一回、戻るかもしれないけど、今はそういう音楽を作りたいと思っています」
—『ROCK じゃない』で歌われていることから、そういう人間味みたいなものを感じました。
「そうですね。ロックに生きるということは無様に生きることじゃないかと。むしろ、カッコ悪くあるべきというか。“こうだ！”と

決めたら貫き通すとか、情けないところもある人のほうがロックで愛おしいと感じるんです。それに照らし合わせると、私はまだまだロックじゃないなって。自分はもともと細かくキチキチとやってきたタイプでしたけど、コロナ禍でいろんなことを思ったので、今後はロックに生きたいです」
—rinoさんは作家としてキャラクターソングなどの提供もされているので、ゲームやアニメのテーマソングも収録されているのですが、ご自身の曲とのバランスはどんなふうにご考えていますか？
「CooRieのほうかしんどいですね(笑)。作家として誰かを描くのは楽しいけど、自分を掘り下げるのは一生ゴールがないことですからね。それなのに締め切りがあって、今の自分を表現しないといけないのは本当にシビれます。でも、ライブをやると自分の曲が届いた人と会えるので、そこで全てが浄化される感覚です。あの苦しみは、ここに来るためのものだったんだなって。楽器のレコーディングで自分の曲を楽しそうに弾いてくれるミュージシャンに出会うこともそうで、すごく救われた気持ちになります。もともと私は作家をやったんですけど、それも誰かの人生に寄り添ったり触れたりしたかったからなので。結局、その部分はシンガーソングライターとしても変わらないんだと思います」

取材：榊林史章



このインタビューの全文を公開中!!▶



『NATURAL7』



Album 9/23 Release
Lantis
LACA-15827
¥3,000(税別)

music UP's Q!

今月のお題：『最近買って良かったもの』

■キャットタワー

「6月だったかな？ この自粛期間中に猫を飼ったんで、とにかく猫グッズを買ってました。昨年、16年連れ添った猫が亡くなってしまったから、一周忌が終わってから新しい子を迎え入れようと思ってたところに、その子との出会いがあって…スコティッシュフォールドという長毛種で、3月くらいに生まれた子なんですけど、すごく可愛いんですよ。溺愛しています(笑)。同じマンションの真上の階の人も猫を飼って、外から窓越しに部屋の角にキャットタワーを置いているのが見えるんですね。“あ、あそこに座ってる”みたいな。それを上下の階でやったら面白いと思って、うちもキャットタワーを買いました(笑)。まだ子猫だから、あまり登ってこないんですけど…」

SIZUKU

歌声によってマジックにかかればいい

映画『バイバイ、ヴァンプ!』のエンディングテーマを表題曲に据え、劇中歌「Peace of the World ~ Vamp ~」をカップリングに収めるシングル「FANTASY MAGIC」。両曲の作詞作曲&プロデュースを手がけた GOD にも同席してもらい、本作について訊いた。



L → R : GOD (Pro), SIZUKU (Vo), photo by MANA

—「FANTASY MAGIC」は映画『バイバイ、ヴァンプ!』のエンディングテーマで、カップリング曲の「Peace of the World ~ Vamp ~」は同映画の劇中歌なのですか、映画のために書き下ろしたということですか？

GOD: そうです。台本を読んで書きました。聖歌を歌うシーンがあったんで、SIZUKU は音大出身だから打ってつけだと思って、映画のエグゼクティブプロデューサーに相談したんです。「まだ歌手が決まってないのぜひ」ということになり、それがエンディングテーマになるとしたら、最後のクライマックスのシーンで使われる劇中歌になったんですよ。そうすると別にエンディングテーマが必要になるので、それも作ったというのが

経緯です。歌声を違う感じにして、それも SIZUKU に歌ってもらおうってことになりました。一本の映画で同じアーティストが2曲も歌えるのは珍しいことですよ。

—確かに。では、「FANTASY MAGIC」からうかがいたいと思います。しっとりとしたハートフルなナンバーなのですか、どんなイメージがあったのでしょうか？

GOD: この映画はLGBTを題材にしていて、同性愛を取り上げているんですね。なので、男女の恋愛をはじめ、同性愛、友情とかいろいろな愛があるけど、SIZUKU の歌声によってマジックにかかればいいという。彼女の歌声を聴いて誰かを愛するようになる…それは男同士であっても。なので、「FANTASY MAGIC」と。

—以前にお話をうかがった時、GOD さ

んは歌詞もメロディーも全と一緒に降りてくるとおっしゃってましたが、それらが台本を読んで降りてきたのですか？

GOD: 自分のオリジナルの時は全部降りてくるんですけど、映画とかの台本がある時はそれを読んでどう思うかですね。何も感じなかったら、それはもう楽曲提供はできないってなります。いくらか台本があって、ちゃんとしたテーマがあっても、作れないものはお受けできないですからね。まあ、持っているストックに合うものがあるって、それを使うケースも多々ありますけど。

—「FANTASY MAGIC」はどんな曲を作ろうと思ったのですか？

GOD: 台本を読んだから結末は分かっているんで、この曲がエンディングで流れることによって「愛の形は人それぞれにある」と思えるような歌詞であり、曲の世界がイメージされました。実はこの映画、ネットで大炎上したんですよ。同性愛を取り上げているんですけど、コメディ映画なんでギャグでピュアな愛情を描いているんです。

SIZUKU: ヴァンパイアに噛まれて同性愛に目覚めるけど、主人公の男の子には好きな女の子がいるから、その子と結ばれるために戦う…という内容なんです。

GOD: それの面白いところだけを掻い摘んだ予告編を観た人たちが問題提起して、でも、本編をしっかりと観てもらえば、男女の恋愛も同性愛も愛に変わりないというか、そういうことをテーマとしていることが分かってもらえると思います。

—映画を拝見してないのでも言えないのですが、LGBTはデリケートなテーマですからね。あと、歌詞に「それは歴史さ」とあり、「遠い過去から」や「永遠に誓う」と時間の流れを描いているのは、ヴァンパイアということですか？

GOD: そうです。ヴァンパイアの家系が何十年もの年月を経て日本に来たっていうストーリーだったので、時空を超えた世界というか、愛というか、そういうところを描いています。

—SIZUKU さんはこの曲のデモを聴いた時、どんな感想を持ちました？

SIZUKU: いつもデモは GOD のアカペラなんですけど、すごくいい曲だと思いましたね。それがアレンジされたものを聴いた時はびっくりしました。「うわっ、こういうサウンドになるんや」と。"FANTASY MAGIC" というタイトルから幻想的なものになるとは思ってんですけど、想像以

上でした。GOD: やっぱりね、アカペラでは感動してもらえないんですよ。「ふ〜ん、こんな感じだね」と(笑)。

—そのアカペラのデモを渡して編曲してもらいますよね。アレンジャーの方にはどんなふうに伝えたのですか？

GOD: デモを作った時点で僕の頭の中では曲として完成しているんで、「こんな感じで〜」って伝えて、上がってきたものがそれと違ってた。そこは何回も説明してやり直してもらいます。

—確か GOD さんは譜面が書けないし、楽器も弾けないんですよ。

GOD: はい。だから、例えば昔の映画音楽を引っ張り出してきて「こんな感じなんだ」と。ほんと細かいやり取りですよ。「映画の「フットルース」みたいな音楽で」と言っても、「何分何秒に流れるフレースが教えてくれ」と言われたりしますから。

—では、SIZUKU さんはどういうことを意識して歌われました？

SIZUKU: 私も映画に出演させてもらっているんで、作品を自分なりに理解して歌いました。人それぞれに愛の形はあるけど、どれも同じ愛というか。「愛の形人それぞれに」と歌詞にもありますね。

GOD: 映画では家族愛や兄弟愛など、いろんな愛を描いてましたからね。

—聴く人の免疫力を上げるというシータ波を持つ SIZUKU さんの歌声がエンディングに流れると、最後の最後に全ての感情を包み込むような感じになるんですよ。

SIZUKU: そういう気持ちで歌ってました。

GOD: でも、シータ波でずっと出てるわけではないんですよ。シータ波が出るような歌唱っていうのがあるんです。高音、中音、低音で出るんですけど、例えば「サビのここからここまでにしている」とかなんで。だから、SIZUKU がしゃべってもシータ波は出てないんです。あくま

でも歌声なんです。歌った時に「あっ、今のところシータ波だね」と。

—もう一曲の「Peace of the World ~ Vamp ~」ですが…すごい曲ですね。

GOD: 映画を観ている人を驚かしたいと思って(笑)。僕が大好きな「オーメン」や「サスペリア」みたいな映画の音楽というか。

—まさに。チェンバロやパイプオルガン風の音が入ったゴシック調というか、荘厳なサウンドで。

GOD: アレンジャーとマンツーマンで「こんなイメージで〜」と伝えて徹底的に作っていきました。まあ、クラシックなドラキュラのイメージですね。アレンジャーはかなり難しかったと思います。

—J-POP の範疇じゃないですかね。

SIZUKU: だから、デモを聴いた時は「これを歌うのはめっちゃ大変やな」と思いましたね。もともと声楽をやっていたんで、こういう雰囲気曲は好きではあるんですけど、映画のシーンを思うと「なるほどな」と…台本にも「グレゴリオ聖歌」と書いてましたから、で、アレンジが上がってきたら「うわっ、こんな感じか〜！」って。

—この曲のデモも GOD さんのアカペラだったんですか!?

SIZUKU: そうです(笑)。

GOD: さすがにデモには壮大な感じはなかったです(笑)。

—この曲はどういうことを意識して歌われました？

SIZUKU: 映画での私の役がオペラ歌手で、歌声でヴァンパイアだらけになった街を浄化するっていうストーリーだったので、そんなイメージで歌いました。

GOD: 彼女の歌声を聴くとヴァンパイアがもとの人間に戻るんですよ。感動のクライマックスです!

—そこはあまり言うとなパレになるのでその辺で(笑)。曲としては J-POP よりも聖歌的なで、発声も全然違いますよね。

GOD: 普段の J-POP でこんな歌い方をしたら怒りますよ(笑)。

SIZUKU: こういうふうには歌うのは久しぶりだったんで、なかなか声が出なくて大変でした。

—とはいえ、もう聖歌というわけでもないの、やはり J-POP を歌ってきたからこそこの歌唱ですよ。サビのキャッチーさは J-POP ですから。

SIZUKU: ああ、そうかもしれないです。

GOD: 全てクラシックでも、全て J-POP でもダメですから、その使い分けが難しいんですよ。この曲は普通の J-POP のアーティストには歌えないでしょうね。

—そんな2曲を収める本作ですが、聴いてほしいポイントはどんなところですか？

GOD: やはり彼女の歌声ですね。シータ波によって世界中の人が免疫力を上げてほしい…今ってコロナによってみんなの免疫力が下がっているんですよ。精神的にも病んでいるし。だから、映画を観ている観ていないじゃなくて、これを聴いて気持ちを和らげてほしいですね。

SIZUKU: 今の若い人たちって恋愛をあまりしないって聞くので、そういう人たちに「愛って大事なんだよ」と伝えてほしい…そんな感じですかね。

取材:土内 昇



このインタビューの全文を公開中!!



「FANTASY MAGIC」



Single 9/16 Release
A-force
YZWG-10069
¥1,182 (税別)

music UP&Q!

今月のお題:「最近買って良かったもの」

■ SIZUKU…コンサートウクレレ

「ウクレレを2年半くらい前に始めたんですけど、その時は長続きするか不安だったんで、初心者用の安いソプラノウクレレを買ったんですね。やっぱりやっていると音域に少し物足りなさを感じてたんですよ。なので、コロナの外出自粛期間が明けた時に新しいソプラノウクレレを買ったんですけど、店員さんにコンサートウクレレを勧められて、音域も広がるし…しかも、ピックアップ付きだったんです。それまでは自分で付けてたし、チューナーも内蔵されてるんで、助けてもらったものを買いました。ちょっと音域が広がるだけで演奏できる曲が全然違ってくるので、ほんと買って良かったです!」

■ GOD…映画「帰って来たドラキュラ」のポスター

「僕、ドラキュラのシリーズが大好きなんで、昔の映画のポスターとかパンフレットをよく「ヤフオク!」で落ししてるんですけど、先日、何年も落しできなかった「帰って来たドラキュラ」という映画のポスターが超安い希望価格で落してきたんです! マニアが多いせいとか、なかなかゲットできないんですよ。商品自体も何年待っても出てこない。特に「帰って来たドラキュラ」はもっとも手困難と言われる「吸血鬼ドラキュラ」と同じくらいレアなんです。届くのが待ち遠しいですね。ちなみに相場価格だと10万円は下らないです!」



chico with HoneyWorks 期間限定コラボカフェ開催!

開催期間 9月3日(木)～9月27日(日) 期間ごとにコラボメニューや特典の内容が入れ替わります
第1弾:9月3日(木)～9月14日(月) 第2弾:9月15日(火)～9月27日(日)

開催店舗 TOWER RECORDS CAFE 渋谷店 TOWER RECORDS CAFE 名古屋栄スカイル店
【営業時間】平日11:15～19:55 土日祝日11:15～21:45 【営業時間】平日11:15～19:55 土日祝日11:15～21:45
TOWER RECORDS CAFE 梅田NU茶屋町店
【営業時間】平日11:15～19:55 土日祝日11:15～21:45

詳細はこちらからご確認ください。



MENU



※画像は一部メニューのイメージです。

特典

予約特典:缶バッジ

チケットぴあにて「予約特典&お食事券付き予約チケット」をご購入された方にランダムで1枚お渡しします。

当たり缶バッジにはCHICOさんの直筆サイン入り!

※デザインは随時です。 ※全4種からランダムでの配布となります。

※絵柄の指定や、同柄が出た場合の交換等はお受けできません。

※チケットをお持ちのお客様は、ご利用人数にかかわらず、予約特典をご予約座席数の枚数をお渡しいたします。



メニュー特典:ポストカード

コラボメニュー1品ご注文につき、ランダムで1枚お渡しいたします。

※デザインは随時です。 ※全5種からランダムでのお渡しとなります。

※絵柄の指定や、同柄が出た場合の交換等はお受けできません。 ※特典は先着でのお渡しです。なくなり次第終了となります。

3点セット特典:クリアカード

コラボフード+コラボスイーツ+コラボドリンクの3点ご注文ごとに、クリアカードを1枚お渡しいたします。

※期間ごとに絵柄が異なります。 ※特典は先着でのお渡しです。なくなり次第終了となります。



The new way to enjoy music

Discover What's New!

音楽の魅力を伝える音楽専門サイト



<https://www.barks.jp/>

さまざまなアーティストの最新情報を集約



<https://okmusic.jp/>

歌謡曲・演歌に特化したエンタメ情報サイト



<https://www.kayou-center.jp/>

女性アイドル専門メディア



<https://popnroll.tv/>

新グラビア企画『邂逅のリフレイン』chapter.1

西葉瑞希

BARKSが運営するアイドルメディア『Pop'n'Roll』の新グラビア企画『邂逅のリフレイン』のアウトテイクカット。記事では、映画『魔進戦隊キラメイジャー エピソードZERO』での柿原瑞希役で大きな注目を集めている西葉瑞希らしいあどけない童顔フェイス&大人びた美ボディで魅せながらも“どこか違和感のある”カットをお届けしている。

撮影：曾我美芽
ヘアメイク：清水深優



MUSIC SUPPORTERS

インディーズシーンを引っ張るアーティストの情報を、インタビューで紹介していきます。music UP'sのWebでは、インタビューの拡大版や過去の記事がまとめてご覧いただけます。「MUSIC SUPPORTERS」で、あなたの運命のアーティストを見つけよう！



[MUSIC SUPPORTERS]
https://okmusic.jp/ups/music_supporters

レトロな少女



L→R 佐藤餓死(Vo)、成山まこと(作詞・作曲)

レトロナショウジョ:バンド経験はないがパソコンで作曲をしていた成山まことが、理想のヴォーカリストとして見つけた佐藤餓死とふたりで、2019年2月より活動開始。MVをYouTubeにアップしていったところ、そのポップなメロディーと独特な音楽性にネット民からの反応がじわじわと増えいった。今まで発表してきた楽曲と新曲をかたちにするため、20年8月にタワーレコード限定・初回プレス限定盤シングル「タワレ娘」でCDデビュー。
<http://retronusyojo.com/>

ネットで話題の男女ユニットによる新たな挑戦

2019年2月からYouTubeにオリジナル曲のMVを投稿しているうちに、レトロでモダンな曲調と、儂げながら軽やかな女性ヴォーカルが歓迎され、いつしかネット民の支持を集め始めたユニット、レトロな少女。彼らがデビューアルバム「1限目モダン」をリリースした。そんなレトロな少女の始まりは、それ以前からDTMで作った楽曲を発表してきた成山まこと(作詞・作曲)が、集団行動のライブに刺激されたことで改めて真剣に音楽に取り組もうと考えたことだった。その後、理想の歌声を見つける紆余曲折を経て、ついに出会った佐藤餓死(Vo)を迎え、活動が本格化。今回のCDリリースをきっかけにネット民にとどまらない、より多くのリスナーにその存在と音楽の魅力をアピールしようとしている。

「餓死ちゃんの声は録音していてもすごく楽なんです。音を絶対外さずに一発でパンパンパン決めていく。あと、癖がないんです。いい感じのドライな声なんです。それがびびり入ってくる。聴いていて疲れない。いくらでも聴いていられます」(成山)

成山が絶賛する歌声を持った佐藤との出会いは、音楽コラボSNS「nana」に佐藤が投稿していた相対性理論のカバーを聴いたことだった。相対性理論、集団行動でも活動する真部修一の音楽を理想のひとつに掲げてレトロな少女を始めた成山にとって、佐藤の歌声はまさに探し求めていた声だったのだろう。一方、相対性理論のやくしまるえつこの歌を聴き、「他にはない歌声だ」と魅力を感じながら「自分も歌いたい」と思った佐藤にとっても、成山が作る曲は「どタイプ」なのだそう。

「ギターの単音の使い方もそうなんですけど、そもそも自分の好きな曲調がペンタトニックな感じで、成山さんが投稿していたデモを一回聴いただけで「あ、これ歌いたい」と思いました」(佐藤)

今作にはこれまでYouTubeで発表してきた6曲に、新曲の「さんずのこたえ」を加えた全7曲が収録されている。

「ここからが始まりということで、確かにYouTubeにはあるんですけど、僕らはまだ結成してからそんなに時間も経っていないし、認知度的にもこれからだし、多くの人にとっては新曲なわけだし、ベースラインを変えたり、ギターを録り直したり、別のヴォーカリストが歌っていた「私の大統領」の歌を餓死ちゃんの歌に差し替えたり、今までの作品をブラッシュアップする機会に恵まれたのは良かったです」(成山)

ノスタルジックでキャッチーな曲ももちろんだが、作曲・編曲に加

え、成山が女生徒の視点から書いた歌詞も彼らのユニークさを決定づける大きな聴きどころだ。

「自分の想いや経験を滑り込ませながら女性化するというか、レトロな少女化して餓死ちゃんに渡しているんです」(成山)

「いくつかのマキシマイザー」の「マキシマイザー」のような男性があまり知らない言葉を使いながら、しかもちゃんとマッチしている歌詞を書いているってすごいと思います。「西八行き最終バス」の歌詞なんです、大学生の女子なら「分かる！」って言葉がたくさん入っていて、全然違和感ないんです。だから、歌いやすいし、「分かる！」って思いながら歌っています」(佐藤)

その「西八行き最終バス」はベダンチックな遊び心が感じられる他の曲にはないリアルさが、ある意味異色と言えるのだが、それについて尋ねると「いやあ、あまり話したくないんですよ(笑)。大学時代のリアルな思い出が詰まってるので」と成山は苦笑い。そして、成山が「今までやってきたことの結晶であると同時に新たな挑戦」と語る新曲の「さんずのこたえ」は、ふたりがcinema staffの辻友貴(Gu)、ex.雨のパレードの是永亮祐(Ba)、arko lemmingの有島コレスケ(Dr)と一緒に演奏しているMVも話題に。

「ユニットとしての在り方は非バンド的なので、映像はそれとは真逆にしたら面白いんじゃないかというレーベルのアイデアです」(成山)「状況が許せばライブもやっていきたいですね。音源がリンドサウンドなので、バンドスタイルでやりたいです。MVに出演してくださった方々と一緒にできたら嬉しいんですけど、やってくれるかな? レト女らしくもあり、音源とはまた違う面も見せたいと思っています」(佐藤)

彼らのこれからは、さまざまな可能性に満ちているようだ。ある意味、運命的な出会いを果たしたふたりが今後、どんな活躍をしてくれるのか楽しみにしている。

「基本的に曲が書ければ幸せってところはあるんですけど、今後の目標を挙げるとしたらふたつあって、まずひとつは集団行動と対バンしたいです。もうひとつはこのCDをリリースさせてもらったことをきっかけに、これからもっといい作品が作れるんじゃないかと思っています。というのは、この業界に入ったことと得られる音楽性もあると考えているからなんですけど、もっといい曲を書きたい。それに尽きますね」(成山)

取材:山口智男

SHIFT_CONTROL



L→R 宮崎良太(Ba)、くまおかりオ(Dr)、アサノ チャンジ(Vo&Gu)、岡村耕介(Gu)

シフトコントロール:2019年11月に本拠地の岐阜より本格的に活動。激情と轟い響を帯びたギターロックを基盤に、変拍子を織り交ぜたサウンドと、突き刺すほどに真っ直ぐ響くハイトーンヴォイス、疾走感とノスタルジックを行き来するメロディーで、リスナーをエモーショナルな世界へとトリップさせる。20年1月に初の全国流通ミニアルバム「Afterimage」を、同年10月に2ndミニアルバム「Slowmotion」をリリース。
<http://shiftcontrol.info/>



Mini Album 10/14 Release
[Slowmotion]
No Big Deal Records
NBPC-0081
¥1,800(税抜)

苦しい時間すらも愛おしいと思えるようになった自分がある

今年3月に開催された「No Big Deal Records Audition 2020」で優勝を果たしたBye-Bye-Handの方程式。レーベル所属第一弾となるミニアルバム「Flowers」は、5月に脱退したベースの肇が参加した最後の作品であり、「なくなるから美しい」という美学も反映された彼らの再出発を飾る一枚に。

「どの曲も作ったタイミングがバラバラだから統一感がない7曲なんですけど、だからこそその時々気持ちが詰まっていて、なおかつ楽しかった時間を書いたものがほとんどなんです。終わってしまった恋を歌っているけれど、美しかった瞬間を切り取った曲ばかりで、例えば花は枯れてしまおうし、花火は消えちゃうから、夢さあててこそ美しく見えるというか、枯れてしまおう、消えてしまおうから美しいっていうのをずっと感じていたので、そう思った時に出てきたタイトルが「Flowers」なんです」(泰輝)

2019年2月にリリースされた「湿恋」では、失恋の痛みや後髪を引かれる想いを歌っていたが、今作では自分の中にある愛情だったり、喪失感を受け止めているイメージがある。

「苦しい時期を超えたアルバムでもあって、苦しい時間すらも愛おしいって思えるようになった自分があります。アルバムで言いたいことの全体を占めているのは「ラブユー・シユウ」だと思ってるんですけど、ただ「頑張れ！」っていう曲じゃなくて、悲しいことすらも美しいという意味で、悲しい部分のこともしっかり描写しているというか。この曲をはじめ、全てを踏まえて美しいってことがアルバムを通して書きたかったこと」(泰輝)

また、今年で結成5周年の彼らだが、陽哉曰く「この5年間が助走で、今やっとスタートが切れたという感覚」とのこと。5月からはもともとBye-Bye-Handのファンだったというryutoがサポートベースとして加わり、すでに新曲も多数できているそうだ。全曲が新曲の今作に至っても茅津が「とにかく泰輝の曲を作るベースがすごく早くで、この中にも入りきらなかった新曲がたくさんある」と話している通り、エネルギー全開で現体制でもスピードを緩めることなく活動していく。

コロナという逆境の中で作った渾身の2ndミニアルバム

「そもそもそんな簡単にへこたれないという信頼が、僕は3人に対してあるんですよ。僕自身、まだまだチャンスはあると信じていますしね」(アサノ)

活動の拠点を岐阜から東京に移し、今年1月に1stミニアルバム「Afterimage」をリリースした4人組ロックバンド、SHIFT_CONTROL。その後、新型コロナウイルスの影響で3月の東名阪ツアーが延期になってしまい、自分たちではどうにもできない無力感や虚しさに挫けそうになったという。しかし、前掲の発言通りライブができないピンチをチャンスに変えようと、活動の全てを2ndミニアルバム「Slowmotion」の制作に注ぎ込むことに。前作同様、もっともっといういるな人に自分たちの存在を知ってほしいという想いをさらに追求した結果、エモーショナルな歌×轟音のオルタナロックという彼らの音楽性に「シンプルに曲の良さ、メロディーの良さ、歌詞の良さを追求した」という「Irony」、轟音の演奏とキーボードなメロディーの組み合わせがポップな「逆夢」、アサノのルーツであるELLEGARDENへのリスペクトを込めた「アイウォンチュー」。そして「歌詞を書く上で使う言葉や言い回しは一回聴いただけでも伝わるようにしたい」と考えたという「サナギ」のような新たな魅力を印象づける曲が加わった。特に希望と不安が入り混じる未来を信じる決意を歌った「サナギ」の歌詞はバンドの所属表明でありながら、多くの人の共感を得ることだろう。

「サナギ」はレコーディングの段階から、リスナーのみんなの背中を押せるんじゃないかと思っていたので、初めてそういう想いをプラスしてドラムを叩きました」(くまおかり)

そんなふうな曲のバリエーションが広がった理由としては、「作曲者として次の段階に積極的に曲作りに参加したことも大きいという。

「コロナでスタジオに入れないからこそ、それ以外のアプローチ方法を自分たちのものにしていかないとダメだと考えたんです」(宮崎)

「コロナという逆境をうまく利用したみたいなのところはありますね」(アサノ)

そういう発想ができるバンドこそがコロナ時代をサバイブしていく。「Slowmotion」から自ら未来を掴みにいく4人の力強い意志を感じ取ってほしい。

取材:山口智男

Bye-Bye-Handの方程式



L→R 陽哉(Dr)、ryuto(Support Ba)、泰輝(Vo&Gu)、茅津(Gu)

バイバイバンドノボウティンキ:2015年5月に地元・大阪の中学の同級生で結成。さまざまなジャンルの音楽をロックに落とし込み、正直に「今」贈りたい音楽と新しいサウンドを追求する。20年3月には「No Big Deal Records Audition 2020」で優勝。同年5月にベースの肇が脱退するが、9月に「No Big Deal Records」からミニアルバム「Flowers」をリリース。
<http://byebyeband.com/>



Mini Album 9/9 Release
[Flowers]
No Big Deal Records
NBPC-0080
¥1,600(税抜)
*TOWER RECORDS一部店舗およびオンラインにて発売中

取材:千々と香苗

■ 浅井健一 & THE INTERCHANGE KILLS ■
「music UP's Q!」は取材の流れで答えてくれたのだが、買ってダメだったものが実はもうひとつあった。事務所にいる2台の箱詰めされたMacのPCを見た浅井健一が「そう言えば、買ってダメだったものはこのPCかな」と話し出したのが回答のきっかけに。理由は「PCの初期設定で面倒くさいじゃない? 完全に今のPCが壊れたわけじゃないから、買うのが早すぎたんだよね」とのこと。買って良かったものに対するまさかの回答に現場は盛り上がったことは言うまでもない。そして、読者プレゼントのサインをお願いすると、「せっかくだし、これで書こうか?」と最近買って良かったもの」で答えてくれた筆ペンで書いてくれた。筆遣さ、デザインの良さはもちろん、とても貴重な一枚となったので、奮ってご応募を!

■ 三澤紗千香 ■
「music UP's Q!」の「最近買って良かったもの」でルンパと答えてくれたのだが、もともと家電が動いているのを見るのが好きだそう。洗濯機や乾燥機が回っているところは何時でも見ていたら、子供の頃は「目に悪いよ」と言われながらも電子レンジが加熱している様子をずっと見ていたらしい。その話を聞くとなんか愛おしいルンパの姿を可愛く思うのも納得できる。そして、そんな愛おしいルンパのことを思って、床に物を置かなくなり、使った物はちゃんともの場所に戻すようにもなったとのこと。これも一種の「親バカ」って言うのだろうか? (笑)

■ yozuca* ■
「music UP's Q!」で「買って失敗したものならいっぱいある」と話していたyozuca*。実はその失敗談も話してくれていた。最初はリングライトをネットで注文したが、なかなか商品が到着せず、一月半後に届いたと思ったら、箱は濡れていて、そもそも注文していたものとは違っていたらしい。当然、クレームを入れたが、中国から直送の商品だったせいもあり、やり取りがうまくいかず、返品しなくていい代わりに、代金の何十パーセントしか戻ってこなかったという。結局、やり取りが面倒になって、それで承諾したそうだ。ちなみに「半濁音」のMVは、そのリングライトを駆使して撮影したとのことだった。

■ CooRie ■
インタビュー中、「Music Kitchen」のMVを自宅で撮ったということから照明器具の話になり、同じ事務所で仲が良いyozuca*の話へと発展。もちろん内容は彼女が買い物でよく失敗するということ。さんざん注意しておいたのに中国から直送の商品を買ったなど、そのエピソードは多く、采れるのを乗り越えて面白い存在とのこと。そう言いつつも「yozuは何だかんだ言っても最終的にはうまくいく」と語っていた、その言葉にはyozuca*への愛(母性愛?)が感じられた。

■ INORAN ■
アルバム「Libertine Dreams」のインタビューとは別に、自分の音楽人生において大きな影響を与えた存在を挙げてもらう企画「Key Person」の取材も実施。今のINORANを形成した「ある人物」について語る中で自分のモットーについて話し、しっかりと締め括ってくれたが、最後の最後に「これで総理大臣になりますか?」とオチまでつけて現場を和ませてくれた。「Key Person」のインタビューを担当した編集部の方々、ライブやテレビでINORANを観てきたからこそ当日はなかなか緊張して、そのことを伝えると「でも、俺は俺者だけだね」と冗談を飛ばして気さくに対応してくれた。そんな「Key Person」の記事は来月号のmusic UP'sに掲載予定!

■ cali#gari ■
取材前、最新号のmusic UP'sを読んでいた村井研次郎が目次にある奥付を見て、「この人、ギタリストですよ」と指差したのは統括編集長の鳥丸哲也。そこで鳥丸が昔にやっていたバンドの話で盛り上がり、その流れでライター欄を見て「土屋京輔さんはお元気ですか?」帆刈智之さんって、すごく深いところまで聴いてくれている方ですよ」といろいろなライターさんのことや、さらにPop'n'Roll編集長の鈴木健也の名前を見つけて「昔、この近くにあるカレー屋に健也さんとよく行きましてよ。よろしく言うておいてください」とまで。実はキャリアのあるバンドを取材すると、奥付からいろいろな話に広がることは珍しくなかったりする。それだけ、みんな業界に長くいるってことですね。

■ ラブリーサマーちゃん ■
ラブリーサマーちゃんの取材はリモートで行なわれたこともあり、「music UP's Q!」では現在制作中のギターを実際に見せてくれた。まだポディーのみだったが、オレンジにペイントされていて、カッコ可愛い仕上がりになることだろう。また、ライターの帆刈智之さんのPCの調子が急に悪くなり、マイクが入らないというトラブルに見舞われたものの、その間は画面越しの作業部屋について教えてもらうという雑談タイムに。結局、インタビューは編集部の石田が帆刈さんに電話し、その声を石田のPCから流すということで対処されたのだが、それも含めリモートならではの取材だったと言えるだろう。

Vol.192は10月20日発行予定。お楽しみに!!

GRANRODEOのインタビューを楽しむ拝見させていただきました。新シングル曲「情熱は覚えている」は歌い回しが不思議な感じだと思ってたので、記事を読んで意図して別の発音をして歌っていたのだと知れて、より一層発売日が楽しみになりました! (20代女性:ほか)

GRANRODEOさんのインタビューはおふたりが持ち続けている情熱であり、15周年のベテランなのにまだまだスイングであることに驚きました。トビユートアルバムに超特急が参加していることで、「超特急のファンの子がライブに来てくれるようになるかも!」という質問も面白かったです。(20代女性:ほか)

OKAMOTO'Sがいつもいつも私の心の支えです。出会って恋に落ちた時からずっと大好きで、一生大好きです。死ぬまで変わらない気持ちをくれてありがとうございます。(10代女性:ウー魂)

CD発売前の高揚感のまま読んだ内田雄馬さんのインタビューは、今までの声優活動の軸となっている「想像する」という部分を再認識することができました。ストイックな雄馬さんだからその曲に落とし込む感じが、私たちにストレートに届くんだなあと思いました。また、「You Are Special」の試聴動画が初公開されて、「なぜ炎き火?」と思っていたタイミングで今回のインタビューが読めたので、とてもすっきりしました(笑)。全曲フルでじっくり聴ける来週がより待ち遠しくなりました!(20代女性:運崎)

超特急を応援してきて、バックヴォーカルのタカシくんが頑張ってる姿をずっと見てきました。今回のソロを特集してくださって本当にありがとうございます! 本名で挑むんだからその「甘えたくない!」というタカシくんの強い決意が伝わってきて、読んでいて涙が止まりませんでした。いつもみんなのために踏ん張るタカシくんが、もっと大きな世界に羽ばたけますように祈っています!(30代女性:くみらへ)

HoneyWorksは聴いたことがある曲があって気になってはいたものの、アーティストさんについてはよく知らなかったし、女の子の設定などコンセプトとかも知れて良かったです!(20代女性:つん)

Gorilla Attackさんの記事、初めの「ゴリラになりたいんですよ」で吹きました(笑)。面白い方々だなあと思いました。(10代女性:みずほ)

「Editor's Talk Session」は配信ライブを試行錯誤しながら、現場に近い配信を目指してくれていることを知れて、とても嬉しい気持ちになりました。私は大好きな超特急と松尾太陽くんには会えなくて寂しい日々を過ごしていますが、またライブに行けるようになるまで、配信してくれることに感謝しながら過ごそうと思います。(30代女性:色えんぴつ)

Gorilla Attackのインタビューは情報の少ない中、かなりびくびく箱感がありました! 「ゴリラに憧れて」とか深い意味ばかり求めてましたが、おふたりが楽しみながら音楽をしていて、探り探りしながら自分の道を進んでいるのが分かりました。後らにかかわるトラックメーカーなどの話もこちらがいつも興味を示すようなインタビュー返しで、未知の領域に何度足を踏み入れたことか(笑)。「music UP's Q!」に記載されている「思い出深い一曲」も今の音楽とのギャップやつながりが分かり、嬉しいポイントでした。(30代女性:new)

畠中 祐さんを目的に読もうと思っていたのですが、自分が住んでいる地域では配布されていなかったため、電車に乗ってmusic UP'sをゲットしました。わざわざ行って良かったと、内容を見て思っています。畠中 祐さんが森山直太朗さんの「愛し君へ」を「思い出深い一曲」にされていたので、世代ではないですが聴いてみました。なぜか涙があふれてきて、私も素敵な思い出ができました。また、内田雄馬さんの記事もMV撮影の裏話、シングルに込めた思いなどが知れてとても興味深かったです。内田雄馬さんの「Image」は購入予定ではなかったのですが、この記事で興味を持って購入させていただきました。ありがとうございます。(10代女性:へっこほん)

つじあやのさんがゆるキャラと対談!? えっ、猫なの? むぎ?? ...と読んで読んでるうちに、むぎ(猫)がすごく気になって、すぐにYouTubeをチェックしました。今では「むぎちゃん、可愛い♡」と思うくらいファンだし、むぎちゃんの曲に日々癒されています!(30代女性:sara)

尾崎由香×コレサワ対談は、由香ちゃんがコレちゃんのファンであり、たくさん尊敬していることがあって、本当に大好きなんだなと思いました。私もコレサワファンの一員として尊敬する方なのでとても嬉しかったです!(20代女性:みゆりん)

毎月楽しみになっていた「Power To The Music」のページがなかった... (40代男性:オマリ)

10年振りくらいにフリーペーパーを手に入れましたが、学生の時にフリーペーパーを漁っていたことを思い出しました。名前を知らなかったアーティストでもその方の内面や音楽への思いを知ることができ、新しい世界に触れるきっかけとなっていました。「思い出深い一曲」のコーナーでも、知ってる曲を出されていたら親近感が湧きました。(20代女性:ぼるんへ)

新曲を聴く時に、ただ曲だけを聴くと、music UP'sさんのようなインタビュー記事を載せてくれる媒体があって、それも併せて読むのでは感じ方が変わってくるし、より深い解釈ができるのでありがたいです!(20代女性:さかな)

好きなアーティストの記事しか読んでないのですが、気づいたら読み終わるくらい全部面白かったです。(20代男性:大久保悠樹)

music UP's 読者プレゼントコーナー



- 1. 浅井健一 & THE INTERCHANGE KILLS
2. INORAN
3. cali#gari
4. SLOTHREAT
5. ラブリーサマーちゃん
6. ヒゲドライバー
7. 鈴木このみ
8. 三澤紗千香
9. yozuca*
10. CooRie
11. SIZUKU
12. CHiCO with HoneyWorks
13. nano.RIPE
14. 西片梨帆
15. ほのかりん
16. 森久保祥太郎
17. THE PINBALLS
18. GLIM SPANKY
19. T.MORIYAMMER

Vol.191の締切は10月19日。当選者の発表は発送をもって替えさせていただきます。

読者プレゼントの応募やコメントはTwitter & 読者プレゼント専用フォームから

★ Twitterからの応募

- 1. music UP'sのTwitterアカウント (@music_ups) をフォロー。
2. 希望のアーティストの直筆サインプレゼントについてのツイートをリツイート。

※いただいたコメントは「Listener's Voice」内でご紹介させていただく可能性がございます。
※当選者にはDMにてご連絡させていただきます。

music UP's Twitterアカウント
https://twitter.com/music_ups



★ 読者プレゼント専用フォームからの応募

music UP's 読者プレゼント記事よりご応募ください。コメントもお待ちしております。

※いただいたコメントは「Listener's Voice」内でご紹介させていただく可能性がございます。
※当選者にはメールにてご連絡させていただきますので、予め「@music_ups.jp」のドメイン解除をお願いいたします。

music UP's 読者プレゼント記事
https://musicups.page.link/2009_present



EDITOR'S TALK SESSION 10



今月のテーマ：コロナ禍を背景にしたライヴハウスの発展

音楽に関するさまざまなテーマを掲げて、編集部員がトークセッションを繰り広げる本企画。今回は第五回目にも参加してもらった CLUB Que / Zher the ZOO 店長の二位徳裕氏、それでも世界が続くならの篠塚将行(Vo&Gu)、そして9月からオンラインファンクラブを立ち上げた神戸のライヴハウス・ART HOUSE 店長の西本昇平氏をゲストに迎え、先が見えないコロナ禍でのリアルな現状を語ってもらった。

座談会参加者



■二位徳裕

1988年にインクスティック芝浦へ入店し、当時最高レベルのロックシーンを経験させてもらったあと、下北沢屋根裏で店長を担当。94年よりCLUB Queを運営、05年にZher the ZOOを開店。



■西本昇平

1996年からART HOUSEのブックイング担当として勤め、2006年に前任のオーナーより引き継ぎ独立。お酒がガソリンの超楽観主義者。



■篠塚将行

パンクバンド、それでも世界が続くならのヴォーカリスト。メジャーデビュー以降もライブにこだわる現場主義。コロナ禍で離職した元ライヴハウス店員。著書「君の嫌いな世界」を出版。



■石田博嗣

大阪での音楽雑誌等の編集者を経て、music UP's & OKMusicに関わるように。編集長だったり、ライターだったり、営業だったり、猫好きだったり…いろいろ。



■千々和 香苗

学生の頃からライヴハウスで自主企画を行ったり、実費でフリーマガジンを制作するなど手探りに活動し、現在はmusic UP's & OKMusicにて奮闘中。マイブームは韓国ドラマ。



■岩田知大

音楽雑誌の編集、アンソニーイベントの制作、アイドルの運営補佐、転職サイトの制作を経て、music UP's & OKMusicの編集者へ。元バンドマンでアニメ好きの大阪人。

バンドの元気のなさに未来が感じられなくなる

千々和：もともとは編集部のスタッフで音楽シーンについて話す企画だった「Editor's Talk Session」ですが、コロナの影響が音楽業界にまで及んだ4月からゲストを回いて実施するようになって今回で第六回目になります。二位さんと篠塚さんはその第一回目の時にも参加していただいたのですが、前回から約半年が経とうとしている今、状況はどのように変わりましたか？

篠塚：僕が一番状況が変わったかもしれないですね。4月に座談会に参加した時は吉祥寺 Planet K で働いていたんですけど、クビになりました。

西本：えー！

二位：実は今、うちを手伝ってもらってるんです。

千々和：いつ頃から状況が変わったんですか？

篠塚：コロナで売り上げが立たなくなっ、給料が出せないってことになり…店長たちもいろいろ気にしてくれたんですけどね。申し訳ないけどもう雇えないと。で

も、だからと言って僕が諦めてしまうと、僕が今まで担当してきたバンドたちが苦しいままなので。これは僕の考えですが、まず苦しんでいるバンドの状況をどうにかしなきゃって思いながらも、どうにもならないのが今です(苦笑)。

石田：それがリアルな現実ですよ。ライヴハウスだけじゃなくて、飲食店とかでも同じ状況だろうし。

千々和：前はライヴハウスが通常営業できないという状況に直面しての気持ちを話してもらっていて、行動に移す直前のタイミングだったと思うんですね。二位さんはCLUB Que / Zher the ZOOでの新しい取り組みとしてYouTubeチャンネル「QueTube」で定期的に動画を配信していて、九州のロックシーンにスポットを当てたコアな企画や、映画「BECK」のトークライブなど、さまざまな企画をしているのもライヴハウスの色だなと感じました。

二位：YouTubeを始めるにあたって、音楽だけに特化して考えるとすごく狭まってしまうと思って。前回の座談会に参加した時は、違う畑のYouTubeチャンネルを覗いた時だったんですよ。そしたら

音楽以外のコンテンツにすごく面白いものとか、エネルギーなものがあって。逆に音楽関係はMVを流したり、全盛期の良かったものを踏襲しているだけな感じがしましたね。これじゃいけないと。音楽が好きなのは今後も音楽を聴き続けるだろうけど、今から何かに興味を持つ10代の子とかは、このままだと音楽離れすると思ったんですよ。だからって、僕らがやることが今の10代に向けているとはまったく思わないんですけど、それでも他ジャンルの人も興味を持ってもらえることとか、音楽をやっている人間でも視野を広げられる要素があったらいいなって。

千々和：ART HOUSEでは9月から定額制のオンラインファンクラブを始めましたが、それはどのくらい前から動き出していたんですか？

西本：もともと3月くらいのタイミングで売り上げがほぼない状態になってしまった時に、若手アーティストのプロデュース業などとしている昔ながらのミュージシャンの友達から、ライブ配信の他にも音楽番組っぽいことをやったりとか、音源を限定配信できたりとか、箱自体をオンライン

上に作ってしまうアイデアをもらって、それを構築したんですよ。企画書を作りつつホームページの制作者に相談しながら、ようやくリリースできたのが9月なので半年くらいかかってますね。言うてもローカルなライヴハウスで、地元バンドが中心って感じの箱でもあるから、規模的に上げづらい件数の反響があるわけじゃないんですけど、出演者もお客さんもザワザワとはしてくれていると感じています。

配信ライブは相当工夫をしないとお客さんが増えることはない

岩田：バンドマンのみさんの配信ライブに対するモチベーションは上がりきっていないですか？

篠塚：バンドマン側として言うなら、上がりきらない人がかなりいるっていう印象ですね。もともとオンラインに強い活動をやってた人とか、ライブよりもYouTubeでの活動を中心にしていこうと思っていたバンドとか、あまり変わらずにオンライン上で活動している人もいますが、それって配信に特別な思い入れがあるとかじゃなく「当たり前のこととしてやっている」って感じだと思うんですよ。だからこそ、コロナ禍で浮上してきた配信ライブって文化はライブバンドとか、生演奏にこだわっている人たちの第二の選択肢だったり、救済措置であるべきじゃないかなって。でも、その生演奏にこだわってきた人たちが、たった半年で自分が信じてきたものを一転して無観客での配信ライブのモチベーションを上げるっていうのは…やっぱり、なかなか難しいんじゃないかなと。

二位：すごくパーソナルな考え方なんですけど、ライブはお客さんあってのものだと思うので、少ない人数だけど20人でも30人でもお客さんが入ってくれたら、バンドもライブの感覚が変わるんじゃないですか。でも、そうするとお金の面でバンドもお店も割りに合わないから、その分を配信もしてちょうどいいくらいにしたい。そうすれば今まで通りに経営が成り立つんですよ。もちろん方針をお客さんを入れちゃダメってなったら、それは無観客で対応する、逆にキャパ以上に配信チケットが売れることもあるから、それはそれで意味があるんじゃないかと思うんですけど。それでもひと月の統計で見たらまだまだ全然赤字なので、この状態はいつまでも続かないって冷々しながらやっ

てるんですけどね。
千々和：最近はお客さんを入れている配信ライブを観ることもあるんですけど、やっぱりパフォーマンスが全然違いますね。
二位：少しでもいいと思ったら嬉しいですよ。昨年の段階では、お客さん30人の日とかあったとしたら「おいおい！ どうした！」って感じだったじゃないですか(笑)。こまも変わるかなって。まあ、ライブハウスはライブハウスで、どうやったらいい状況が作れるかっていうのを考えて、それぞれスキルも磨きつつやっていかないと、前回も言ったんですけど、配信すればするほどライブハウスの体たらくを垂れ流しにする可能性があると思ってすごく緊張しながらやっていますが、自分のところでやっていたアコースティックライブが50人マックスでソールドアウトで盛り上がり、会場で観てたらずごくいい感じなのに、配信で観ると半分も伝わってないって思ったんですよ。それは完全にライブハウスの責任だと思うんですよ。演者は100パーセントでパフォーマンスをやっている、目の前のお客さんを楽しませているんだけど、アコースティックっていうシチュエーションをうまく具合に配信に乗せられない。これがテレビ番組だったらセットとかそれ用の照明を作ったりいい感じで観れるし、視聴者もそれに慣れているわけだから、ライブハウスから配信している映像はものすごくシンプルという以前に、急げているように感じるんじゃないかと思うんだよね。だから、相当工夫をしないとお客さんが増えることはないなって。

「配信でここまでできるんだ！」って意地を見せたい

千々和：篠塚さんは先日、高音質の音声のみのライブ配信をされていたよね。篠塚：そうですね。映像はなしにして、音声だけで弾き語りの配信ライブを定期的に行ってます。配信ライブ自体はコロナ禍のかなり初期から率先して始めたんですけど、僕は実際に好きな人に会う約束があることで「こままでは生きてみようかな」って思えたりするので、自粛期間が落ち着いた頃に一旦やめました。やっぱり人数制限や対策をしっかりとって、実際に会ってライブをやろうと。そうメンバーとも話し合っていたタイミングで、どんどん感染者の数が増えてきたので、配信のほうが安心できる人がいるなら安心できるまでは定期的にやり

続けようと思って。でも、「音楽の中身や本質は音楽そのもの」だと僕は思うから、配信技術にはあまり力を入れる気になれない。もともと映るのも得意じゃないし、写真も苦手だったのもありますけどね。「もう、音だけで伝わらないなら俺の配信なんか死んでいい」って感覚でやってます。

二位：でも、俺はそれじゃダメだから「命懸けの配信をしようぜ！」って言うてますよ。

篠塚：そうそう。今ちょうど二位さんに誘われてるんです。「ライブハウスからの配信でここまでできるんだ！」っていう意地を見せたいから、「本気の配信ライブをQueと一緒にやらないか？」って。

二位：俺がライブハウスを始めた頃の感覚で言うと、そもそもPAも照明も今の10分の1もなかったんですよ。照明も会場の壁に付いている電気のスイッチを点けたり消したりしてやってくるライブハウスもありましたから。その時に「大きい会場の素敵な照明はどうやったらライブハウスで再現できるんだ？」って思ったことで、今の照明設備に辿り着いていると思うんです。それで考えれば、今の配信ライブがまさにその感覚に近いんじゃないかと。この状況の中で取り組むことでだんだん良くなっていくと思うんですよ。

石田：コロナ禍の中、どんな意識でいるかが大事だってことですよ。誰もが不安なわけだけど、流されるままだと何も変わらない。現状を把握して、先を見据えて行動しないと。



この座談会の全文を公開中！▶
<https://okmusic.jp/>



■下北沢 CLUB Que

〒115-0031
東京都世田谷区北沢 2-5-6
石井ビル 2F
<http://ukproject.com/que>

■ART HOUSE

〒650-0004
兵庫県神戸市中央区中山手通
2丁目 1-27 伊豆ビル 3F
<http://www.arthouse.ne.jp/>



■それでも世界が続くならオフィシャルHP

<http://soredemosekaigatsudokunara.com>

全日本歌謡情報センター編集長 仲村 瞳のスターの証明

歌謡界のスーパースターと称される人物を取り上げ、さまざまな資料から、その人物の“すごさ”を浮き彫りにする証言集。今回は世界に誇る日本のスーパースター、矢沢永吉をフィーチャー。現在、71歳にして衰え知らずの矢沢の秘密を探る!

「優しく、男らしく、器が大きく、人生の面白さを知っていて…そういうの全部持っている人。そういう人が歌うと、歌が変わるんですよ。歌詞って、自分の中身が出るんです。書いた歌詞には自分のにおいがある。だから変に歌われると嫌な感じがするんだけど、矢沢さんが一度体に入れて歌として出すと、彼の人生が刻み込まれて違うものになってるんです。自分に矢沢さんがプラグインされちゃうというか。これは作詞家の醍醐味だね」



作詞家・売野雅勇
「東スポWeb」
(インタビュー/【この人の哲学】
売野雅勇氏 矢沢さんはちよとした天使
/ 2019年10月15日公開)より

「矢沢永吉のパラードっていうのはね、ちよつと、超一流の感じあるよね。それは認める」

ミュージシャン・吉田拓郎

ニッポン放送「吉田拓郎のオールナイトニッポンGOLD」
(リスナーが選ぶ永ちゃんの一曲と吉田拓郎さんが選ぶ永ちゃんのこの一曲 / 2020年6月12日放送)より

「永ちゃんは、音楽にすごい詳しくったね。僕の知らないコードとかも知ってた。そして、本当に耳がいい。全部の音をいつも聴いてる。だから曲のアレンジがだいたい決まってきた、冒険というか、ちょっと違うことをやると、「恭司、遊んだ?」とかかって永ちゃんはすぐ言うしね」

ギタリスト・山本恭司

「別冊カドカワ Premium」(総力特集 矢沢永吉 / 角川マガジンス / 2012年8月1日発行)より

第16回 / 矢沢永吉



ヤザワエイキチ: 1949年9月14日生まれ、広島県広島市出身。日本を代表するロックヴォーカリスト。矢沢永吉が率いたロックバンド・キャロル解散後、1975年に「アイ・ラブ・ユー」でソロデビュー。現在、楽曲数約500曲、ライブ総数約1900本、総動員数約700万人超えを記録。

「小学生の頃に初めて聞いたんですが、要するにその頃からずっとトップを続けていってるといその力というか、それがますますすごいと思うのと、やっぱり単純にその、作る曲がすごいいいという事で、何っていうんですかねえ、サウンド作りとか歌の声だとかそういうのももちろんそうですけど、何よりも曲がすごいいい」



ミュージシャン・奥田民生
「ほぼ日刊イトイ新聞」
(ロック・ジャズ・パノニアの作り方。
/ #10 奥田民生。
/ 2001年8月20日公開)より

「『最高!』のひとことですよ。僕の持論で『世の中には永ちゃんを大好きな人と永ちゃんをよく知らない人しかいない』。そして、会えば確実に好きになりますね(笑)。表情とか動きだけで最高なんですよ」



プロインタビュアー・吉田 豪
「Smart FLASH」
(吉田豪を一発でノックアウトした
【矢沢永吉】のホスピタリティ
/ 2017年9月9日公開)より

「一度でも、永ちゃんに会ったことがある人なら、その時の思い出を、誰もがキラキラとした表情で話す。身振り、手振りを加えて、自分の目の前に、矢沢がいた特別な瞬間をうれしそうに、そして、誇らしそうに」

作家 リリー・フランキー

「別冊カドカワ Premium」
(総力特集 矢沢永吉 / 角川マガジンス / 2012年8月1日発行)より

「日本で初めて“ロッカー”としてお金を稼いだ人」

ミュージシャン・横山 健



「Real Sound」
(矢沢永吉、音楽との向き合い方について
「開ジャム」で語ったこと
「Mステ」初出演にも期待
/ 2019年8月30日公開)より

「素でいることもね、あるいは、かっこ悪いことがあったとしても、矢沢永吉はそのかっこ悪さも含めて、かっこよさにしちゃうってどうか」



作家・糸井重里
「ほぼ日刊イトイ新聞」
(ほぼ日刊イトイ新聞創刊21周年記念企画
/ 矢沢永吉・糸井重里 / ステイル 現役。
/ 2019年6月13日公開)より

「父は365日24時間、ロックンローラーだったと思います。家でダラダラしていることはほとんどありませんでしたし、どんなシーンで父を見ても“矢沢永吉だ!”と思われような立ち居振る舞いでした」



ミュージシャン・矢沢洋子
「新R25」(ライフスタイル
/ 父は24時間365日、矢沢永吉でした。
/ 69歳になってもライブをする父の背中を見て
/ 「どんなときでも低姿勢でいなさい」
矢沢洋子が今でも覚えている、
父・矢沢永吉からの教え
/ 2019年3月11日公開)より

全日本歌謡情報センター

この記事と他の証言を掲載中▶



ベストアルバム「STANDARD ~ THE BALLAD BEST ~」

2020年10月21日発売



【初回限定盤 A】(3CD+Blu-ray)
GRRC-73 ~ 6
¥5,830 (税込)
【初回限定盤 A】(3CD+DVD)
GRRC-81 ~ 4
¥5,280 (税込)



【初回限定盤 B】(3CD+Blu-ray)
GRRC-77 ~ 80
¥5,830 (税込)
【初回限定盤 B】(3CD+DVD)
GRRC-85 ~ 8
¥5,280 (税込)



【通常盤】(3CD)
GRRC-70 ~ 2
¥3,630 (税込)

新レーベル MURO RECORDS 開設!

所属アーティスト第一弾

3RD FULL ALBUM 「こころの℃」

1. ホワイトタイガーオベーション 2. エヴァーグリーン 3. ハミングバード 4. メイメツ 5. B.N.S. 6. リンネループサテイスファクシオン 7. ルテシーア 8. 2人のピート 9. あいのこども 10. 瞬 (Album ver.)

MURO-1001 / ¥2,500 (tax in)



NOW ON SALE!!

詳しくはircle official HP <http://ircle.jp>

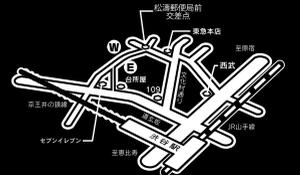


公演に関するお問い合わせは直接各店舗までお願いします。

TSUTAYA O-EAST TEL:03-5458-4681 TSUTAYA O-West TEL:03-5784-7088

TSUTAYA O-nest TEL:03-3462-4420 TSUTAYA O-Crest TEL:03-3770-1095

Yokohama O-SITE TEL:045-328-3090 ※横浜駅相鉄線みなみ口より徒歩7分



CHiCO のチャレンジとメッセージが満載のアルバムが完成！

HoneyWorks 4 カ月連続リリースの第二弾は CHiCO with HoneyWorks の 3rd アルバム「瞬く世界に i を揺らせ」。「ヒカリ証明論」以降のシングル表題曲をはじめ、リードトラック「幸せ。」、初の全英語詞の「Alive」、メッセージが詰まった弾き語り曲「私を殺さないで」などの新曲 5 曲と「ワタシノテンシ」や「ヒロイン育成計画」といった HoneyWorks のカバーなど全 14 曲を収録。家族愛や姉妹愛、自己愛などさまざまな愛が込められた本作について CHiCO (Vo) を直撃した。

— アルバムは「決戦スピリット」で始まり、「告白実行委員会」シリーズでも人気のキャラクター=成海聖奈・萌奈を中心にストーリーが繋がっていたり、意外性のある新曲もあって盛りだくさんで、すごく内容の濃い一枚になりましたね。「曲順を考えてくださったのは、いつもジャケットのイラストを描いてくださっている HoneyWorks のヤマコさんで、“やっぱり 1 曲目は「決戦スピリット」やろ！盛り上がる曲で始まったほうがいいでしょ！”という感じで(笑)。そこから畳みかけて、バラードもあってみたいな。最後の「乙女どもよ。」で、盛り上がった気持ちも、悲しい気持ちも、新曲の「私を殺さない

いで”で“ウウ~”ってなった気持ちも、全部回収していくような仕上がりがあります」
— リード曲の「幸せ。」は成海家のお父さんの気持ちを歌っているんですね。「お父さんとお母さんって学生の頃まではいて当たり前で、そのいつもの風景がなくなった時に、ありがたさや自分の弱さを感じるものですね。そんな後悔があってこそ気づけた気持ちが歌詞に表れていて、すごく心が温まります。成海家のお父さんはヤンチャをしていた過去があるんですが、shito さんが気持ちのたくさんこもった素敵な曲を作ってくれました。初回限定盤には成海家のストーリーを書いたライトノベルも付くので、ぜひ読

みながら楽しんでほしいです」
— レコーディングはどうでしたか？「ディレクションでは“声を張るのではなく、飾らずシンプルに歌ってほしい”と言われました。細かく言うと、あまり口を大きく開けずにボソボソ歌うみたいな。親のありがたみとか、自分が今後家庭を築くかもしれないことも想像しながら、歌詞に寄り添って歌うことができました。この曲で改めて自分のことを見つめ直してもらって、いろんなことに気づいてもらえた方がいいなと思います」
— HoneyWorks のアルバム「好きすぎてやばい。~告白実行委員会キャラクターソング集~」(2020 年 1 月発表)に収録されている、成海家の長女・聖奈から妹・萌奈への気持ちを歌った「ワタシノテンシ」のカバーも収録されていますね。「成海姉妹の絆と姉妹愛にすごく感動します。「ワタシノテンシ」は原曲を声優の雨宮天さんが歌っているのですが、曲中には台詞もあって。どの速さでどんなしゃべり方をすればいいか、雨宮さんのパフォーマンスを聴いて練習したんですけど、大根演技になっていないか心配です(笑)」
— 「ヒロイン育成計画」もカバーしていますが、CHiCO with HoneyWorks (以下、チコハニ)らしさみたいなものはどんなふうを考えましたか？「せっかく自分のアルバムに収録するのだから、モノマネではなく自分らしいニュアンスを出せるようにと意識しました。「ワタシノテンシ」の原曲はやさしく穏やかに歌っていますが、サビを少しニヒルな感じで歌ってみたり、感情をオーバーに入れているところがあって、そこがチコハニらしいです。「ヒロイン育成計画」は原曲を声優の水瀬いのりさんが歌っていて、アイドルソングのような可愛さがあるので、チコハニのバージョンはアーティストっぽく、歌い回しに少しニュアンスを入れながら歌ったから、可愛いくなりすぎない、チコハニらしい「ヒロイン育成計画」になったと思います」

— CHiCO さんが Gom さんと詞を共にしながら楽しんでほしいです」
— レコーディングはどうでしたか？「ディレクションでは“声を張るのではなく、飾らずシンプルに歌ってほしい”と言われました。細かく言うと、あまり口を大きく開けずにボソボソ歌うみたいな。親のありがたみとか、自分が今後家庭を築くかもしれないことも想像しながら、歌詞に寄り添って歌うことができました。この曲で改めて自分のことを見つめ直してもらって、いろんなことに気づいてもらえた方がいいなと思います」
— HoneyWorks のアルバム「好きすぎてやばい。~告白実行委員会キャラクターソング集~」(2020 年 1 月発表)に収録されている、成海家の長女・聖奈から妹・萌奈への気持ちを歌った「ワタシノテンシ」のカバーも収録されていますね。「成海姉妹の絆と姉妹愛にすごく感動します。「ワタシノテンシ」は原曲を声優の雨宮天さんが歌っているのですが、曲中には台詞もあって。どの速さでどんなしゃべり方をすればいいか、雨宮さんのパフォーマンスを聴いて練習したんですけど、大根演技になっていないか心配です(笑)」

— 「ヒロイン育成計画」もカバーしていますが、CHiCO with HoneyWorks (以下、チコハニ)らしさみたいなものはどんなふうを考えましたか？

「せっかく自分のアルバムに収録するのだから、モノマネではなく自分らしいニュアンスを出せるようにと意識しました。「ワタシノテンシ」の原曲はやさしく穏やかに歌っていますが、サビを少しニヒルな感じで歌ってみたり、感情をオーバーに入れているところがあって、そこがチコハニらしいです。「ヒロイン育成計画」は原曲を声優の水瀬いのりさんが歌っていて、アイドルソングのような可愛さがあるので、チコハニのバージョンはアーティストっぽく、歌い回しに少しニュアンスを入れながら歌ったから、可愛いくなりすぎない、チコハニらしい「ヒロイン育成計画」になったと思います」

— CHiCO さんが Gom さんと詞を共

作した新曲「ぐる恋」はゲーム愛を題材にした歌詞とアップテンポなサウンドが秀逸です。

「ギターのリフのフレーズがいつものチコハニっぽくないので、新鮮さを感じていただけたかと思いますね」

— HoneyWorks 公式リズムゲーム「HoneyWorks Premium Live」(以下、「ハニプレ」)も事前登録受付中ですが、それをイメージして作ったのですか？「そういうわけではなくて、最初は Gom さんから恋愛ソングというテーマをいただけて何パターンも書いてみただけで、どうしても最後まで書き切れなくて、テーマをリセットして、“私が一番書けるのは何だろう？”と考えて辿り着いたテーマがソシャゲだったんです。推しキャラに対する愛、ガチャで SSR が出るまでのハラハラ感などを想像したら、スラスラとアイデアが湧いてきたので、それを Gom さんに提案させてもらい、あとはキャッチボールでアドバイスしていただきながら無事に完成させることができました」

— 本作の中で特に意外性があつたのは「Alive」。EDM のサウンドに全編英語の歌詞だったので、“これがチコハニ？”と思います。

「チコハニ初の英語の曲で、私としても大挑戦でした。ただ、あまりに意外すぎて、私が歌っていることに気づかなかったバンドメンバーもいたほどです(笑)」

— 歌詞はどんな内容なのですか？

「人生の終わりが分かっている男の子の歌で、1 番は落ち込んで希望を失っている、2 番では生きている間にやりたいことをやろうと前向きになっていきます。“生と死”をテーマにした、チコハニの中でも重い内容ですね」

— マリー・アントワネットをモチーフにした「Marie」は、いつになく激しくドラマチックですね。

「これも以前に、私から提案していたものです。「プライド革命」(2015 年 8 月発表のシングル)のカップリングに「ヒストリア」という曲があって、ダークでファンタジーな世界観がチコハニの中では異質

で、ライブでは入れどころが難しかったんですよ。なので、同じ路線の曲がもう一曲あれば、セットリストを組みやすくなるんじゃないかと思い、Gom さんにリクエストしていたんです。歌うのがすごく難しいんですけど、サビで高音にバーンと抜けるところが、すごく気持ちいいですよ。ギターもカッコ良く、Oji がライブでセンターに立って、キューーンと弾きまくる姿が目に見えますね」

— そして、「私を殺さないで」。まずタイトルにドキッとしました。

「すごくメッセージ性がある曲です。「私を殺してたのは私でした」というフレーズがあって、ここは歌っていてすごく苦しくなりそうです。レコーディングでこのフレーズを歌った時、泣きそうになりました」

— 歌詞に込められたメッセージは 10 代の学生にすごく響きそうだと思います。

「高校生くらいまでの学生にとっては、学校であった出来事が全てで、その小さな世界で自分の存在を否定してしまうことがあると思うんです。作詞をした shito さんが、大人になってから後悔してほしくないというメッセージを込めて作ってくれました。きつと聴いてくれる学生の方の中には、誰にも相談できず自分の殻に閉じこもってしまっている人もいると思うので、そんな人に“そんなことないんだよ、大丈夫だよ”って、この曲を通して言っておきたいです」

— ネガティブな言葉と前向きな言葉が交互に繰り返されている感じですが、これは何をイメージして？

「“ ”で括られているところは子供の自分、子供と大人の自分がかけ合っているイメージです。子供の自分は声色を変えて幼く歌って、大人の自分は背中をやさしく支えてあげるといふか、見守る目線で歌いました」

— アコースティックギターと歌だけのシンプルな曲だけに、歌がすごく印象的に響きますね。

「音質やニュアンスにもこだわって、マイクもいつもとは違うものを使っています。shito さんから「メリハリをつけてほしい」とディレクションがあったので、A メロ

と B メロは擦れるか擦れないかのギリギリで囁くように、サビは芯のある声で強く歌っています」

— あと、初回限定盤の Disc2 には昨年のツアー「5th Anniversary Hall Tour 2019 LIVE 5's ON !!」の名古屋フォレストホールでのファイナル公演から初のライブ音源が収録されているのですが、「プライド革命」「サイダー」「世界は恋に落ちて」の 3 曲を選んだ理由というのは？

「「世界は恋に落ちて」はデビュー曲なので初ライブ音源には絶対入れたいと思っていました。「プライド革命」はベースの Hiroki 169 さんが“全員、声出せ！”と叫ぶのが定番で、収録した音源では「ファイナル、声出せ！」と言って、「サイダー」も曲中に私の“いっよ”とか“せーの”といった声が入っているので、ライブだからこそその空気を体験してほしいと思って選びました。ロック、ポップ、ミドルバラード、この 3 曲でチコハニのライブの魅力が体感できます。ライブに興味を持ってもらえたり、ライブに行った気分になってもらえたら嬉しいです」

取材：櫻林史章



このインタビューの全文を公開中！▶



瞬く世界に i を揺らせ



Album 9/16 Release
MusicRay'n
【初回生産限定盤】
(2CD+DVD)
SMCL 660 ~ 3
¥3,800 (税抜)
※ライトノベル小説
+豪華特典付



【通常盤】(CD)
SMCL 664
¥2,800 (税抜)
※初回仕様

music UP's Q!

今月のお題：「最近買って良かったもの」

■サーキュレーター

「今まで使っていた扇風機が壊れてしまったから、新しいものが欲しいとずっと思っていました。ちょっと小さくて可愛いのを偶然見つけて、夜とかエアコンをつけて寝ると風邪をひきやすいので、あまり使いたくなくて…一番の理想は窓を開けて、夜風と扇風機なんです。日中はエアコンを除湿にして、一日中つけてます！」



nano.RIPE

みんなの中に nano.RIPE が住んでいるって思っていることが宝物

メジャーデビュー 10 周年を記念したベストアルバム『月に棲む星のうた ~ nano.RIPE 10th Anniversary Best ~』は“KIMIKO MELODY.”と“JUN MELODY.”という作曲家別に選曲した 2 枚組で、各盤には声優の伊藤かな恵と愛美をイメージした新曲も収録。そんな本作に込めた想いをきみこ(Vo&Gu)とササキジュン(Gu)が語ってくれる。



L → R ササキジュン(Gu)、きみこ(Vo&Gu)

— 今回のベスト盤は昨年のツアー「せかいじゅのはな」のファイナル公演で 2 日間を作曲家別に分けて選曲した企画がもとになっていますが、アルバムとして制作してみたいか？
ササキ：僕が作る曲ときみこが作る曲は似ていると以前は思っていたんですけど、実際に分けて聴き比べてみるとまったく違っていましたね。きみこの曲は全体に明るくて、逆に自分の曲はどこか暗くて、陰と陽に完全に分かれた感じがあるなど。こうしてカラーの違いがはっきりと分かったことは、僕にとって自信になりました。
きみこ：ジュンはよく言うよね。あたしの曲なのに、「これは俺の曲じゃないの？」って(笑)。

ササキ：「あとの花火」とかメロディーがきれいな曲だと、勝手に自分の手柄にしくなっちゃって(笑)。
— それぞれのテイストは違っても nano.RIPE らしさは共通して持っているということですね。
きみこ：そうですね。それにジュンが作ったメロディーでも、自分が歌いやすいように少しずつ変えてしまっているものもあるんで、ジュンのメロディーがあたしのメロディーではないということではないし、どっちが作っても nano.RIPE だって思えます。
— 今作ではそれぞれ候補を 2 曲挙げてファンに Twitter で投票してもらおうという企画もやっていたんですね。
ササキ：僕は「タキオン」か「ローリエ」の

二択で悩んで、これはファンに委ねるしかないと思って。「タキオン」に決まったんですけど、きっとライブの印象で選んだ方が多いのかもしれないですね。ライブで盛り上がる曲なんですけど、ずっとやっていないから欲しているのになって。「ローリエ」は高校野球をイメージした曲だから、今の野球シーズンに聴くとグッときて、こっちはいいと思ったんですけどね…。
きみこ：発売の頃は高校野球終わってるし！ みんなに決めてもらって良かったです(笑)。
— きみこさんは「アイシー」と「うてな」ですかね。
きみこ：はい。「アイシー」は配信のみでしかリリースしていなかったし、「うてな」

はここ最近書いた曲の中でも気に入っていたので、どっちがいいかなって。最終的に「アイシー」に決まったんですけど、「アイシー」はメンバーだった(青山)友樹が亡くなったことがあって書いた曲なので、とても思い入れの深い曲なんです。聴いてくれているみんなも思っていた以上に、この曲に思い入れを持ってくれていることが分かって嬉しかったですね。
— 10 年一緒に歩んできた、ファンの想いも詰まったベストということですね。
きみこ：そうですね。曲を選ぶ時は、みんなの顔を思い浮かべながらでした。ほくら何を入れたかよりも、みんなは何を入れたか入れているのか…やっぱりみんなに喜んでほしいので、その一心で作りました。
— そんな今作には新曲も収録されているのですが、「JUN MELODY.”の「スピカ」はツアーファイナルの時にゲストの愛美さんが歌ったロックチューンのセルフカバーで。
きみこ：「スピカ」は本当に反響が大きかったですね。ほくらも手応えを感じた曲で、愛美ちゃんも喜んでくれて。ライブ後から「いすれリリースしたいね」と言っていたのが、今回のタイミングになりました。「KIMIKO MELODY.”に収録した新曲「イトシキヒビ」は、「スピカ」の収録が決まってから作りました。
ササキ：「スピカ」をライブで披露した時はワンコーラス半しかなかったんですけど、今回はフル尺で収録されています。曲としては愛美ちゃんが歌ってくれれば、愛美ちゃんの曲になるというイメージがあったので、nano.RIPE の曲を作るのと同じような感覚で作りました。
きみこ：「ブラリネ」がそうだったからということだね。
ササキ：そうそう。愛美ちゃんを意識しなくても愛美ちゃんの曲になるという確信があったから、いつも通りに作った感じが…
— そもそも愛美さんはゲーム「アイドルマスター ミリオンライブ！」に出てくる

ジュリアというキャラクターの声を演じていて、そのキャラクターソングの「ブラリネ」と「アイル」をジュンさんが作曲し、きみこさんが作詞をしたという流れがあるんですね。
きみこ：そうですね。6 年くらい前にジュリアの「流星群」という曲の歌詞を、あたしが担当させていただいたのが最初です。「スピカ」はジュリアと愛美ちゃんのふたりを曲の中に込めたいと思って、愛美ちゃんにいろいろ話を訊いて作詞をしました。愛美ちゃんにとってジュリアはどういう存在なのかとか、愛美ちゃんから聞いた話をギュッと詰めたので、本人もすごく喜んでくれました。
— また、もう一曲の「イトシキヒビ」は伊藤かな恵さんをイメージして作ったものとのことですか？
きみこ：はい。かな恵ちゃんとお会ったのは 10 年くらい前になるんですけど、TV アニメ「花咲くいろは」で主人公の松前緒花ちゃんを演じていたのがかな恵ちゃんなんです。「花咲くいろは」にはメジャーデビュー曲「ハトリシア」をはじめ、「ハナノイロ」や「面影ワープ」などたくさん曲を書いて、「nano.RIPE と言えば「花咲くいろは」だ」と思ってくださる人も多いですね。きっとかな恵ちゃんにとっても「花咲くいろは」は大事な存在だと思うんですよ。なので、愛美ちゃんにとってのジュリアを書いたように、かな恵ちゃんにとっての緒花ちゃんをイメージして書きました。
— 温かくてほっこりする曲で、伊藤さんとの約 10 年の交流の日々を思い出しているような印象もありました。
きみこ：“思い出している”という意味では、「ハナノイロ」をもう一度書こうみたいな気持ちでした。でも、あのままの青臭さではなく、もう少し大人になった 10 年後の「ハナノイロ」というか。登場人物たちも同じように 10 年の歳を重ねたイメージで書いたので、少しノスタルジックな雰囲気はあるかと思います。
ササキ：「ハナノイロ」の現代版を作った

というきみこの想いに応えて、なるべく若い頃の気持ちを忘れないようにというか…バンドサウンドで、難しいことをしないアレンジを意識しました。
— そして、ベスト盤のタイトルの「月に棲む星のうた」ですが、どういうイメージでつけたんですか？
きみこ：ます月の誕生についてお話をしないといけないんですけど…月というのは星が地球に衝突して砕けた時の破片が集まってできたもので、その時に飛び散った地球の破片も中に取り込まれているんですよ。つまり、月の中には地球の成分も含まれていて、地球のすぐ側に浮かんでいるという説があるんです。仮に nano.RIPE が地球だとしたら、nano.RIPE と出会った人にはきっと nano.RIPE の成分が取り込まれていて、月と地球のようにお互いを干渉し合える距離感に聞こえるんじゃないかと。
— みんなの中に nano.RIPE の歌があるって？
きみこ：そうですね。説明しないと絶対に伝わらないタイトルですけど(笑)。10 年やってきて、みんなの中に nano.RIPE が住んでいるって思っていることが宝物だと思っています。

取材：榊林史章



このインタビューの全文を公開中!!

『月に棲む星のうた ~ nano.RIPE 10th Anniversary Best ~』



Album 9/23 Release
Lantis
LACA-9778 ~ 9
¥3,600 (税別)
※2CD

music UP's a! 今月のお題：「最近買って良かったもの」

■きみこ…インテリア用品
「今まで気になっていたインテリア用品を全部買い替えたんですよ。家にいる時間が増えたので、ダイニングにある椅子のカバーとか猫にやられてたものを取り替えたり、そういう気になっているものを買って置かせて。そのおかげで生活が豊かになるんで、「もっと早くやっておけば良かった」って思いましたね。制作する時も気分良く始められるし、トイレのインテリアもきれいにしたので、トイレの時間も豊かになりました(笑)」

■ササキジュン…アンプ
「ずっと探してたんですよ。アレンジャーさんがレコーディングの時に持って来てくれたことがあって、すごく音が良かったんです。もう日本には入って来てないらしいんですけど、オークションに出ているのを見つけて入手しました。今はライブがないから家で鳴らしているけど、「やっぱ、これだ！」みたいな。ボリュームとトーンつまみしか付いてなくて、音も限られてくるんですけど、いい感じの音があるんで、誰か弾いてもいい音が鳴ると思います(笑)」

西片梨帆

連れ出してくれる人がいるだけで人って変わる

独特の視点で書かれた歌詞が共感を呼ぶシンガーソングライターの西片梨帆が、9月23日にリリースされるミニアルバム『彼女がいなければ孤独だった』でメジャーデビューする。どことなく神秘的なイメージに包まれている彼女に、最新作についてはもちろん、各楽曲の背景など、自身を作ってきたものたちについて語ってもらった。

— 今作には17歳から現在に至るまでの曲が収録されているそうですね。

「曲と私が一緒に生きている」という感覚は、たぶんファンの人にもあると思うんですよ。だから、昔の曲もいっぱい入れたかったんです。今回、昔の曲をもう一回レコーディングすることになってすごく恥ずかしかったんですが、そこは割り切って頑張りました(笑)」

— “彼女がいなければ孤独だった”というタイトルには、どんな想いが込められているのでしょうか？

「ワンマンライブの時にいただいた手紙の中に“西片さんがいなければ、私は本当に孤独でした”という言葉があったんです。その時は何かに使おうとはまったく思っていなかったんですけど、ずっとそれを覚えていて、他にもいろいろな手紙

をいただいて、“電車の中で聴いています”とか、“〇〇で聴いています”と書かれていたんですね。だから、その場所に自分が行った時には、“ここで聴いてくれたんだな”と想いを馳せたりして。で、今回ミニアルバムを出すとなった時、この言葉がバツと浮かんで、絶対に“彼女がいなければ孤独だった”にしようと思いました」

— 1曲目の「黒いエレキ」はライブハウスに出ている上の世代のバンドマンについて書かれていますよね。いろいろな感情が含まれていると感じたのですが。

「この曲はライブハウスで歌い始めた時からに書いたんですけど、バンドとかやっている人たちって、そこら辺にいたら見かけはめちゃくちゃダメそうな人じゃないですか(笑)。でも、ステージに立った時に、人が変わったように輝く瞬間を見て。特定の

モデルの人がいるわけではないんですけど、社会と自分を切り離して、ただ自分の半径30センチぐらいの世界を歌ってる人たちが、私にはとても美しく見えただんです。売れようがむしやらになっているわけでもなく、むしろそんなことはどうでも良いと思っているのが、ほんとにカッコ良いと思って」

— 確かに、周りに影響されない強さを感じます。

「例えば、“あの人たちは新宿駅とかの大きな街頭ビジョンで流れているビルボードなどのランキングを見てどう思ってるんだろう？ 自分は将来どっちになるんだろう？”と漠然と思ったんです。それは別に音楽だけでなく、会社に入ったとしても同じで。ただ自分がやりたいからやっている人と、“昇り詰めた！”と思っている

人とは、考え方自体が違うじゃないですか。自分はやりたいことをやる人のほうがきれいに見えただけで、大人になった時にどっちを選ぶのかなと思って。不安や憧れといったいろいろな気持ちが混ざって、この「黒いエレキ」を書いたのかなと、今になって思います」

— 2曲目の「リリー」は勢いのある爽快な楽曲です。

「もともと原作がコミックのドラマ主題歌の話があって。これに関しては歌詞もすごく考えました。その漫画はいろいろなタイプの男性に対して、主人公の女の子が罵倒していくという話だったんですけど、女の子は本当に好きな人を探してるんだろかなと思ったんです。その姿を花に例えたら何なるのかと思って調べたら、リリーには“純白”みたいな花言葉があったので、それをもとに作ろうと。サウンドに関しては“勢いのあるものにしてほしい”とリクエストがあったからこういう感じになりました。編曲担当のkeebowさんはインディーズ時代からずっと一緒にやってきた方で、他の曲はスタジオ内で完成させたんですけど、keebowさんとはオンライン上で“こんな感じがいいです”とやり取りしました」

— 「片瀬」は好きな人との心のやり取りを描いたエモーショナルなナンバーですが、この曲については？

「これは20歳ぐらいの時に書いた曲で、それまでは自分の思考の中にあることが好きだったから、外側の世界にあまり気持ちが向かなかったり、視線が行かなかったりしたんです。正直に言うと、海とか見てもきれいと思ったことがなくて…。それは地元がニュータウンだったので、無機質な建物が並び、道もずっと一直線で続いているようなところで育ったことが影響しているんだと思うんですけど。で、20歳ぐらいの時に好きな人と片瀬江ノ島まで海を見に行くことがあって。その好きな人は何に対しても純粋で、子供のまま大人になっただけの人だったんです。だから、その人と一緒に海を見た時、初めて

“すごくきれいだな”と思えたんです。その海がきれいという事実よりも、私自身が海を“きれいだな”と思えたことが嬉しくて、その時にちょっと自分が変わった気がしたんです」

— それはすごい転機ですね。

「それまでは家で体育座りしていたような気持ちだったけど、連れ出してくれる人がいるだけで、こんなに入って変わるんだなと思って。だから、その日のことは今でもすごく覚えていて、宝物みたいに大事にしています。さらにもうひとつ話があるんです。その時に、ちょうど会社員の友達が心の病になってしまって、会社を辞めてずっと部屋に閉じこもることを聞いて。その友達が“一緒に住んでいる恋人がいつも帰り道にお花屋さんで花を一本買ってきてくれて、その花を生けて窓際に飾るのが毎日の楽しみなんだよね”と言った時に、すごくその子の気持ちが分かってリンクしたんです。この曲はその女の子にも捧げた曲だし、私自身もその経験をして変わったという曲なんです。そういう意味でも歌う時はすごく大事にしているし、編曲はMETAFIVEのゴンドウトモヒコさんなのですが、“話し声を入れたい”とか“サビではこうしたい”とか、じっくりやり取りをして作っていました」

— そして、「嫉妬しろよ」はストレートな恋愛の歌ですね。

「当時は一緒に音楽を始めた友達がみんなメジャーデビューしたり、レーベルに所属したりして、周りがかっこいい分、“なんで自分はこうなんだろう？”と悩んでいて。恋愛に依存して、彼氏の家に入り浸っている時期に書いた曲です(笑)。今、この曲はYouTubeで公開されているんですけど、当時の私の気持ちに近いメッセージやコメントが書かれているのを見ると、“ああ、懐かしい気持ちだな。私はこの感情を知っている”と思うんですよ。今では好きになることと依存することは違うと分かっているし、こういうものに入り込むことはもうないだろうから、その時にしか書けなかった曲だと思ってます」

— 「23:13」は今作の中では比較的新しく、今の西片さんにもっとも近い曲だそうです。

「昨年の夏か秋、とても憧れていた人がいた時に書いた曲になります。その人に“私は西片の曲を聴いても何も思わない”と言われて」

— ええ！？

「理由を訊いたら、“私はひとりでも生きていけるし、誰かに依存したり、想いを馳せなくても大丈夫だから”と言われて。それで納得したんですね。その人の人生が縦だとしたら私は横にいて、決して交わるころはなく、これからずっとそうやって生きていくんだなって。そしたら、とてもつらく思えてきて。それが23時13分だったんです」

— 「23:13」で影響されない人とのことを描きつつ、最後の楽曲は《男は元カノの成分で8割型出来ているらしい》と歌う《元カノの成分》で、“私はこういう人なのよ”と西片さんらしく締められているんですね。

「誰かとぶつかったり、共有したりすることで生まれる楽曲がほとんどなので、「元カノの成分」で締めたのはそういう意味がありますね」

取材:キャベトンコ



このインタビューの全文を公開中!!!



『彼女がいなければ孤独だった』



Album 9/23 Release
日本コロムビア
C00B-54301
¥2,300(税抜)

music UP's Q!

今月のお題:「最近買って良かったもの」

■スニーカー

「今日も履いてきてるんですけど、ニューバランスのスニーカーを買いました。私、緩ついでが好きで、デザイン性を重視して、3キロぐらいあるんじゃないかってくらいに重い靴ばかり買ってたんですよ。海外のブランドのものが好きなんで、輸入したりして。国によって足のサイズが違うから、なかなか自分に合うものがないんですけど、可愛いから高くても買ってたんす。でも、さすがに足が疲れるし、ニューバランスだと軽いかなと思って。買ったのはメンズなんですけど、デザインも気に入ってるし、軽いし…あと、やっぱり足にフィットするってめちゃいい(笑)。ジョギングする時も履いているし、さまざまな場面において役立ってますね。レコード会社の前の急な坂も楽勝でした！(笑) これを機にスニーカー好きになるかもしれないです」



ほのかりん

作詞に時間はかかったけど、初心に戻ることができた

シンガーソングライター・ほのかりんがFODオリジナルドラマ『30禁 それは30歳未満お断りの恋。』の主題歌として、新曲「おまじない」を書き下ろした。“主人公の気持ちを理解しなきゃって考えすぎて作詞に時間がかかった”と話してくれた彼女。書き下ろし作品を作ることでどんなことを感じたのだろうか？

—今回はドラマの主題歌ということで、どのように曲を作っていましたか？
「テーマが年上女性と年下男性の話なんですけど、原作の漫画を読んで“私は年下の男性と付き合ったことがないから歌詞にできない！ どうしよう？”と。満足のいく歌詞が書けるようになるまで、結構長い時間かかりました。普通に物語を読む分には女の子に感情移入して読み終えるんですけど、歌詞を書くから主人公の子のことをもっと分らなきゃいけない… “この子が持っている切なさとか苦しさを理解しなきゃ”と考えたんです。でも、彼女の思考がなぜそうなるのかが分からなかったから大変でした。私は本能で生きるタイプなので、“なんでそんなことを考えているんだろう？”と思って」
—例えば“何歳までに結婚しなきゃ”とか、主人公は一般的な考えにとらわれて

いたのでしょうか？
「そうそう。いわゆるレールのなことを考えていることとか。もちろん彼女のそういう気持ちは分からなくもないんですけど、“そこまで考えるんだ!?”“みたいなの”
—そこで周囲にいるお姉様方に話を聞いたとのこと。
「私は15歳以上年上のお姉さん方とも遊んで、その中にだいたい年下の彼氏と付き合ってる人がいるんですよ。だから、急いで連絡して“どんな感じなんですか？”といういろいろお話を聞かせてもらいました。その時は分からなかったんですけど、やはりあまり年の差を気にしてないというか。だから、私自身が『30禁 それは30歳未満お断りの恋。』というストーリーに対して、“歳の差”ということを意識しすぎていたのが良くなかった。そう思ったら歌詞がサーッと書けたんです」

—そんな曲に“おまじない”というタイトルをつけたのはどういった想いからですか？
「歌詞が書けないと思っている時でも、タイトルは“おまじない”でいこうと決めていて、タイトルから決めたのは初めてかもしれないです。漫画を読んだ時、おまじない的な要素のシーンがあったので、絶対に“おまじない”というワードを使おうとすぐに思いました。おまじないって“約束”までいかず、ちょっと切なくて、ちょっと期待しているだけみたいなイメージじゃないですか。約束だど“やるよね。こうするよね”みたいな契約的な感じですけど、私の中だとおまじないは“願い”なんです。その切なさがふたりの情景の切なさにな重なったらしいなと」
—おまじないは身近な言葉だけど、タイトルになるとすごくいい言葉だと思えました。

「あまりそれについて考える機会はないですよ」
—それこそ思いつくのは、子供の頃のおまじないごっこですか？
「消しゴムに好きな人の名前を書いて、最後まで使い切ったら成就するとかね」
—ありましたね！ また、前半の歌詞に《貴方を好きになっては いけない理由を / 探すのに 必死になってる / 本当に私なんかでいいの》とありますが、まさにここは歳の差があるカップルならではの感じました。
「そうそう。最初はプレーキをかけているんだけど、歌詞が進むにつれて次第にほぐれていって、その感じがストーリーをなぞっているというか。ストーリーが進む過程を結構意識して書いていきました。心を開いていく様子がとても見える歌詞なんじゃないかと思っています」
—普段も曲を作る時はそういうことは意識します？
「ストーリーを進めることもありますけど、基本は停滞が好きというか。“私、ここにいるんです！”というのが好きなので、あまりハッピーエンドの曲を書かないから珍しいかもしれないですね(笑)。未来の話とか、周りの目とか、年の差とか…そういう自分であけてしまっていた呪いが解けていくみたいな感じです。そう言えば、おまじないって漢字変換すると“お呪い”になるんですよ。文字入力をしてから知ったので、“めっちゃ怖い！”と思いました(笑)」
—ちょっと毒がある言葉ですよ(笑)。あと、中盤で出てくる《二つ並んだ歯ブラシみたいにして / 二人並んで そばにいらして》というところは、ほのかさん独特の目線だと思ったのですが。
「人の家に行って歯ブラシを置くという行為が好きなんです。また行った時に“あ、まだある”って思うとか。それを確かめるのが趣味で(笑)。ふたつあると嬉しくなるんです。親密な仲にならないと歯ブラシがあるという状態にならないじゃないですか。歯ブラシが並ぶことによって

関係性が深まったといった感じで、ふたりがそばにいるようになる…“みたいなの”
—さらに進んでいくと《あの日くれたネックレスみたいにして / 私もちゃんと 残してて》とあって。
「ネックレスが『30禁 それは30歳未満お断りの恋。』のストーリーに出てくるんですよ。いろいろあって、年下の男の子が頑張って買ったブランドのネックレスをもらうというシーンがあるんです。その渡し方が素敵で、“こんな渡し方をされたい！”と思って歌詞に入れてみました(笑)」
—なるほど(笑)。
「アクセサリーは残るじゃないですか。“物に罪はない”と言えども、元カレにももらったネックレスって捨てようと思ったりするし。そのアクセサリーをもらった…気持ちを残すみたいな感じが伝わればいいなと思ってます」
—ネックレスはあくまでも象徴であるんですね。
「そうですね。それを残すということは、気持ちが残るから残しているんだと思うんです。“あの日くれたネックレスみたいにして、私もちゃんと心の中で残しててね”みたいな」
—この曲は歌謡曲的な懐かしさも感じますが、作曲についてはどんなことを考えましたか？
「[[おまじない]]を制作するにあたっては、メロが違うものを4曲くらい書いたんですよ。その中でも《私が幸せになるための おまじない / ゆっくり 私にかけて》という最初のメロディーと歌詞はずっと変わらなくて、それを使いたいがために違うメロを書いってみたいなの感じだったので、その2行にすごくこだわりを持っていました」
—そこを活かすために、どんな曲にすればいいかを考えた？
「そうですね。そこが大切すぎて、もはやサビとか分からないみたいな。その2行ができた時点で、とても満足していたんですよ(笑)」
—その冒頭の部分は本当にスツと入ってきます。
「冒頭の2行で“何かあったな”という感

じじゃないですか。それこそ冒頭のメロディーは他のサビとかにもまったく出てこないの、そこを一番大事に作りました」
—今回、主題歌を作るという経験をしたことでどんなことを感じましたか？
「これまで一回だけ男の子に楽曲提供(あつとくんのデビューシングル「Crazy Crash / ラマ」収録の「ラマ」)したことがあって。その時に“人のためならすぐ書きやすい”と思ったんですよ。その子のイメージを出してあげる曲を作るのはとても楽しいし、今回もテーマがあるからすぐにできるんじゃないかと思っていました。でも、シンプルに初心に戻ったおかげで書けるようになったね。音楽を始めた頃の頃は一日一曲は絶対に作るモードに入っていた時があったんですけど、そこから今は“自分がこうなりたいからこういう曲を作る”とか“こういう曲を作りたい”みたいになって。今回の経験はいろいろ複雑に考えてしまう私を解放してくれたと思います」

取材:キャベトンコ



このインタビューの全文を公開中!!▶



「おまじない」



Digital Single
9/16 Release
フォーライフミュージック
エンタテイメント

music UP's Q!

今月のお題:「最近買って良かったもの」

■クッションファンデーション

「くならないものしか買ってないんですけど(笑)…あ、ちょっと前のことでもいいですか？ 私、すごいコスメが好きで、この間、イヴ・サンローランにクッションファンデを買って行ったら、ちょうど期間限定でパッケージが何種類か選べたんですよ。名前を彫ってくれたりもして、で、店員さんが“どれがいいですか？”って持ってきたんですけど、最初持ってきたやつがめちゃくちゃ可愛くて、他のものを見ずに“それにします！”って言ったんですよ。そしたら“あ、こちらだけ少々高く”って言われて、3万円くらいしたんです。他のものはどれも7,000円くらいなのに。でも、買ったちゃいましたよー。今日も持ってきてるんですけど、私化粧直ししないから持ってるだけなんです。まあ、買って嬉しかったという逸品です。でも、先に他のものを見てたら買ってなかったかもしれないですよ。あの店員さん、きっと営業成績ナンバー1ですよ」



森久保祥太郎

2020年上半期から夏までにかけて 僕の中で蠢いていた感情が詰まってる

“WAY OUT (=出口)”の名を掲げたニューシングルは、ラウドロックという森久保節でありながらも、アツいメッセージを携えて、見事“価値観のアップデート”を成功させている。新たなスタイルの構築へと燃える男の言葉から、今を生きるためのヒントを見つけてほしい。

—前作から2カ月振りのシングルということで、今年に入ってかなりハイペースのリリースですね。
「7月の「I'm Nobody」はタイアップだったので、リリースとしては急遽決まったものだったんですよ。逆に10月のツアーを

控えた今回のタイミングで新曲を出そうというのは昨年から考えていたことで、その時点では2年振りのソロシングルになる予定だったから、ここで“This is 森久保節”…ちょっとラウドめのをやりたいなと。ただ、その制作をしていたのが5月と

か6月とかの世の中の状況が日々変わっていた時だったんですよ。なので、“自分が発したいメッセージって何だろう？”と自分の中でも混乱していました」

—分かります。コロナ禍の真っただ中で、誰もが不安を抱えていましたから。「でも、こんな非常時だからこそ、日常では感じられない感情をかたちにしたいという想いはあったんです。東日本大震災の時も、アメリカの同時多発テロの時も、それで曲を書いています。なので、あまり速い曲じゃなく、どっしりとメッセージだったり想いを乗せられる曲というイメージだけを、ずっと一緒にやってる井上日徳さんに伝えて曲を作ってもらいました。“Aメロはメロディーをつけずにトラックだけ作っておくから、ラップみたいに好きなように乗せてみれば？”って言うてくれて、“あっ、いいですね”とか応えながら。レコーディングの当日まで歌詞が書けなかったんですけど(笑)」

—ええ!?
「もともと詞も曲も締め切り間際にならないと降りてこないタイプなんですけど、ついに当日の朝までやって1行も書けなかった。というのも…6月かな？ たまたま夜中、仕事帰りに渋谷のスクランブル交差点を通ったら、人が全然いなかったんですよ。いつも明け方まで人がいる場所だから、“俺だけ世界に取り残されちゃったんじゃないか？”ってくらいゾッとして、そんな光景を見てからモードがちよっとおかしな感じになってたんですよ。何かを作れるような精神状態じゃなかった」

—それは…キツイですね。
「いつも頭に浮かんだ単語やアイデアをスケッチして、そこから世界観を広げて一気に書き上げるんですけど、全然降りてこなくて。でも、なんとなく臆気に見えてきたものがあつたから、レコーディングを1時間遅らせてもらって、3時間ほど寝たんです。で、起きてからもう一回スケッチを見たら、タイトルにもなってる“WAY OUT”っていうワードがあつて、そこから一気につながってブワーッ!と書けたんですよ。で、スタジオに入ってからも、いろいろディスカッションしながら歌っていったという。いつもバシッと決めて行くことから、現場で変えたり悩んだりすることもないので、そんなことは初めてでしたね」
—では、そこで森久保さんが訴えたかったメッセージというのは？
「タイトルの“WAY OUT”というのは“出

口”という意味で使ってるんですけど、図らずも昨年“2020年をどんな年にするか？”っていうのをマネージャーと話していた時に、“いろんなことと価値観を疑ってみよう”っていうテーマが出たんです。昭和に育ってきた僕らと今の人たちでは、物事の価値観も絶対に違うし、僕らが当たり前だと思っていることも、たぶん通用しなかったりする。でも、僕らはそういう人たちに対してエンタメを提示していくわけなんだから、“今までの常識を一回疑ってみようぜ”っていうことですね。今年に入ってからこういう状況になって、誰もがどこにあるのかわからない出口を探しているけれど、それって誰かが決めるものじゃなく、自分が“ここが出口だ”って決めるしかないんですよ。で、僕にとつて出口はイコール“価値観のアップデート”なんです」

—なるほど。コロナの終息だけを出口と考えると、ただ待つだけの日々になってしましますからね。
「そうなんです。コロナ前のやり方が100で、それ以外は100以下って考えちゃうと、不安やネガティブな感情にしか向かわないんですよ。だから、とにかく価値観を変えて、別の100のものを作ればいいっていうことですね。そう自分を鼓舞するための曲でもあり、この曲を書いたことで吹っ切れました。レコーディングでも久しぶりの森久保節で、“あっ、始まった！ 2020年”みたいな感じはありましたね(笑)」

—今回はMVもお洒落ですね。
「MV撮影で今まで僕は数々の廃墟に行ってるんですけど、スタッフがまた新しい廃墟を見つけてくれました！ ただ、今までは病院の跡地とか、何かに使われたあとの廃墟ばかりだったのが、今回は建設途中の廃墟だったんで、なんだかさわやかでした(笑)。ライティングの技術もすごい。今回も曲のメッセージやテーマを監督が深く汲み取ってくれたんで、とても気に入ってます。アーティスト写真のほうも、またデザイナーが張り切っちゃって、これ本物の鎖なんです。普段はそんな

に口出さないプロデューサーも、鎖の縛り方だけは注文をつけてきて“急に鎖だけ？”っていう(笑)」
—アートワークも“解放”というメッセージをうまく表してますよね。
「そうですね。要はそのからの“出口”。その補足的なところがカップリング曲にもあって、言わば「WAY OUT」を書く時に自分の中でパンパンになっちゃった混沌を、表題とカップリング2曲で3分割した感じなんです。World Lineは前回タイアップのお話をいただいた時に最初に出した曲で、そのあとにできた「I'm Nobody」が採用になったんですけど、もったいないからと取っておいたものをエレクトリックギターでリアレンジしたんです。これは“世界線”というタイトルの通り、“どうい世界線で生きるかは自分で決めて、自分で動くんだぜ”ってことに尽きますね」

—ラヴソングにも取れるような、うっすらセクシーな空気感の裏に、そんなメッセージがあつたとは！
「“あっ、行けるかも”と思ったら“ダメ！”みたいな(笑)。世の中自分がそんな感じだったじゃないですか。心がもてあそばれたみたいな、そういう気持ちがある種、恋のやりとりふうにしたんですよ。3曲目の「Alright」は当初、ファンクな感じの跳ねたサウンドを自分で作るつもりだったんですけど、さっき言ったような状況で全然楽しい曲が書けなくて。結局、日徳さんをお願いしました。“Alright = 大丈夫”のひと言を、ひたすら言ってる曲がいいって。たぶん、どこかで自分に“大丈夫”って言い聞かせたかったし、リスナーにも“大丈夫”って言ってあげたかったんですよ。いろんなものを飲み込んで、全部引っくるめて“大丈夫！”っていう感情で満たされたい、これを聴いて元気になってくれたらいいなって」

—なるほど。“Alright”というタイトルから明るい曲をイメージしていたら、予想外にシリアスな曲で意外だったんですけど、そのお話を聞いて納得です。

「そう。ひと筋の光に、この曲がなれたらいいなと、いつも自分の言いたいことを歌うだけで、聴く人に“こう聴いてほしい”って考えては作らないんですけど、なぜか今回は考えましたね。この3曲には、2020年上半期から夏までにかけて僕の中で蠢いていた感情が全部詰まっています」

—普通3曲あれば曲調のバランスを考えたりするものですが、今回はいずれもシリアスな色が強くて、それも音楽的なバラエティーよりも、今の感情をかたちにすることを優先したからですかね。

「確かにそうなんです。いつもどっから音楽的なバランスとかライブ映えとか、そっちの発想から作っていくのに、想いが先行したのは初めてかもしれない」

—今の状況でライブ映えするような曲を作っても活かしようがないですね。
「それ、ふと思ったんですよ。配信でのライブがまだまだ続くことを考えると、いわゆる勢いがあって派手な曲じゃなく、今回だったら「Alright」のようなエモーショナルに歌い上げる曲とかバラードとかのほうが、実は伝わるんじゃないかなって。根底にそういう想定があつたから、自然と伝えたい曲が生まれたのかも知れない。なんか、今、しゃべってて気づきました」

取材：清水素子



このインタビューの全文を公開中!▶



「WAY OUT」



Single 9/16 Release
Lantis
LACM-24017
¥2,300 (税抜)
※Blu-ray付

music UP's a!

今月のお題:「最近買って良かったもの」

■アフリカ布のPCケース
「一昨年からアフリカ布に興味を持って…ビビッドで、色彩も鮮やかなんですよ。日本人のご夫婦がケニアで「RAHA KENYA」というアフリカ布のブランドを立ち上げて、商品を輸出してるんですけど、僕、そのブランドのTwitterをフォローしてるんですよ。Twitterを見てるだけでも気持ちのいい人たちだし、その人たちが扱っているアフリカ布をすごい気に入っちゃって、いつかそれでグッズを作りたいと思ってたりしたら、6月だったかな？ 2日だけ、都内のポップアップショップで即売をやるって知って。コロナの影響でおふたりとも戻ってきて、奥さんが出産されるってこともあって日本にいますよ。なので、その即売に行ったんです。毎日、Twitterで見えていた人が目の前にいたからテンションが上がっちゃって、“いつもTwitterを見ます！ ファンです！”とか言ったり(笑)。ご夫婦に会えたことが、まず嬉しかったですね。で、その時にアフリカ布のPCケースを買ったんです。いろんな想いも込みで、それが“買って良かったもの”ですね。まあ、ネットでも買えたんですけど、やっぱり実物を見て買ったかったの。もちろん、毎日持ち歩いていますよ」

THE PINBALLS



L→R 石原 天(Dr)、森下拓貴(Ba)、古川貴之(Vo)、中屋智裕(Gu)

“セルフカバー”というよりも“リブート”というイメージがある

10カ月振りにリリースする『Dress up』は全11曲収録のアコースティック・セルフカバーアルバム。“アコースティック”と銘打ってはいるものの、バイオリン、ピアノ、サクソも加えたアレンジは、そんなひと言には収まりきらないジャジーでリッチなものに。メンバー4人の発言が挑戦の大きさを物語る作品の制作背景を探りたい。

—『Dress up』は“アコースティック・セルフカバーアルバム”とのことです。古川：もちろん新曲も作っていて、これからレコーディングするんですけど、新型コロナウイルスの影響でライブができなくなった時間を使って、せっかくだからいろいろやりたいと思って、これまでやってこなかった新しいことをやってみることにしました。森下：リリースするかしないかは別として、話としては昨年ぐらいからあったんですよ。

—昨年ぐらいから話が出ていたということは、以前からアコースティックアレンジに興味があったわけですね？

古川：俺は常にありました。欲張りだから何でもかんでもやりたいんです。だから、“こういう楽器を入れたい”っていうアイデアはこれまでもあったんですけど、そのたびに中屋が“じゃあ、バンドでやる意味って何なんだ？”ってロックバンドにいる意

味って何なんだ？”って。中屋のそういう首尾一貫したところは好きだし、だからこそ一緒にバンドをやっていて楽しいんで、中屋の意見を尊重してきましたけど、今回はうちのエースである中屋と他のミュージシャンをぶつけてみたかったんです。そしたら、すごく良くて！しかも、中屋のリードギターが他の楽器に全然負けていなかった。だから、“いいじゃん！”って中屋に言ってやりました(笑)。

—古川さん以外の3人も興味はあったのですか？

森下：昨年のLINE LIVEではアコースティック編成で3曲ほどやらせてもらったり、リリースイベントでアコースティックライブもやったりしましたけど、たまにやるぐらいだし、作品としてリリースしようとはまだ、正直言って考えたことはなかったです。だから、“1曲か2曲録って、何かの特典で付けるんだらうな”ってぐらいに思っていたから、“フルアルバムとしてがつり

やるんだ！”って(笑)。石原：まあ、チャレンジするという意味では良かったんですけどね。

—みなさん、普段からジャズやR&Bに興味があるんだと思ってました。実際、そういうアルバムに聴こえる。

中屋：そういう音楽も好きですけどね。ロックンロールは大好きなんですけど、メインで聴くかと言ったらそうでもないの。特にブルースはすごく好きで、高校生の頃はとり憑かれたように聴いていたし、もちろん、ジャズも大好きだし。

古川：むしろ、やってみたらコード進行を含め、そういうアレンジに合う曲が多かったですね。

森下：さっき古川も言っていたように、基本編成外の楽器を入れたらより良くなるんじゃないかとは思いつつ、でも、ライブは4人でやるんだから”って、今までは4人で完結させていたんです。今回、そのリミッターが外れて、入れたい楽器を

入れてみたら、僕ら4人はしんどかったけど、楽曲的にはすごく活きた…そもそも活きるだろうと思ったから、最初からNOとは言わずに、とりあえずやってみるかってなったんです。

—選曲はどんなふうにした？

古川：中屋と俺でアコースティックに合いそうな曲を探っていました。合うと思ってやってみたらダメな曲もあったんですけど、とことん合う曲は合ったんですよ。だから、選曲したというよりは、合いそうな曲を生か残らせていたみたいなのところはありますね。あと、オリジナルを作った時、“本当はこうしたかった”という曲もあったので、それができたのは嬉しかったです。

—アレンジは中屋さんが考えて、みんなに投げたそうですね。

中屋：何曲かやりましたね。

古川：中屋が打ち込んでデモを作ってくれて、あとは、楽器を鳴らしながら考えたり。

森下：レコーディング中も誰かが音を入れている時は、残りのメンバーが別の部屋でジャカジャカやりながら、同時進行でやりました(笑)。

石原：中屋がアレンジを作ってくれた曲のほうが、全体像が見えてやりやすかったのはありますね。

—結果的に“アコースティック・セルフカバー”のひとつでは、とても表現しきれないものになりましたね。

古川：そうですね。分かりやすいからそういうふうには言っていますが、どちらかと言うとジャズアレンジっぽい。“セルフカバー”というよりも“リブート”というイメージがあります。

—バイオリン、ピアノ、サクソといった楽器をゲストミュージシャンが演奏していますが、自分たちも普段は使わない楽器を演奏したのでしょうか？

古川：カホンを含め、石ちゃんは多かった

よね。石原：ブラシも初めて使いました。レコーディングの時、急に“ブラシでやってみようか”って言われて。ほんとにブラシって擦るように演奏すると思うんですけど、結局はぶっ叩きました(笑)。今回はそれが逆に良かったと思って…まあ、練習しなきゃいけないってちょっと思いましたね。

森下：俺も初めてレコーディングでアコースティックベースを弾きました。音作り、ブレイはどういうものかいいのかわかる、トーンを絞ってミュートして…音はこもるんだけど、ポーン！と前に出るような音で録りました。

古川：俺もアコギを弾きましたが、中屋が一番苦労したと思いますね。ガットギターとか…

中屋：いや、ギターしか弾いていないから(笑)。

古川：でも、全然違うじゃん。

中屋：確かに、これまではピックに頼っていたか思い知らされましたね。フィンガリング(指弾き)ってTHE PINBALLSの曲では普段やらないんで、何年もやっていなかったから、やらないと下手になると反省しました。

—アレンジのみならず、プレイ面でもそれぞれに挑戦があったわけですね。

古川：なので、やって良かったです。

—歌はどうでした？ オケが変われば、もちろん歌い方も変わると思うのですが。

古川：最初はオケを無視して突っ走ってやろうかと思ったんですけど、やっぱり合わなかったです。オリジナルより下品に歌ってやろうと思って音楽は調和だから、ひとりだけ浮いちゃうんですよ。さすがにそれは気持ち悪くなかったですね。だから、オケに入り込むように歌いました。そしたら小さく歌っているんだけど、そのほうが強く聴こえて。“やっぱり、これだな”って思

いましたね。いい音がいっぱい鳴っているから歌っていても気持ちいいんですよ。声も乗るし、“いい歌だな。すげえな、俺”って思いながら録ってました(笑)。

森下：最初は“大丈夫かな？”と思いましたが、古川の中でいろいろなものを試してやって…この間、喉をやったばかりだから、また痛めてしまうのを心配していたら、いい歌を歌ってくれましたね。

—今回の経験をきっかけに、今後、基本編成以外の楽器をバンドサウンドに加える可能性はありますか？

古川：中屋と話したんですけど、必要だったら入れたいんじゃないかって言ってくれましたね。

中屋：いや、前から絶対に入れないとは言っていないですよ。必要なら入れるべきだし、必要じゃないなら入れないほうがいい。そこは前から全然変わっていないです。単純にカッコ良ければいい。難しく考える必要はないんですよ。

古川：そうだね。俺がひとりでも騒いでいるだけだ。

石原：そういうところあるよね(笑)。

取材：山口智男

OKmusic

このインタビューの全文を公開中!!



『Dress up』



Album 9/16 Release
日本コロムビア
COCP-41235
¥2,200(税別)

music UP's a!

今月のお題：『最近買って良かったもの』

■古川貴之…『リトル・ショップ・オブ・ホラーズ』のDVD

「植物が人を食うというアメリカのB級ホラー映画で、新しいものと古いものの両方を買ったんですけど、どちらも良かったです。新しいほうはミュージカルなんですけど、植物もCGじゃなくて人形で、きつトラジコンとかで動かしているんだと思うんですけど、それが本物っぽくて面白かった。買って良かったです」

■中屋智裕…棚

「玄関に置く棚が欲しかったんですけど、そのスペースにぴったり合うものってなかなかないから、自分で作ろうと思ってたんです。でも、家に工具がないし、おがくすとかで結構散らかるじゃないですか。だから、いろいろ探したら、自分のイメージに近くて、サイズもいい感じのものを見つけたんで、それを買いました」

■森下拓貴…洗濯機

「初めてドラム式を買ったんですけど、25万円しました。めっちゃ高かったけど、乾燥機付きだし、洗濯物もまったく皺にならないんですよ。いつもライブで着ているワイシャツはクリーニングに出してんですけど、“おうちクリーニング”みたいな設定があって普通に洗えるし、25万円の価値はありますね」

■石原天…珪藻土バスマット

「名前が分からないんですけど(笑)、石みたいな風呂場の足拭きマットを買いました。マットを洗うのって面倒くさいじゃないですか。濡れたまま放置できるんで、めっちゃいいですよ」

GLIM SPANKY



L→R 松尾レミ(Vo&Gu)、亀本寛貴(Gu)

GLIM SPANKY という総合的なポップスにチャレンジした

苦境を乗り越え、困難には柔軟な姿勢と豊潤な発想で打ち勝ち、心のスイッチを自在に切り替えながら完成させたアルバム『Walking On Fire』。“今”だからこそ生まれた、2020年のGLIM SPANKYが歌い奏でる音楽は強くてやさしく、そしてしなやかだ。

—コロナは音楽の世界にも大きな影響を及ぼしましたが、おふたりの音楽への触れ方、向き合い方に変化はありましたか？
松尾：私は一時期、家にこもりまくってたのですが、ひとり暮らしをしているとめっちゃ孤独で。最初の頃は音楽を聴く気にさえならなくて、“おうち時間”を充実させてみたのですが、やっぱり無音状態では寂しくて。そんな中、思いきって音楽を流してみたら、その瞬間に忘れていた音楽の力を改めて実感したんです。そこからは音楽のパワーで乗りきってきたので、“自分たちの音楽を聴いて少しでも元気になれた人がいたらいいな”と思って宅録で曲を作ったりとか、アルバム制作にもより力が入りました。

亀本：僕は人とコミュニケーションを結

構ってました。友達とLINEのビデオ電話で会話したり、Instagramでライブ配信をやってファンの人たちとやり取りしたり。そういう中で、音楽だけじゃなく、どの業界でもオンラインというのは重要視しなきゃいけなくなっているというのは感じましたね。インターネットを活用する動きは、ますます加速していきそうです。
—レミさんがおっしゃった“孤独”というのは、今回のアルバムを聴いても感じていますか？
松尾：されていると思います。今回のアルバムは孤独から抜け出すとか、そういうことをいろんな曲でいろんな視点から歌っているんです。それがアルバムの中でだったり、GLIM SPANKYの過去曲のアン

サーソングになっていたりもして。例えば「By Myself Again」は「大人になったら」(2015年4月発表の配信シングル)の反対側にあるアンサーソングです。そういうふうにいるいろんな感じが「孤独」というキーワードが今の状況と合わせて大きく伝わるのかもかもしれません。
—「By Myself Again」が主題歌になっている映画『美りゆく』の舞台は地元長野でしたね。
松尾：はい。私たちが通っていた高校がある街です。しかも、テーマが自分たちにもリアルなことだったので、それをやさしさでもって包み込み、なおかつ田舎の風景を表現できるものにしたくて、フォーキーでカントリーチックなサウンドにしました。

亀本：もともとそういう音楽が得意ですし、オーガニックなものや懐かしいものは松尾さんの声にハマるからやりやすいですね。ただ、メロディーやコード進行は今まで以上にポップに作ったよね？
松尾：そうだね。サビのところは歌い方も変えています。今までのフォーキーでカントリーなものよりもポップなアプローチにしたかったの。

—「ストーリーの先に」(2019年11月発表のシングル)の時に“新しいジャンルにいろいろトライできた”とおっしゃってましたが、得意技のひとつと捻りを含め、アルバムのどの曲でも新しい世界を感じます。
亀本：それは個人的に一番のコンセプトだったというか…トオミヨウさんやmabanuaさんにプロデュースをお願いしたのは、いろいろなサウンドやモダンなアプローチを試したかったからです。ただのロックは古典芸能で、もはやポピュラーミュージックとも違うものになっていると感じて。だから、自分たちのベーシックな部分とロック的ではないビートを組み合わせて、GLIM SPANKYという総合的なポップスにしたいという気持ちが強かったんです。そこにトライできた第一弾としては、すごくいい作品になったと思っています。

—確かに。ルーツ的な部分を消化・昇華している印象もありました。
松尾：自分の中では結構攻めた、今までのアプローチとは違う歌詞や曲の作り方をしたので、亀本が言ったようにモダンなサウンドメイクとかが合うと思って、今回は進めていきましたね。でも、私はジャズとかにも興味を持ち出したので、自分の欲望的にはまだまだそういうレトロなものも面白く取り入れていきたいんですよ、表現としては。
—そんな今回のアルバムですが、“知的な不良”みたいなイメージが浮かんだのですが。
松尾：知的な不良!? すごくキーワード

ですね。例えば、どんな感じですか？
—「Lonely Boogie」を最初に聴いた時、まず滲み出る知性と漂う不良性を感じて。
松尾：おー、すごい！ 私の音楽の趣味というのが…例えばすごいガレーロックだとしても、そこにインテリジェンスを感じるものが好きなんです。不良なんだけどインテリジェンスみたいな。そういうものに対する美学があるから、それが表現できるようにしてきたのかな？ 確かに「Lonely Boogie」は歌詞を書くのも楽しかったですね。より自由度もあって。

—「Up To Me」はドラマーでマルチプレイヤーのmabanuaさんとのコラボですが、この曲に関しては？
松尾：ビートをとにかく重視したくて。
亀本：最初は“ドラムを叩いてもらおう”と言ってたんですけど、トータルでプロデュースしてもらったほうがいいと思って。僕のギターと松尾さんのヴォーカル以外のトラックは、mabanuaさんが全部作ってくれました。リモートで成立しているし、すごく今っぽい感じがしますね。

—歌詞はファンタジックなワードを散りばめながらもヒリヒリするようなリアルさがある。
松尾：女性の強さを歌いたいと思ったんです。強い曲はたくさんあるんですけど、女性の強さ、人間の魂の強さを歌うのも、ひとつのメッセージとして伝えたいことだと改めて思っ。自分も日本のロック界隈での女性差別を感じてて…“女ヴォーカル”や“ガールズバンド”って言われたりするけど、“ガールズ”って何だよって。世の中には夢見る女子が白馬に乗った王子様を待っていたり、それを肯定する人もいますよね。だから、歌詞ではそういうイメージで例えましたが、もっと人生の話というか…誰かに何かをしてもらおうと思って持っていて何も起きないし、自分から取りに行くしかないっていうことを、女性としての目線で伝えたかったんです。なお

かつ性別関係なく、伝わるメッセージというのを意識しました。
—アルバムの締め括りは「Circle Of Time」。それも1曲前の「若葉の時」で一旦浄化される感じがあっての。
亀本：僕は「若葉の時」で終わりたかったんですけど、松尾さんが「Circle Of Time」を最後に入れたって。
松尾：この曲は「火の鳥」のコンピレーション(19年10月発表の手塚治虫生誕90周年記念 火の鳥コンピレーションアルバム「NEW GENE, inspired from Phoenix」)のために書き下ろしたんですけど、自分たちの作品の中には存在しないものになってしまう気がしたというのが一番大きな理由で。それがとても悲しかったのと、GLIM SPANKYなりのサイケデリックな要素がある日本語のロックという、ひとつの答えを止めに置いておきたかったんです。最後に突き刺すというか…また次に向かっていくために。

取材：竹内美保



このインタビューの全文を公開中!▶

『Walking On Fire』

Album 10/7 Release
Virgin Music
【初回限定盤】(2CD+DVD)
TYCT-69177
¥4,800(税抜)

【通常盤】(CD)
TYCT-60162
¥2,800(税抜)

music UP's a!

今月のお題：「最近買って良かったもの」

■松尾レミ…洗眼剤

「昨日買って、昨日と今日使ってみただんですけど、めっちゃ良かったんですよ。プライベート丸出してますね(笑)。最近、ずっとパソコンを使っていると目が霞んできて。なんか気持ち悪いなと思って洗眼剤を買って目を洗ったら、すごく爽快！今、歯医者に通ってるんですけど、通うようになってから、歯とか目とかは自宅である程度はケアしないといけないなって思ったんですよ。なので、それきりかかって買ったというのがありますね。でも、ほんと快適です！気持ちもリフレッシュされるし、作業も捗りますね。集中力もアップするのでオススメです。「アイボン」

■亀本寛貴…サンダル

「1カ月くらい前に無印良品でサンダルを買いました。ただの黒いサンダルなんですけど、無印良品らしく当たり障りなく、無駄なことをしないという、無駄なテイストを加えず、不足もしていないという。スラックスにも合うし、デニムにも合うし、半パンにも合うシンプルでデザインなんですよ。この夏はこれで全部いけるなって。実際、ほぼ毎日履いてます。8月は靴を一回も履いてないんじゃないかな？ すごく楽だし、何でも合うし。そのラフさから、撮影の時にスタジオの備品に間違えられました(笑)」

T.MORIYAMMER

“こんな状況だからこそ楽しもう”っていうものに仕上がった

THE MODSのフロントマンである森山達也が35年振りとなるソロ作品「GET YOURSELF」を完成させた。ユーモアを感じさせる“T.MORIYAMMER”という名義をはじめ、盟友の岩川浩二（THE COLTS、THE MACKSHOW）とともに作り上げた本作には、どんな想いがあるのかを語ってもらった。

—コロナ禍で「THE MODS TOUR 2019-2020 “KICK ON BOOTS”」の後半6公演が中止となり、そのあとに控えていた「THE MODS Premium Acoustic Tour 2020 “BLUES BRIGADE II”」も全公演が中止になったわけですが、これはかなりキツイですよ。ね。「KICK ON BOOTS」は森山さんの椎間板ヘルニアの悪化で延期になったツアーの振替でもあったので。

「ヘルニアの時さえ、ファンに迷惑をかけたし、かなり自分も落ち込んだからね。なんとか回復して、“さあ、やろう!”ってツアーをスタートさせて、何本かやっただんですけど、途中ぐらいいからコロナが話題になってきて、3月の下旬くらいに中断になったのかな？もうね、ショックでしたよ。俺たちにとってライブができないのは死と一緒に死すから」

—その後、緊急事態宣言が発令され、

ライブどころかスタジオにも入れなくなりましてね。

「正直言って最初の頃はそんなに長引かないと甘く思ってたんだけど、全然そういう感じじゃなく、緊急事態宣言が出て“当分ライブができなくなるから覚悟しないといけない”って思いましたね。ライブができるできないことよりも、お金を稼がないと食っていけないし、事務所も運営していけないといけないし、そういうことについても考えないとダメだからしんどかった…まあ、それは今なおそうなんですけど（苦笑）」

—配信ライブ、投げ銭ライブ、YouTubeチャンネルなど、いろいろ試行錯誤しているバンドやアーティストがありますが、それについてはどう思われますか？

「それをやるしかないよね。俺たちのような職業…ライブハウスのロックバンドにとって“三密になってはいけない”ってのは、さっき言ったように死と同じですから。無観客の配信ライブとか自分たちがやれることは限られているというか、とりあえずそれしかやれないよね。コロナがいつまで長引くかは分からないし、THE MODSも昔のライブ映像を配信したりして…それはファンにプレゼントしたいというもあるけど、自分たちも小銭を稼がないと解散以前に倒産してしまうから。だから、今後も何かしらを提供していきたいと思ってます」

—そんな中、35年振りとなる森山さんのソロ名義の作品がリリースされるわけですが、もともとソロの構想はあったのですか？

「完璧にコロナがあったからですね。まったくソロのことは考えてなかったし。順を追って話すと、「KICK ON BOOTS」のツアーの次にアコースティックツアーをやることは決まっていたから、そのための曲をヘルニアで休んでいた時にざっくりと作ってたんですよ。で、「KICK ON BOOTS」のツアーが再開したんで、それは一旦置いてたんですけど、そのツアーが中断してし

まって時間がたつぷりできたから、また曲を作り始めたんです。それはあくまでもTHE MODSでやるアコースティックの曲ということですね。そうしているうちに緊急事態宣言が出て、“ああ、これはアコースティックのツアーも中止になるかもしれない”と思って、曲作りをやめて様子を見てたんですけど、“うわ、これは当分続くな”って分かってからは、バンドで集まるのは密になって危険だし、なんとなくソロ用の曲を作り始めたって感じですね」

—そのTHE MODS用の曲とソロ用の曲の違いというのは？

「曲を作って“これはTHE MODSに取っておこう”ってなる時があるんですよ。例えばコロナに対してのソックリな歌詞のものはTHE MODSが歌うべきだし、俺がソロで歌う必要はないと思うんですけど、じゃあ、ソロは何を歌うのか？俺の個人的な意識としては、“こんな状況だからこそ楽しもう”っていうものにしたい。アジイトするようにメッセージするんじゃなく、“仕方ないよ。楽しんでいこうよ。ロックンロールは絶対に死なないから”的なものしたいというのにはありましたね」

—今回のソロを“T.MORIYAMMER”という名義にしたのは、35年前のソロとの差別化のためですか？

「35年前のソロとは全然違うわけで…レコーディングスタイルも違うし、いいスタジオでやれないし、あんなにお金をかけられないから、原始的というか、アマチュア時代に戻るわけじゃないけど、そういう発想で作るべきだし、そうせざるを得ない状況だった。だから、“MORIYAMMER”という、ちょっと面白い芸名というのでもいいかなって。まあ、ロック的なジョークですね（笑）」

—そして、岩川浩二さんと制作に取りかかっているわけですが、おふたりでやられているTHE GANG BUSKERSの延長みたいな意識もあつたりするのですか？「それはあんまり意識はしなかったけど、浩二が小さなハウススタジオを持っているから、まずは浩二に連絡をして、ふたりでやろうって伝えて。いろんなミュージシャンを呼ぶと、それだけコロナのリ

スクが高くなるけど、ふたりだったらそこまでリスクはないだろうからって始めた…まあ、そうなるよね。THE GANG BUSKERSじゃないにしても、あいつは若い頃から俺の音楽性をほぼ知ってるから、THE MODSとは違ったツアーの伸びだし、だから、作業も早かったですよ——もともとアコースティックツアーに向けて作られていた楽曲だったんですけど、どれもバンドサウンドでのロックンロールナンバーになってますよね。「アコースティックツアーに向けて作っていたのは、あくまでもTHE MODSのためのもだったから、そこは一旦ストップしたんですよ。だから、それ用に作った曲は一曲も入ってないです。新たにソロ用に作った曲ばかりになります。メロディーや歌詞に関して“これはTHE MODSじゃない”っていうものばかり…とはいえ、聴くのはTHE MODSのファンだから、ニュアンスとして8ビートの曲を入れたりはしたけどね」

—岩川さんがいろいろな楽器を？「そう。リズム関係もそうだし、なかなか評価されないけど（笑）、そういうところはすごく器用で、素晴らしいミュージシャンなんですよ。あいつのスタジオにしても、決して広くはないけど、機材はビンテージのものにこだわってたりして」

—そんな今作のタイトル曲が「GET YOURSELF」。この曲が表題ということでは、今回の方向性を示しているということですか？

「“なんとなく、今、この気分だな”っていうことですね。だから、今の俺の気分を一番表している曲です」

—セミアコの絡みとウッドベースのウォーキングベース、コーラスワークやグループが60年代あたりのロックの香りを醸しているのですが、森山さんのルーツが出たということですか？「もちろん新しいものを求めていた時代もあるけど、もう年齢的にもいい歳だし、俺たちが新しいものを追いつけずともね、ろくなことにならないから（笑）。新しいものは新しい世代がやるのが一番いい

し、的確だと思うんですよ。そういうものを聴いたり、ちょっとした影響を受けることもあるけど、俺たちは俺たちが一番好きなことをやるべきだと思うし、そうなるとうしてもルーツ的なロックになるよね。逆にそれを今の自分として出せば、俺にとっては新しいものになるから、それはそれでいいんじゃないかなって。ロックンロールってそうやって転がっていく音楽だし、そこに多少なりとも若い人が引っかってくれたら素敵なことだと思うし」

—4曲入りとはいえ、四者四様のサウンドとグループの本作ですが、どの曲もカラッとしているというか、陰の感じが無い作品になりましたね。

「そう。精神的にも重くマイナーコードの曲もあつたんだけど、それは今じゃないというのが自分の中であつたし。THE MODSだったら違ってたかたちの突き抜けたものにできたかもしれないけど、俺と浩二とでやるんだから、ただのパカでいいんじゃないかって（笑）。ロック好きなバカがやってることを届けるのが、今は一番いいと思うわけ。原始的な喜びだった、原始的な衝動を伝えたいし、自分たちも感じ直さないといけないし、ロックも全部盗まれてるわけだからね。まあ、怒りの部分はTHE MODSで出しますよ（笑）」

取材：石田博爾

okmusic

このインタビューの全文を公開中!!▶



「GET YOURSELF」



Single 9/23 Release
ROCKAHOLIC Inc.
RHR-201
¥1,500 (税込)

※ライブ会場・通信販売・デジタルリリースのみ。
<https://rockaholic.oonk.net/>

music UP's Q!

今月のお題：「最近買って良かったもの」

■ギター

「今回のソロに合うかなと思ってギターを買いました。「GET YOURSELF」のMVでも使っているグレッチのセミアコで…俺、THE MODSではグレッチのギターをあんまり弾いてないんですよ。だから、これが一番の買い物ですね。前から欲しいとは思ってたけど、別に急いで買う必要はないし…と思ってたんだよね。でも、今回のソロのこともあったし、たまたまネットで楽器を見ていたら結構いい感じのものがあつたんで。まあ、そういうタイミングが重なったってことですね。今回のレコーディングでは、そのギターをメインで使っていました」



←R 小林 瞳(Dr)、浅井健一(Vo & Gu)、中尾憲太郎(Be)

KENICHI ASAI & THE INTERCHANGE KILLS

出し惜しみなくというか、選りすぐりの3曲を出した

約2年半振りとなるシングル「TOO BLUE」。浅井健一 & THE INTERCHANGE KILLS では初となる浅井健一(Vo & Gu)と小林 瞳(Dr)の共作「送る歌」を含む3曲を収録した同作のことはじめ、新たなスタイルを取り入れて変化を続けるバンドの今、そして音楽家としての心境について浅井に語ってもらった。

— 自粛期間がありましたけど、元気にされてましたか？ また、期間中となる4月や5月頃は何をされていたんでしょうか？
 「全然、元気でしたよ。6月10日に「神様はいつも両方を作る」という本を出したんだけど、その本をまとめ上げていました。あと、9月8日に出したインストゥルメンタルアルバム『SPINNING MARGARET』(SHALLOW WELL 名義)を小林 瞳ちゃんと一生懸命作っていましたね。それで結構忙しかった」
 — 浅井健一 & THE INTERCHANGE KILLS(以下、KILLS)としてリリースされる今回のシングル「TOO BLUE」の制作はいつ頃から始められましたか？
 「4月ぐらいかな？ インストゥルメンタ

ルアルバムと同ぐらいでしたね。KILLSのアルバムも作っていて、3つ同時にやっていたから…忙しかったね」
 — アルバムを同時進行で作っていて、そこから先行リリースというニュアンスになるんでしょうか？
 「アルバムを出すのにあたって、やっぱりツアーができる状態を出したいからタイミングが見えなくて。でも、シングルは出し惜しみなくというか、選りすぐりの3曲を出したって感じです」
 — 今回のシングルの楽曲を作ったのは昨年になるんですか？
 「「TOO BLUE」は昨年に片鱗ができて、ツアー中に未完成のまま宇宙語で歌っていたりしたね。歌詞ができてちゃんと作ったのは今年の3月くらい。「JODY」は

「TOO BLUE」超えをしようっていうことで、今年の6月にスタジオに再度入って録り直したんだ。「JODY」もすごく気に入っていたけど、「TOO BLUE」のほうがキャッチーだと思って表題曲になったんですよ」
 — そうですよ。タイプが全然違う曲です。し。
 「あと、「送る歌」は今年の春くらいかな？ リズムは打ち込みで作って、瞳ちゃんがベースラインを作るとどうなるんだろうと思ひ、瞳ちゃんとじっくり作った曲ですね。ベースは実際に弾いてみることもとても難しいと実感しました。憲太郎がスーパーなのがよく分かりましたよ」
 — 私は「METEO」(2017年3月発表のアルバム)の時にもお話をうかがったん

ですが、まだバンドが始まったくらいの時でしたね。
 「その時はまだ瞳ちゃんがドラムのみの人だと思ってたんですよ。でも、彼女にはいろんな才能があって、年月とともにだんだんとそれが分かってきてね。その才能を使わないのはもったいないと思って」
 — 歌詞につながることもあるかもしれませんが、本をとて楽しませてもらいました。言い方が合っているか分かりませんが、細かい構成になっているからパッと目に入るページでも、今日の気分でもバラバラと読めるし、いい意味で気楽に接することができる一冊だと思います。
 「ありがとう。そうだね、バラで読めるんだよ。あれは自分で読んでても面白いと思う」
 — あの本は日記になるんですか？
 「日記の部分もあるし、世の中に対する文句もあるしさ」
 — 結構出てきましたね(笑)。それで「TOO BLUE」の歌詞にも《始まりなんだね だから老人は/この世で一番 始まりに近い》と出ていますが、それは本にも書いていたの。
 「何個かシンクロしてる部分があるんだよ。同じ時期に作っているからダブっちゃう」
 — 《世界が壊れるって みんな言ってる》なんかは今の状況とシンクロしたりして。もっと前に書いていた歌詞じゃないかとは思いますが。
 「いや、これに関しては、恐らくコロナウイルスが出てきてからかな？」
 — 何か世界への警告のようにも感じました。
 「俺は何かを警告するよな、そんな偉くないから」
 — 2曲目の「JODY」のタイトルですが、これは人の名前ですか？
 「そうだね。なんだろう？ 架空の人の話というかな」
 — そういうイメージで作った楽曲なんですかね。同じリフですと流れていく感じですが。
 「先にメロディーがあって、一生懸命そのメロディーの中で活きる言葉を探して

いたらそういうかたちになったってことだね」
 — 「送る歌」は瞳さんとの間で“これでやろう！”という楽曲の欠片はあったんですか？
 「だいたいひとりで作って、メンバー3人で作り上げるパターンだったんだけど、瞳ちゃんがメロディメイカーであることが発覚したのと、プラスで俺と瞳ちゃんがギターで合わせるって化学反応が激しかったので、そのスタンスで作ろうという話になったんだよ。それで、作り上げていった曲が何曲もあるんだけど、その中の一個だけ」
 — そうなんですか。ちなみにこの曲ではバイオリンが入っていますか？
 「バイオリンというか、シンセサイザーでメロロンかなんかのストリングスが入ってるんだよ。あれは俺が弾いてますね。あと、瞳ちゃんがピアノを弾いてますけど」
 — そう。ピアノと弦の音が入っている。このようなパターンは面白いですよ。ね。「SHERBETS」の時はよくやってたけど、KILLS では初めてだね」
 — 比べるわけではないですけど、富士久美子さんとプレイヤーとしてのキャラクターが全然違いますよ。ね。
 「全然違うね。両方も好きだな。富士さんのものは、それはそれで大好きなんだけど」
 — では、このKILLSでやれることは、3、4年でどんどん増えてきているって感じなんですか？
 「今年になって一気に増えてるかも。瞳ちゃんがコーラスで参加する率が3年くらい前から徐々に増えてきて、今回は本腰入れて作り上げてみようということになったんだ」
 — 面白いですね。そう言えば昨年、浅井健一名義で『BLOOD SHIFT』のアルバムがあったじゃないですか。あれも半分以上は浅井さんっぽいって思っていました。
 「そうだね。あのアルバムは「送る歌」みたいにしてる曲はないな」
 — だから、浅井さんの中でソロやKILLSなど全部が混ざっていて、まとめていいと

思っているのかなと、あのアルバムを聞いて思ったんですよ。
 「なんかか…混乱してきていますよ」
 — 混乱ですか!? いいことだと思いますけど。
 「そうとらえてもらえるのが一番良くて。長年生きてると部屋にいろんなものが増えてきてゴチャゴチャになるから、たまには整理してあげないかね。音楽活動もそうなんだよ。音楽活動というか、人生そのものが複雑になってくるから、ちゃんと頭を使って無駄のないように整理整頓しなくちゃいけないって思うんだけどね。難しんだよな、それは。しかも、こんなウイルスとかも出てきちゃうと、それは人類全体の問題だからね。…これから絶然なストーリーが待っていたりして」

取材：宮本英夫



このインタビューの全文を公開中!!



「TOO BLUE」



Single 9/16 Release
 Ariola Japan /
 SEXY STONES RECORDS

【初回生産限定盤】
 (CD+DVD)
 BVCL-1066 ~ 7
 ¥2,500(税込)



【通常盤】(CD)
 BVCL 1068
 ¥1,200(税込)

「SPINNING MARGARET」 / SHALLOW WELL



Album 9/8 Release
 SEXY STONES RECORDS
 SSR-054
 ¥3,300(税込)
 ※SEXY STONES ONLINE STORE 限定販売

music UP's a!

今月のお題：「最近買って良かったもの」

■筆ペン

「デザインをする時に英語を筆記体で書くから、筆ペンをよく使うんだよね。これまでいろんなペンを使ってきたけど、「ペンてる」の慶弔サインペンが一番良くて、お店で見つけては買ってたんだけど、この記事が出て売り切れちゃったりしたら困るな(笑)。ちなみに、買ってダメだったものは、海外製の冷蔵庫。その冷蔵庫が5年くらいですごい音が出たから、この間新しいのを買いに行ったんだけど、それが家に配達されるタイミングで急に直ってさ(笑)。海外製が悪いってことはないけど、事務所ですべての日本製の冷蔵庫は上京した時に買って、35年使っていて未だにピンピンしてるからね」



浅井健一 & THE INTERCHANGE KILLS

Interview ... BUCK-TICK、INORAN、GLIM SPANKY、CHiCO with HoneyWorks、三澤紗千香

Editor's Talk Session ... 『コロナ禍を背景にしたライブハウスの発展』 / music UP's Q! ... 『最近買って良かったもの』